

NO. 40
WINTER
1973

英語展望

ELEC BULLETIN

国際展望 中島文雄・海江田進・横川信義・寺嶋真一
「私の英語歴」 今村茂男
対談 「日本人の意識構造と国際環境」
武山泰雄・金山宣夫
「コミュニケーション手段としての英語」

“Silence Is Not Always Golden”
「Mother Goose の世界（その11）」
「世界における外国語教育（3）」
「日・英慣用表現の比較（3）」
“Let's Teach Crossword Puzzles”

英語展望

NO. 40
WINTER
1973

ELEC BULLETIN

Edited by Fumio Nakajima

The English Language Education Council, Inc., Tokyo



【国際展望】

外遊雑感.....	中島文雄	2
英語教育の改革—現実と理想.....	海江田進	5
コスモポリタン英語.....	横川信義	7
アメリカ便り.....	寺嶋真一	9
私の英語歴.....	今村茂男	13

【対談】 日本人の意識構造と国際環境

武山泰雄・金山宣夫.....	15	
コミュニケーション手段としての英語.....	國弘正雄	24
Silence Is Not Always Golden.....	David Hale	32
Mother Goose の世界（その 11）.....	平野敬一	36
世界における外国语教育（3）.....	星山三郎	42
日・英慣用表現の比較（3）.....	長谷川潔	47
Let's Teach Crossword Puzzles.....	Clifford V. Harrington	53
【新刊書評】 比較文学への招待.....	鈴木幸夫	56

『英語冠詞活用辞典』 原口庄輔 58

A Grammatical Analysis of Artistic Representation

of Irish English Daniel J. Allman 61

新刊紹介 62

ELEC 海外英語研修 66

展望通信 68

外遊雑感

NAKAJIMA FUMIO

中島文雄

Hamburg の空港でエスカレーターにのろうとしたら、そこに注意書がある。見ると

BENUTZUNG DER ROLLTREPPE AUF EIGENE GEFahr (エスカレーターの使用は自分の責任で)

とある。これは事故をおこしても知りませんよということ、明らかに使用者に責任のあることを警告しているのである。これを見た途端に私は、昨年ナイアガラの滝を見物したとき、同じような掲示をみたことを思い出した。ナイアガラの巨大な二つの滝の水が一つになって流れ、両側の断崖にはばまれて激流をなすところが Grand Gorge とよばれているが、ここに見物場所ができていて、料金を払うとエレベーターで何メートルか降りて水辺に出ることができる。岸辺の岩石にそって柵があり、長い歩道が作られている。激流を眺めながら歩いて行くと、水を背に一枚の札が手摺りにかけられていた。その文句は

Beyond this barricade at your own risk

というので、ハンブルグのそれと全く同じ警告である。

同じような性質の注意板をバビリアのローテンブルクでも見かけた。この夏は南ドイツの小都市をいくつか見た。Würzburg や Augsburg は中都市であるが、そのほかに人口一万前後の小都市 Ansbach, Rothenburg, Dinkelsbühl, Nördlingen, Landsberg, Garmisch-Partenkirchen, Oberammergau, Lindau などを見てまわり、どっしりと落ちついた街なみや、中世の面影を濃厚に残している城壁、教会、市役所、民家などを見て深い感銘をうけた。それはさておき、ローテンブルクは、いわゆる "romantische Strasse" 沿道の小都市のなかでも美しい町で、その市役所はゴシック様式とルネサンス様式の部分からなる面白い建物である。ゴシック式の部分 (1250年ごろの建物) には塔があって、ここに登ると町のたたずまいや、あたりの森の緑を見わたすことができ、実に美しい景観がたのしめるのであるが、何分にも古い建物であり、塔も小さいので、最上階からこの塔に出るには、ほとんど垂直のせまい梯子をのぼらなければならぬ。梯子のところに注意書がある。

FÜR UNFÄLLE WIRD NICHT GEHAFTET. DER STADTRAT
(事故に対しては責任を負いません。市会)

すべて各人の責任ということになるが、これはいかにも個人主義の発達した国の発想法であって、日本とはちがうと思った。もし誰かが梯子から落ちて怪我をしたら、日本だったら管理者が非難されるであろう。何故もっと安全な梯子にしなかったか。番人は何をしていたか、などと新聞は書き立てるであろう。この市役所の塔の昇り口にも番人はいたが、一人から確かに50ペニヒと記憶するが、料金をとるだけの役である。事故があっても知りませんよで済むのであろう。

* * *

日本人は公徳心がないと言われるし、たしかにそう認めざるをえない事件が多いが、ヨーロッパと紳士淑女ばかりではない。それでも日本にくらべれば公徳心があるといえよう。それは彼らの方が公共の生活に慣れていることと、法律による秩序維持に理解があることによると思う。道義心だけの問題でないことは、英國のいろいろな制札を見ればわかる。私有地に立ち入ってはいけないという立札は、

TRESPASSERS WILL BE PROSECUTED.

「不法侵入者は起訴するべし」というのであるから、「無断立ち入り禁止」というのより大分つよい。Dover 城で見た制札であるが、

ANY PERSON WRITING ON OR SCRATCHING THE FABRIC
OF THIS MONUMENT WILL BE LIABLE TO PROSECUTION.

MINISTRY OF WORKS.

これも「落書きをしてはいけません」より、ずっときびしい。

ロンドンの公園や広場には、あちこちに、ごみを捨てるなという制札が立っている。St. James's Park で見たのは

NO LITTER PLEASE

LEAVING LITTER IS AN OFFENCE FOR WHICH YOU CAN
BE FINED UP TO TEN POUNDS

とあり、Piccadilly Circus の近くで見たのは

LITTER OFFENDERS

LIABLE TO A £10 FINE

とあった。LITTER PENALTY £20 というのも、ほかで見かけたおぼえがある。とにかく罰金いくらと明示しているところが日本とはちがう。犬が道をよごしても罰金がある――

A PERSON IN CHARGE OF A DOG WHICH FOULS THE FOOTWAY IS LIABLE TO A FINE OF £5.

犬は人間の半額でよいらしい。

地下鉄にのると非常警報装置のくさりをいたずらに引っぱると 25 ポンドの罰金と書いてある。この夏 Hampton Court へ行こうと Waterloo Station から汽車にのったらここにもあった――

ALARM

PULL THE CHAIN

PENALTY FOR IMPROPER USE £25

Kenilworth Castle の近くに広大な美しい公園がある。公園というよりも緑の空間といった方がよい。実際にひろびろとしていて、こんな緑地を利用できる住民は、実に仕合せだと、日本人には羨しいかぎりの場所であるが、ここにも制札がある――

KENILWORTH URBAN DISTRICT COUNCIL

THE RIDING OF BICYCLES, TRICYCLES AND OTHER
SIMILAR MACHINES ON ANY PART OF THIS PLEASURE
GROUND IS PROHIBITED UNDER BYELAWS MADE
BY THE KENILWORTH URBAN DISTRICT COUNCIL.

PENALTY £20

ここでも罰金である。そのせいか自転車のようなものは一切見られず（幼児の自転車は見うけられたが）、まことに閑静な遊園地であった。

今度は英国人の憩いの場パブに入つてみよう。壁には次のような掲示がある――

Under the Provisions of the Licensing Act, 1961, a period of 10 minutes is allowed at the end of the morning and evening periods of Permitted Hours for the consumption of alcoholic liquors purchased during such hours. It is an offence for customers to consume alcoholic liquor after this ten minutes period. Maximum Penalty £100.

これによると 1961 年の酒類販売許可法令の条項によつて、昼および夜の営業時間終了後 10 分間は、営業時間内に購入した酒を飲んでもよいが、この 10 分間をすぎて飲んでいると罪になる、最高 100 ポンドの罰金、ということである。パブの主人が “Time, please” といったら帰り仕度にかかるなければならない。くだまいていれば罰

金をくう。

どうも街の美観や社会の秩序は、こういうようにして守られているらしい。単なる公徳心の問題ではない。日本では飲酒運転というような重大な非行も、「酒は飲むまい飲ませまい」などという甘たるい文句で警告するだけである。このなまぬるさが日本の社会に不心得者をのさばらしている大きな原因ではなかろうか。

* * *

パブのことが出たので、少しロンドンのパブについて書いてみる。Charing Cross Station の近く Northumberland Avenue に *The Sherlock Holmes* というパブのあることは、かねて聞いていたので行ってみた。下がバーで二階がグリルルームになっているのであるが、ここにホウムズの居間が再現されていて、彼の遺品やゆかりの品が並べられている。彼の探偵事件に詳しい人なら、それとわかるものである。ホウムズの住所は 221B, Baker Street にあったのであるが、3 年前に私はこの番地を求めてベイカーストリートを歩いたところ、このあたりの番地が欠番になっていることを発見した。

Leicester Square に *Robin Hood Tavern* というパブがある。ここには Robin Hood が使ったという弓が飾られている。そしてその前には彼が射たという熊の首が刺繡になって置いてあり、その目玉のガラスが電気の光でギラギラ輝いていた。夏のロンドンは観光客が多くて、こういうパブは満員でにぎやかで、あまり英國らしい落着きが見られない。観光客目当なのか、テムズ河に船を浮べてパブにしたのがあった。*Old Caledonia* という名前で、場所は Waterloo Bridge と Cleopatra's Needle との丁度中間であった。かなり大きな船で、これもこんでいた。ただ映画「哀愁」にゆかりの橋と、その向うに見える Royal Festival Hall の夜景はきれいであった。

古いロンドンの方に歩を移して Bankside の *The Anchor* というパブに入ってみる。ここはテムズ河の南岸、Southwark Bridge と London Bridge の中間である。Bankside は河沿いに東西に走る狭い通りであるが、*The Anchor* の前のところに河中に突き出たプラットフォームが作られている。夜であったから近くの London Bridge しか見えなかつたが、昼間ならば Tower Bridge やロンドン塔、さらに対岸には St. Paul's の円屋根が見えるはずである。パブの中にはいくつかのバーとレストランがある。いずれも古い時代の木材を使った、エリザベス朝の酒場を偲ばせる造りである。各部屋に名前がついている。曰く Mrs. Thrale's Room, Dr. Johnson's Parlour, The Ale Bar, The Globe Bar, The Clink Bar, The Boswell Bar, The Boswell Grill, The Eliza-

bethan Long Gallery, The Shakespeare Room. これらの名前から、ここがシェイクスピアやグロウブ座、またジョンソン博士と関係のあることが推察されよう。

私は今から40年のむかし Bankside を歩きまわったことがあるので、これらの名前を見て昔がなつかしくなった。今度はあたりを歩きまわる余裕はなかったが、およその見当はついた。このバブのあるところは巨大なビール醸造所 Barclay and Perkins's Brewery の北隣りになっている。この醸造所はもとジョンソン博士の親友であった Mr. Thrale の所有するところであったが、1781年にスレイルが死んで、これが銀行家の Barclay とスレイルの支配人をしていた Perkins とに売られた。その売り立てにはジョンソンも遺言執行人の一人として関係したことが、ボズウェルのジョンソン伝に書かれている。Globe Theatre はこの辺にあったらしい。この醸造所に沿って Bankside から Park Street に入ると煉瓦壁にタブレットが嵌めこんである。これがグロウブ座のありかを示すものである。今度はこれを確かめに行くことができなかつたが、今もそのままあるにちがいない。むかし撮った写真は手許にある。

Park Street の横町に Clink Street というのがある。もとここに刑務所があったので *clink* は prison を意味するようになっている。シェイクスピアは Shoreditch にあった The Theatre が解体され、Bankside に Globe Theatre として再建されたとき (1599)，彼も移って Liberty of the Clink に住むようになり、Stratford に引退するまでここに居たらしい。Liberty というのは囚人が住むことを許された獄外の特別地域という意味であるから、あまり環境はよくなかったのであろう。こういう懐旧の情にふけったものの、The Anchor は人いきれで暑苦しく、ギネスを飲みながら各部屋を歩きまわり、落着かぬまま引上げた。

もう一つ The Londoner というバブに入ったが、これは East End の Limehouse にある。ロンドンの City から、さらに東の方へかなり行ったところである。East End に足を踏みいれたのははじめてであった。The Londoner の番地を控えてこなかつたが、これは West India Dock, East India Dock の近くであり、ドックの労働者や水夫の来るところらしい。このバブも客が多く、にぎやかであったが、夫婦づれで酒をたのしんでいる年輩の人も多く、たのしい雰囲気であった。いかにも英國らしいと感じたが、ジャズバンドがいるのは意外であった。飲みながら話して見ると完全に cockney の英語である。私がむかし Hampstead にいたと言ったら 'Amstead' かという。壁にいろいろ面白い文句が書いて

るので、手帳に控えておいた。

"CHARLIE DILKE FOR THE KIDS—NO BEER!"

Charlie Dilke は milk の rhyming slang であることはすぐわかつた。

"DON'T DILLY DALLY ON THE WAY."

Dilly Dally は dilly-dally として普通の辞書にも収められているから、slang の域を脱していると思う。

"ANYONE GOING TO THE FLEAS AND ITCHERS TONIGHT."

この fleas and itchers は cinema のことだと、cockney のおじさんが教えてくれた。これは pictures の rhyming slang であろう。

"WATCH YOUR SKY WHEN YOU GO TO THE TOBY."

この sky [skɔɪ] は pocket のことだと説明してくれた。[skɔɪ] と発音したので、なるほど cockney だなと痛感した。Partridge の Dictionary of Slang and Unconventional English でひくと sky rocket の後略であることがわかる。Cockney の人たちは、そういう語原や rhyming slang であるということを意識しているのであろうか。最後の toby は toilet のことだと言われたが、この意味は Partridge の辞書には出ていない。

"KEEP YOUR MINCE PIES ON YOUR MANNY GOATS AND TIPPERS."

Mince pies はいうまでもなく eyes のこと。Manny goats は coats で tippers は caps のことだという。酒場へ入ってきて、上衣を脱ぎ帽子をとって釘にかける。それに気をつけろということらしい。Manny Goats は nanny-goats の写しちがいかと思ったが、Partridge を引いてみると Manny はユダヤ名につけられる愛称で Manny Lyons のようにいうとあるので、まちがいではなさそうだ。Tippers は Partridge に出ていないので自信がない。

こんなことを書きとめてから、ふと部屋の一隅に目をやると Victoria と Albert と書いたドアが二つあった。これには思わず吹き出してしまった。ドイツで Sie と Er というドアを見て、こういう書き方もあるのかと思ったが、Victoria と Albert は傑作である。いかにも humorous である。

* * *

Canterbury で Chaucer Hotel というところで昼食をとったとき、給仕が皿をおくときに "Don't touch the plate." といった。"Is it hot?" と聞くと、返事が "Rather warm." 手がつけられないほど熱いのが rather warm ということらしい。英国人の understatement の一例である。

(津田塾大学教授)

英語教育の改革—現実と理想

KAIEDA SUSUMU

海江田進

筆者がいま考えているとおりに、この文を書きます。筆者が考えていることは少し奇抜かもしれません、いわゆる常軌を逸している点があるかもしれません、そういうつもりは少しもないのですが、一部分の読者には不快の念さえ与えるかもしれません。しかし筆者が考えているとおり、ありのままに言わせてください。

「日本では中学・高校・大学で英語を教えているのだが、国民の英語は少しも上達しない。日本人ほど英語のへたな国民は、世界中どこにも存在しない」と、よく言われます。事実そのとおりです。筆者は英語の教師をしていて（もう41年間も英語を教えています）、こういうことを言われるのが、一番つらいのですが、この事実は認めないわけにはいきません。

私のような英語の教師も悪いのです。しかし、個人的な教師のよしあしのほかに、日本人の英語が進歩しない何か根本的な原因がありはしませんか？

英語は、けっしてむずかしいものではありません。英語の内容が経済学・政治学・哲学・自然科学などという場合には、内容そのものが難解なですから、当然英語はむずかしくなります。（そして英語を学ぶ最終最高の目的は、英書を精確に読むことにあります。）しかし、いわゆる語学——社交会話・サービスの会話・英作文など——を学ぶのは、少しもむずかしいことではないのです。ところが、それが私たちにはできない。私たちの英語にはスピードやスマーズネスや自然さがまったく欠けているのです。

英語教師のなかには、自分は教養英語を教えるのだ、と言う人もあります。つまりちょうほうな実用英語、ないしはブルジョアの要求する役に立つ英語、を教えるのではない、と言うんですね。しかし私たちの周囲にいるきわめて多数の学生・生徒の語学の力を見ていますと、いわゆる教養英語も実用英語もない、それ以前の語学教育の本質問題が横たわっている、ということがわかります。

筆者は日本人の英語が進歩しない原因是、次の点にあると思います。私の英語教育改革案——「理想」と銘打

っておきましたが——は、次のとおりです。

まず、日本の英語教師の多くは外国に行ったことがありません。そこで英語教師とその候補者とを全部、ある期間外国に行かせること。日本の英語教師は限られた条件のもとで英語をマスターして、教室でりっぱに英語を教えています。しかし日本の大学で、いわばセカンドハンドで英語を学び、直接生きた英語のふんい気の中で暮らしていないのですから、生きた英語を教えるのには、いろいろむりがあります。教師の教育条件をよくしないで、スムーズに英語を教えることはできないのです。外国へ行く飛行機の中には、日本の学校で毎日英語を教えている人ほど用事のなさそうな人たちが、たくさん乗っているではありませんか。

次に学校のクラスのサイズが大きすぎるのが、日本人の英語が進歩しない原因のひとつだと思います。これは、いろいろの人が問題にしている点ですが、筆者の経験では、大クラスで英語を完全に教えることは、絶対にできません。特に筆者の体験では、大クラスで英作文を満足に教えることができません。いわゆる生きた英語——これは英会話のシノニムでしょうが——も、大クラスでは教えられないでしょう。

夜学の大学などで、200人もの大クラスで、英語を教えているところがあります。それには相当の理由があるのですが、これはもちろん論外で、こういうクラスでは、学力に大差のある学生たちに、内容が比較的高く、英文がやさしいテキストを講義式に訳読してやるよりほか教授方法がありません。

とにかく現在のクラスのサイズを、もっと小さくする必要があります。少なくとも、英作文・英会話の授業時間には、クラスを小さくする必要があります。

私たちの英語が進歩しない原因は、ほかにもいろいろあります。が、次の点も、日本の語学の進歩を著しくおくれさせている原因のひとつだろうと思われます。これは微妙な問題を含んでいることで、また、筆者の考えていることが、客観的に、絶対に正しいとはかぎりませんから、筆にすることを非常にちゅうちょするのですが、ま

えに言いましたように、私がいま考えていることを思ったとおりに書くことにします。

それは、ひとと言でいうと、日本の英学界（英文学・英語学・英語教育）が全体として、理論面・研究面で特別に重く、実際面・教育面で軽くなっている、という事実です。特に日本の大学の場合がそうで、大学生大衆が一般に語学を軽視し、これを勉強しないということも、彼らが英語をマスターすることができない原因ですが、「語学」を教えることになっている教師が、研究だけを重視し、教室で英語を教えることを、何かやっかいな、burdensome な押しつけられた事がらのように片手間にやっている、ということも語学が進歩しない原因です。

胸に手を当てて考えてみると、筆者は、もちろん研究らしい研究をやっていませんが、やはり教室に出て、単純な英語を教えることを、やっかいな事がらのように思っている人間のひとりです。したがって、私は筆に力をこめて言う資格もないのですが、まあ、自戒のつもりで、皆でこうしましょう、というような気持ちで、この文を書くのです。

英語の教師には、研究面——それが英文学の研究であろうと、英語学の研究であろうと、英語教育学の探究であろうと——と、教育面の二面がありますが、後者を不当に軽視してはいけないと思います。私たちの「教え子」——教え子のひとりひとり——は、たとえ現在英語ができず、たまたま英文学に興味を示さないとしても、それぞれりっぱな人間で、私たちの思いもかけない方面に才能をもっていることもあります、将来日本の勤労階級や有識階級になる人々なのです。英語ができない、教師が研究している事に関心を示さないでも、彼らに現代絶対に必要な英語の知識を授け、これをマスターさせないわけにはいきません。教師が学生ひとりひとりの身になって考えてやる、ということが必要でしょう。

ひとりの英文学あるいは英語学の教授がいたとします。彼は英文学・英語学そのものを教えるほか、大学の英文科や外国語学科以外の、経済学あるいは工学を専攻している学生たちのクラスで、平凡な一般英語を教えなければなりません。日本では英文学、現在は米文学や英語学を研究する人々が多数おり、そういう人々は学校で、専攻科目だけを教えるわけにはいかず、まあ、大衆的な一般英語も教えなければならないのです。彼は、そういう教室にはいるとき、当然一種の不満を覚え、教室でうっかり「わたしの専攻は英文学（あるいは英語学）でして…」と言いかねないです。

筆者の知っているある高名な英文学教授は、学校から英文学のほか英文法も教えてもらいたい、と言われたと

いうことを最近聞きました。筆者は、その英文学教授に深く同情しましたが、日本では英文学の授業時間が比較的少なく、いわゆる語学の時間がきわめて多く、ひとりの人が専門科目を独占してしまえば、そのしわよせは他の教師にかかってくるという事実も考えなければならぬのです。

私が言いたいのは、研究室や書斎で、自分が最も強い関心を持っているサブジェクトを研究している人々も、いったん一般英語を教えることを引き受けた以上、英語を教授することに、現在よりもっと熱を入れるべきではないか、ということです。研究者・教師の両資格を等分に持ち、教室に臨むときは、「自分はいま語学教師の資格で、この教室にはいるのである。いらっしゃうけんめい教えよう…」と考えることが必要です。

英文学・英語学・英語教育学の専門家が、英語の発音・サービス会話のはてから、実用英作文まで教えるのは、やっかいなことです。また、専門家のなかには、正直にいって、practical な方面に弱い人もあります。そういう人が、学力の低い学生に初等英語を教え、英作文の添削をするのは、たいへんな仕事ですが、低すぎる日本の英語のレベルを高めるためには、ぼう大な数にのぼる英文学・英語学の専門家たちも、それぞれ手を貸さなければなりません。専門家たちが二重の資格を持つことが必要なのです。きわめて多数の専門家が、自分の好きなことだけをやっている（このような事を言ってすみませんが）、というところに問題があると思います。

上記の事がらは、おもに大学の英語教育に関するのですが、日本には何百の大学が存在し、大部分の大学で英語を教え、教授・学生の数が大きい、ということを考えますと、教授たちが、英語をシャッカリと教えようと決心することは、学生大衆がもっと英語を勉強するということと同様に、日本の英語の姿を変えます。

多くの先生は、理想からほど遠い環境のなかで、力のかぎり英語を教えておられるでしょう。大部分の先生がベストをつくしているでしょう。筆者のヒントは見当ちがいのものであったかもしれません。しかし筆者には、日本の英学界が理論面に重く、実際面に軽く、研究が上位で、教育指導が下位であるような漠然とした印象があり、それが日本人の英語進歩のハンディキャップのひとつに成っているのではないか、と思えますので、奇抜な発言であると考えつつ、このようなことを書いてみたのです。妄言多謝。

（明星大学教授）

コスモポリタン英語

YOKOKAWA NOBUYOSHI
横川信義

ECにイギリスの参加が決まって以来、その本部のあるブリュッセルでは職員たちが英語の特訓にはげんでいるという新聞記事が最近出た。ECの職員たちは大ていが独、仏、伊3か国語をあやつるが、こんどはイギリスの加盟で公用語がもう一つふえた。英語も話せなければ最早一人前とは見なされなくなったという内容である。私のように英語をやっている者——そしてドイツ語やフランス語の知識は怪しげなものにとっては朗報である。イギリスのEC加盟は英語の欧米大陸上陸という副産物も生んだか、と愉快になったのである。

英語が世界で最も広く通用する国際語であることに間違いはなかろう。英語さえ知っていればとにかく何とかやっていけると、われわれは人様に向かっていう。だが現実にヨーロッパを旅行してみると、表玄関だけならともかく、田舎の町などに行くと、英語だけではどうにも仕様のない事態に数限りなく出会ってきた。

数年前のことだが、ドイツ合唱連盟の招きで私の属しているアマチュア合唱団東京リーダーターフェルが、シニツットガルトでの合唱祭に参加しそのあとドイツ国内を演奏旅行して歩いたことがある。ホテルで泊まったこともあったが土地の合唱団員の家に民宿ということもあった。英語の片言のできる里親の家に厄介になったものもいたが、私の里親になったのはリンブルクでは食堂のおやじさん、ジーグブルクではパン屋さん、ハノーバーでは料理店主という工合で、みんな英語はエの字もできない。ほかの例えればフランス語などもできない。こちらはドイツ語はからきしダメときているから处置なしという以外にいい様がない。こちらは独和・和独の辞書を持って行っていたが、急場の役にはなかなか立たないものである。しかしこれだけ見事に言葉がわからないということはむしろ痛快なところもあって、お互いに相手の言わんところを前後の情況やら語調やら身ぶり手まねから悟ろうと努力し、お互いの身の上話まで結構何とか通じ合ったりしてよろこんだものである。

ジーグブルクというのはボン郊外の小さな市だったが、この市長は立派な英語で歓迎のあいさつを述べ

た。しかしそれ以外で英語が役に立った記憶は、ハイデルベルク城趾見学の際に案内人が英語でしゃべってくれた時ぐらいしかない。あとはわれわれの仲間でドイツ語のできる者に全面的に頼るほかなかった。

古いむかし、ストックホルムでタクシーに乗ってある街の番地を訪ねたら、別のところに移転した後で、その家の現在の住人が前住人は引越ししたこと、引越し先はこれこれだということ——たったこれだけをこちらに分らせるために払われた労力たるや大変なものであった。

ローマではタクシーの運転手とひと悶着起こしたことがある。オペラがはねて宿へ帰るのにタクシーに乗ったが、ホテルに着いたところで、運転手はタクシーのメーター以上の料金を請求してきた。だまされるものかどちらはメーターの数字に多少のチップを与えてだけで譲らない。業を煮やした運転手君はホテルに入って行って英語のできる従業員を連れてきて説明させた。夜の10時以後は割増料金になると説明されて、なるほどと思ったが、これなどもお互いに言葉による意思疎通ができるれば何でもないことだったのである。

大陸では英語が通じなくて苦労したことが多かったので、イギリスのEC加盟がきっかけになって、英語がブリュッセルばかりではなくて、その他の地方にも波及する効果がありはしないかと、それを期待しているのである。

ヨーロッパ大陸での英語となると、これは英國英語ということになろうが、大体ヨーロッパ人で英語をこなす人は従来でも英國英語であった。ドイツ人やフランス人は英語を話す時でもしばしば uvular もしくは guttural な r の音を響かせるが、とにかく British accent で話す。しかし観光ガイドの中には American English をしゃべるものも多いようで、やはりアメリカ人観光客が多いことの影響だと思えて興味深い。

しかしヨーロッパ大陸以外の地ではどうであろうか。アジアでは戦後の日本でアメリカ英語がついに大勢を制してきたように、アメリカ英語の全盛時代といつていいのではなかろうか。フィリピン然り、韓国然り、南ベト

ナム然りである。もっともこれら地域自体のなまりが強いので、完全なアメリカ英語とはいかないにしても、根幹をなすものがアメリカ英語であるに変わりはない。

私自身の話になって恐縮だが、学生時代は英國英語を仕込まれた。終戦後はアメリカ人とのつき合いが多くなり、ガリオア留学などもあってアメリカ英語にばかり接触する年月が続いた。だがアメリカでは私は You speak with a British accent あるいは You speak like a Harvard man. といわれて、むしろ異端視された。だからアメリカ滞在中はつとめてアメリカ式に発音するよう心掛け、passport という言葉でも [pá:sport] とはいわず [pæ:sport] と発音するという風にしていた。

ロンドン支局に勤務するようになってから、私は本来の自分に帰れたと思った。何の気兼ねなしにむかしの英語にもどれた。アメリカ人との長いつき合いの間に自然に身についた発音の中にはなかなかこびりついて離れないものもあった。例えば I don't know. という簡単な表現一つにしても、イギリス流に [ai dən nou] といねいに言うよりも [ái dən nou] 式になってしまふのを自分でも気がついていた。ロンドンにいる間にできるだけ改めておこうと思って、気がついた所は直した。

2年あまりのロンドン生活におさらばして帰国するとき、飛行機の切符の予約を行った。カウンターに座っていた中年の女性が応待してくれた後、You speak with a little bit of Canadian accent. と私に向かっていったので、私はギャフンとなった。あれだけ直したものりだったのに、やっぱり一度こびりついたものはなかなかとれないんだなと思った。私の英語のふるさとは一体どこにあるのだろうかと改めて考えてもみた。ついにどこの國のものとも分らぬ正体不明の英語をしゃべる人間になってしまった私は、鳥の仲間にもけだもの仲間にも入れてもらえなくなつたこうもりの話を思い浮かべた。

航空会社の女性が American accent といわないで Canadian accent といったのは別の意味で興味のある問題であった。誇り高いイギリス人は東洋人の私をつかまえてまっ先に Are you from Singapore? ときき、違うと答えると Burma? と、要するにイギリスの元植民地の名をあげるのが多かった。Canadian といったのも同じ発想によるものである。

それはともかく、この Canadian accent といわれた時以来、私にはすっかり新しい視界が開かれるのが感じられた。私と同じように英語とも米語ともつかないような言葉をしゃべる人種がこの世の中にどのくらいいるのだろうかと考えてみた。アメリカに住んで英國英語を絶

対に崩さないイギリス人、イギリスに住んで米国英語をかたくなに守っていたアメリカ人を知っているけれども、大抵の人はそのまわりの人達の英語の影響を受けるのであるまいかと私は考えた。BBC を通じてきいたガーディアン特派員 Alistair Cooke の「アメリカ報告」の放送を私は思い出していた。彼の英語にはハッキリしたアメリカなまりがあった。彼はイギリス人のはずだが、アメリカに永く住んでいるために自然とその影響を受けたものと思われた。ヨーロッパ生活の長いアメリカ人、アメリカ生活の長いイギリス人など、その多くはこの部類に属する人達ではあるまい。

私達の英語はそれ以外に日本人的特徴が加味されてさらに複雑になっているものであろうが、ジュネーブでの国際会議などに集まった人達の英語にもラテン的、スラブ的などさまざまなものがあったことを思い出す。そして彼等の英語の中には英國籍とも米国籍とも断定し難いものが多かったことも事実である。国際語であるから、いろんな英語があっていいわけで、イギリス英語、アメリカ英語と騒ぎ立てること自体がもう時代遅れなのかも知れない。いわば Cosmopolitan English とでもいうべきものがあつてもいいのかも知れない。

とはいものの E C 事務局職員たちが特訓されている英語なるものを一度聴いてみたいと思う。その新聞記事には L L で勉強している写真が出ていたが、あのテープの中に吹き込まれている英語はイギリス英語に違いないあるまい。

Canadian accent の一件以来、私はもうハラを据えてしまった。所詮私の英語は日本人の英語に過ぎないのであるから、イギリス式であろうと、アメリカ式であろうと、大した違いはない。そういうことに気を使うのはあんまり生産的ではないことだと思うようになった。悪くいえば居直り強盗的な発想かも知れないが、自分を正当化するためにはこういう考え方をするほかないのである。そして国籍不明の英語をあやつる者の数がふえればふえるほど、それは英語が国際語として隆盛に向かっているということを示すものではないかと考える。私など勤務している新聞がアメリカ英語を中心としているせいもあって、たまには toward でなく towards と書き、traveling でなく travelling と書いて抵抗を示すことはあっても、color, labor などはもう抵抗感なく書けるようになったし、もはや違和感はなくなった。either だけはついに [í:ðə] と言えずに [áiðə] で押し通しているけれども。

(英文毎日社説担当)

アメリカ便り

TERASHIMA SHIN-ICHI

寺嶋 真一

はじめに

アメリカ人と話をしたり、アメリカ人のしぐさを真似たりしていると、アメリカ人の物の考え方方が身についてくる。そして、それが日本人の物の考え方と違っていることが多い。例えば、日本人は「間違ったことをして人に注意されはいけない」と教えるが、アメリカ人は「間違っていれば誰かが注意してくれるだろう」と言い平気な顔をしている。日本人の考え方では「人に注意されることはなければ、どのようなことをしてもかまわない」という裏の解釈も成り立つが、アメリカ人の考え方では「自分がやって、さしつかえないと思うことをして、それがもし間違いであれば他人が親切に教えてくれるだろう」ということであって、その言葉の裏の解釈はない。

アメリカ人に物をくれてやる場合も、気をつけた方がよい。どんなに高価な品をくれてやっても、それで相手の態度がガタリと変わることはない。「物をくれてやる」と言えば贈り主の気持ちは尊重され喜んでくれる場合が多い。しかし、彼らは物をもらうことは他人が自分に貸し作ることだとは考えない。だから“Oh thank you! (やあ、ありがとう)”と言って、それっきりで返礼のことを思いわずらう習慣はない。

アメリカ人は他人の言うことをよく聞く。日本で「人の言うことをよく聞く」とは、相手の言う通りに行動することだが、アメリカ人の場合は、相手の意見を注意して聞き、相手がどのような意見の持主であるかを確かめるのである。それで、相手の言っていることが無意味なものであれば完全に無視する。要するに、アメリカ人は他人の心の中をあれこれと詮索して、思い悩むことがない。

日本人には日本人特有の大和魂があるという。しかし、僕が日本にいた時には、それがどのようなもので、どのように日本特有なのか分からなかった。そして、大和魂のないアメリカ人と1年間つき合った今、自分が立派な(?)大和心の持主であることが分かった。以下に綴つてある「アメリカ便り」には、大和心ある僕の考え方と

アメリカ人の考え方方が並べて書いてある。僕が自分自身の考え方を述べれば、それが日本人社会全般に通ずる考え方であることの多いのに驚いた次第である。

国際感覚という言葉があるようだが、僕の国語辞典にも和英にも出ていない。又、アメリカ人の口からも聞いたことがない。だからこの言葉はあまり公には使われていない言葉なのであろう。しかし、この言葉は日本人にとって使う価値のある言葉なので、ここで僕が定義をして使うことにする。「国際感覚とは、外国人にも通用する物の考え方」で、国際感覚の持主とは、物ごとの判断の基準を大和魂に求めない人間と理解してもらいたい。

日本人の一人一人が一日も早く大和魂の何たるかを理解し、国際感覚の持主になってもらいたい。日本人が国際感覚の持主になれば日本の国はもっと立派な社会になること受け合いである。しかし、残念なことには、日本には大和魂の何たるかを説明し、国際感覚を養わせるための適当な書物がない。だから僕はこうして「アメリカ便り」を書く気になったのだ。特に、大学改革をしようと思う人、将来、芸術家・科学者など創造の仕事にたずさわりたいと思っている人、外国人と付き合う必要のある人に、これを読んでもらいたいと思っている。

1970年8月 セントルイスにて

俺とお前

アメリカ人の物の考え方は英語を日本語に訳してもそう簡単に伝わることはない。それは日本語は日本人の考えを表現するために作られた言葉であり、英語は英米人の考えを表わすために作られた言葉だからである。例えば英語では第一人称単数の代名詞は I (アイ) 一つであるが、日本語では私、わたし、わし、俺、僕など数多くある。人間は言葉を使ってその考えをまとめるのであるから、言葉がないということは、それを話す人間にそうした考えはないということで、言葉があるということは、その社会にそうした考えが働いているということなのである。だから、日本語に第一人称の代名詞が多いのはダテにあるのではないことが分かる。日本人たる者は、その

時と所でこの種の言葉の使いわけを正確にしなければならないからである。逆にアメリカ人の社会は若い女も年寄りも一律に、自分のことを「俺」「俺」と呼び合う社会ともいえる。このような人間のやり方を日本人が奇異に感じない筈があろうか。

英語の人称代名詞の第二人称単数は *you* (ユー) である。*you* しかないのであるから相手を呼ぶ時は「お前」一点張りの呼び方となる。大統領でも三つ見でも「お前」であろう筈がない。俺とお前の間柄というのは、日本では非常に親しい間柄のことであるが、アメリカ人の社会は実はこの俺とお前の間柄でなりたつ社会なのである。あらかたの日本人は日本の社会を温情主義の温かい社会だと信じているが、日本人社会を冷たい社会と評する者はこの「俺とお前」の社会が日本人の間では非常に狭い範囲に限られていることを指している。

さて、このような奇異な考え方をする人間の言語を日本語に訳して、まったく日本人の頭に抵抗なく入るといふのはどうしたことであろうか。それは訳者がアメリカ人の言葉にいとも巧みに日本語で日本流の考え方を注入するからである。このような訳を名訳と呼んでいるが、実は迷訳と呼んだ方が適當かも知れない。訳者は「もしもこのアメリカ人が日本人であったならば……」という仮定に立って、日本語のせりふをいろいろと選んで訳すのであるが、この「もしもこのアメリカ人が日本人であったならば……」という仮定はありえない仮定だからである。このようなやり方でアメリカ人の考え方を日本人に理解されるはずがない。

英語に “friend” とあれば、日本語では「友達」と訳すが、実は “friend” は「友達」ではない。英語の friend は愛着を感じて近づいて来る者を意味するのに対し、友達は上下判断 (hierarchic consideration) を基準にして自分と同位の者を表わす言葉となっているからである。アメリカでは30才の男と60才の女の間柄でも friend はありうるし、犬猫をも friend と呼ぶ。日本人はこのような間柄を友達とは呼ばないが、愛着を感じない者を友達と呼ぶことにちゅうちょしない。上下判断の同位という意味を取り除いては、日本語の「友達」という言葉は成り立たないのである。もしも、friend という言葉が友達という言葉と同じ意味であるとの仮定に立つならば、アメリカ人は「日本人は friend を選ぶ範囲が非常に狭く、そのほとんどは学生時代にできる」と感想を述べることになろう。

英語には「恩」とか「義理」などという言葉はない。これを無理に、恩を *kindness* (親切)、義理を *obligation* (義務) などと訳してみたところで、それは單にそうし

たものでしかない。これと同じように、自由、責任、適当といった日本語でアメリカ人の言う *liberty, responsibility, reasonable* という言葉の意味を日本人が理解するのは至難のわざである。

敬 語

節子は「日本語は話すのが難しい」という。「どうして、そんなに難しく感ずるのか」と問えば「日本語には敬語が多くて、その選択に迷うから」と答える。「敬語など使うのはやめて、日頃話しているやり方で行けばよいのではないか」と提案すると「敬語を入れると聞いていて気持ちがよいから、やはり入れた方がよい」と言う。「それならば、いつも最上等の敬語だけを使うように心掛けたらよいだろう。例えば、自分の息子に対して『おぼっちゃん、おやつをお召し上りになりませんか』といった調子でやつたらどうだい」と言うと「それでは親しみが失なわれるからだめだ」と答える。

アメリカでは「我々の親しみある店 (our friendly store) に来て下さい」と宣伝する。だから、親しみのあることは赤の他人にあっても好むことである筈なのだ。日本人が敬語まじりの言葉を聞いて心地よいと感ずるのは、伝統的な上下判断にとらわれた物の考え方をしているからではあるまい。

日本人は言葉だけでなく態度をも相手によって変える。これを親たちはしつけと称して自分の子供に習わせているが、何のことはない、自分の子供を陰日向ある人間に仕込むことでしかない。日本人の社会訓練は「自分より相手は上であるか、下であるか」の判断の訓練であるために、それを何年くり返しても白人社会に入っては役に立たない。日本人は「俺とお前」の基礎に立つ人間をどう取り扱ったらよいのかを心得ていないので、日本人は国際社会で個人としての説得力を持つには到らない。

アメリカ人は子供に話しかける時にも自分の言葉を変えることはない。子供向けのテレビ番組に「カンガルー船長 (Captain Kangaroo)」というのがあるが、その中にでてくる2人の男、カンガルー船長とグリーンジーンズさん (Mr. Greenjeans) は多少ゆっくりではあるが大人の言葉で子供に話しかける。子供にはなしかける時でも、けっして舌のまわらぬ子供のまねをしてみせることはない。彼らは絵物語りを聞かせたり、人形をあやつてみせたり、音楽を聞かせたりする。音楽を子供に聞かせる時は、彼らは楽器を持って演奏者のまねをする。

「男性には職場というものがあるから上下判断に基づいた言葉使いはさけられないが、日本の女性にはそのよ

うな習慣はない」という者がある。はたして、日本の女性はこの上的な物の考え方から自由でいられるであろうか。ざあます言葉を話す女性があるが、彼女たちはいつでもあるように「……ざあます」と話すのであろうか。彼女たちは自分の息子や八百屋のおかみさんに対しても「……ざあます」、「……ざあますのよ」とやることはないであろう。だから、日本の女性にも上下判断はよく浸み込んでいることが分かる。

英語には日本流の特にいねいな言葉というものは見られない。英語で「すみませんが……(Please, ...)」という言葉はいねいな言い回しをする時に用いるのであるが、アメリカ人が“Please, ……”を使うのは、この時に他人の意志を促がすからである。だから、自分のあどけない顔をした子供に対してもこの“Please, ……”を言う時がある。日本語にはいねい語がふんだんにあるが「おビールにおサイダー」といった類のいねいさとアメリカ人のいねいさとは質的に違っている。

この前会って皆で楽しく遊んで過したのに、日本人が「先日はどうも失礼いたしました」と言いながらお互に挨拶をかわすを見て、アメリカ人は不思議に思う。このような挨拶言葉は慣用的な表現であって、意味の正確・不正確にかかわらず、日本人ならばさけて通ることのできないものであるが、アメリカ人にとっては、楽しく遊んだ後の挨拶が “I behaved very badly the other day (先日はどうも失礼いたしました)” であるのは不思議なのである。それは意味が倒錯しているからである。へつらうこと (flattery) になれていない彼らには、このような表現形式は理解できない。

立派な人間を尊敬するということは、ごく自然な人間の行ないであり、人にへつらう仕ぐさは下卑た行為であるはずだが、日本人にはこの天と地ほどに隔った行為の区別を知らない。上下判断にいそがしい日本人は尊敬を表わす言葉（尊敬語）とへりくだりを述べる言葉（謙譲語）を敬語という同一の次元で考える癖を持っている。

言葉

はてしもなく続く広野のはてからやって来る見知らぬ人に自分の考えを言外に察してもらうことは不可能であった為であろうか、アメリカ人の言葉には裏がない。相手が“Yes.”と言えば「イエス」，“No.”と言えば「ノー」，“It's hard to tell.”と言えば「答えるのが難しい」とその言葉通りに解釈して間違いない。

日本からやって来て、まだ英語がよく聞き取れないのに、アメリカ人の問い合わせても“Yes.”，“Yes.”と応ずる人がいる。相手の言ったことが分らなくても合づちを

打つのは日本人特有で、これは相手への思惑を自分の判断よりも先においている証拠である。アメリカ人の言葉は人そのものである。だから、自分は知らぬと思いつ結論を下すことはしない。

アメリカ人の言葉は刃物のようによく切れる。特に高等教育を受けた者はそうである。彼らは高校から大学にかけて国語の時間に ROGET'S THESAURUS という辞書を使う。「この本はあなたの考えを明瞭に力ある表現にするように工夫してある」と書かれている。この辞書は前半と後半の 2 部に分かれている、前半は言葉の言換え、後半はその索引になっている。まず responsibility と言う言葉の意味をもっと正確に表現したいと思う時には、索引の方から引いていく。すると負担 (liability), 管理者の職 (directorship), 委任 (mandate), 義務 (duty), 有罪 (guilty) と 5 つの言葉にそれぞれのページが記してある。もしも、負担の意味で適当な言葉を探したい時には liability のページを引けばよい。そこには沢山の同義語が列挙してある。この辞典の特徴は言葉の意味をたどって引くところにある。

奥歯に物のはさまったような言い方をして、相手の勝手な想像を期待する日本人にはこのような辞書は必要でない。その為か、日本人には自分の話している言葉の意味が分からぬ者さえいる。分裂症的街頭演説をする学生や、飛躍の上に飛躍を重ねた文章を綴るジャーナリストが出てくる始末である。日本人には自分の考えを噛みくだいて人に分らせる努力もなければ能力もない。アメリカ人は意味のないことを言わないというのではない。意味のないことを言った後では「別に意味はありません (It makes no sense)」と答える。テレビのコマーシャルではないが「うつりびの……つらりてら……はっぱふみふみ」と言い「分かっているね」と念を押すところがいかにも大和風だ。

日本では「察し」はあたかも根拠ある判断であるかの如く重んじて取扱われている。だから人々は「物事は良くも悪くも解釈できる」と信じている。他人の心を読む手段として言葉の裏の意味を解釈してみることも頻繁に行なわれている。「適当にやれ」という言葉は「不適当でもかまわない」と解釈されたりする。相手の心の探り合いに熱中するあまり日本人の言葉は空虚なものになっている。自分の子供のことを非難していた母親が、実は子供を満足に思っていたのだったりする。

「どうも申し訳ありません。御主人様が死んだのは私の看病が至らなかった為です。この私が御主人様を殺したようなものです」とやってアメリカ人の家庭から殺人罪で訴えられた日本人女中の話を聞いたことがあるが、

アメリカ人はどんなことがあっても、このような論理の倒錯は起こさない。「理由は何であれ、ただこちらで謝っておけば、それで相手の気のすむことだ」という考えの横行する日本社会では言葉の価値はきわめて低い。言葉の価値が低いということは人間の信用がそれだけ低いという意味である。

日本人は「人をそしるは鴨の味」というが、アメリカ人は人をほめる。変哲もない顔付きをした女にも「あたはきれいだ」と言うし、ぼろの車に乗っていても「君の車はよい車だ」とほめてくれる。こちらがいぶかしげな顔付きをすると“*I said it as a compliment.*”と言う。これを「今のはおせじで言ったのだ」と日本語に訳しては意味がとれない。これは「今のはほめて言ったのだ」の意味である。別に彼が宇宙の大真理を言って聞かせたのではない。アメリカ人は自分がよいと思う時に「よい」と言うのである。自分が悪いと思う時に「よい」という習慣はない。だからアメリカ人の compliment (ほめて言うこと) は日本人の「おせじ」とは違うのである。

日本人の判断

日本では周りの者のこともよく考えて行動するのが美德とされているが、日本人の場合、周りの者が自分の心の全てを察して便宜を計ってくれるというのではない。地位の高い者は周りの者がその意向を察してとりなしてくれるが、周りの者から低くみられている者は日本人であっても自分の希望を察してもらえない。それどころか、他人が自分の欲望を知って邪魔だすることも多い。だから奥ゆかしい日本人は同時にうらめしい日本人でもある訳だ。日本に居ては化け物までも「うらめしい」と言って出てくるが、僕はこの言葉をアメリカ人の口から聞いたことがない。

日本語には敬語がある。自分が相手にどのような上下判断をしているかを知らせるために日本人は、いわゆる「言葉づかい」に注意しなければならないのだ。だから相手が日本人の場合は誤って敬語を落としても相手の態度が急変することがある。先輩と後輩に囲まれて話をしている者はその間の関係をよくわきまえて、巧みに言葉の上下を使いわける。バーの見知らぬパートン迄が「よお、先輩……」と言って酒をすすめる。日本人にとって、相手に自分がどう思われているかは重要なことだからである。

「なんだ、そんなことも知らないのか」とアメリカ人が言えば、すぐその後で「事実はきわめて簡単なことなのだ」と言って急いで教えてくれる。しかし、日本人が「なんだ、そんなことも知らないのか」と言った場合に

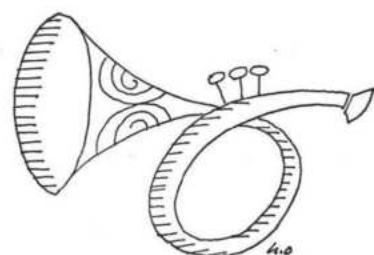
は必ずしも教えてくれるとは限らない。日本人にとって「なんだ、そんなことも知らないのか」は「それでは君を下と見る」の言い換えにすぎないことが多いからだ。日本人に大切なのは他人が自分を上に見ることだけであるため、他人に物事を教えることはあまり必要としない。日本人の教育下手はどうもこの辺に原因があるようだ。

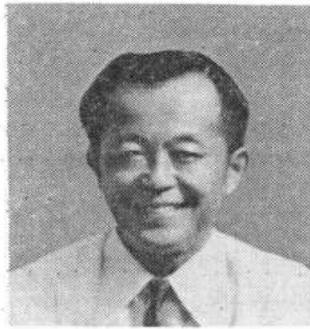
他人に注意されたのがくやしいと言って泣きだす女の子もいる。彼女は人から知識を得たのであるから、そんなに悲しまなくてもよいのではないか。日本人が恥ずかしがり屋だというのも他人の思惑を想像したことである。人を見下してみせることは相対的に自分の立場有利にすると心得て、日本人の中には人のあげ足をとる者が多い。

日本では相手に低く甘く見られたいことが大切である。自分と他人の区別をわきまえない日本人は、自分より低いと見た相手にどこまでも個人干渉をするからである。他人の行動を見て、あたかも自分の心境を言って聞かせるような、うがった解釈をすることは日常的であるし、顔をきかせて自他の区別なく横槍を入れることもある。悪事のもみけし、裏口手段などを講じたと広言して何らその人の人格に影響を与えないところが日本特有である。日本は力の強い者には理屈の通じない社会だからである。

アメリカ人はどのように地位の高い者でも腫物にさわるような取扱い方はしない。これに比べて日本人はその場の雰囲気により態度を変えるところが特徴的である。権力者の前では小さくなって見せ、弱い者の前では威張ってみせる。酒に酔えば酔ったで二重人格的言動を当然と考える。日本人が零囲気に弱いのは自主的判断に乏しいからである。

(東京医科歯科大学医学部助手)





私の英語歴

IMAMURA SHIGEO

今村茂男

1922年8月15日にサンフランシスコに生まれまして、10歳になるまでそこで育ち、小学校は4年、日本語学校は3年を修了したわけです。というのは、当時の小学校はできの悪いのは留年することもあったし、そのかわり、よくできる者は学年を1年とぼして進級することもあった。私は1回それをやったものですから年より上の学年に入ったのです。

家庭では、両親が一世移民でしたから、日本語ばかりしゃべっていた。父親はかなり英語が出来たようです。けれども、母は買い物をする程度の英語しかできなかつた。そして、家がサンフランシスコの日本人地区にあつたものですから、遊び友達もみな日系二世で、話しことばは英語と日本語のチャンポンです。「Youが悪いのだ」「いや、meは何もせん」というようなことを言っていました。

学校では朝の8時半から午後3時まで全部英語でやっていた。そして、3時半から5時までは日本語学校へ通わされて、国語と修身（文部省発行の教科書）を教えられた。一番苦手は習字で、どう書いても紙からはみ出しまって困ったものでした。

こうして、全く bilingual に育ったわけで、10歳までは日本語、英語の両方とも自由に使えるような育い立ちだったので非常に幸せだったと思います。

10歳の時に日本へ帰って来て、小学校の4年に入り、中学校を終えて、松山高等商業（現在の松山商大）を卒業しましたが、その間、日常に英語を使うということはありませんでしたが、戦前および戦中にかかった私の学校時代というのは、幸いにしてまだ英語を完全に敵性語として追放する時代になっていなかった。その少し前でしたから、英語の時間はかなり多くありました。中学校の場合でも英語・英作・英文法の3本立てであったし、高校時代のある学年のある1学期なんかは、1週34時間の授業のうち、17時間が英語であった時もありました。いまでいう ESS もあって、そのキャブテンもやったし、英語を学校で使う機会は多かったようです。

それに中学校の4年ぐらいまで愛媛県の松山の町にいた宣教師一家に紹介されて、私は当時から無宗教だったよう思うのですけれども、その息子で私と年が同じやつがいて、それと土曜日とか日曜日とかにときどき遊んでいたので、何となく英語を忘れてしまわないで、細々ながらずっとつながっていたということだったらしいのです。

というのは、10歳ぐらいで日本へ帰って2年か3年たった人はほとんど全部英語を忘れます。2年、3年られない。使わなければ1年ぐらいで全部忘れます。幸いに私の場合にはどうにかつながらっていた。

そうして突然終戦になって米軍が入ってきた。親戚だとか友人などで私がアメリカ生まれだということを知っていた人たちから盛んに通訳になるようにすすめられたけれども、何さま日本海軍で2年間パイロットをやった私としては、ばかと言え、きのうの敵はきょうの敵だなんて強がり言って働く気は全然なかったので、バスの運転手になろうかななんて思っていたのです。ところが私の中学校時代の英語の先生にだまされて、松山の町にあった家は焼けてしまって疎開してたわけですが、松山の町を見に行こうやとわざわざ誘いに来て、母校へも行ってみようじゃないかと誘われて、いまから考えてみればそんなことにひっかかるほうがばかだったのですけれども、まんまと乗って一緒に松山に行ったところが、いきなり進駐軍の本部へ行ったわけです。それで “This is Mr. Imamura. He was born in America.” とやったわけです。そうしたらそのときの Commander が “Say, lollipop.” といったのです。棒のついたあめのことをこちらで lollipop といいますけれども，“Say, lollipop.” と言ったから私はうっかり、“Lollipop.” と答えた。“OK. Your English is good enough. You come here at eight o'clock tomorrow morning.” 味方も敵もない、それまで命令に従うという conditioning が完全にできていたようです。何の反発をする気持も起こさず、あくる朝8時から出勤するようになった。

アメリカ人というのは私が思っていたような、思い込まされていたような人種でないというのがわかるのに2週間ぐらいかかったと思います。昭和20年の話です。それで通訳を、翻訳はもちろん、ジープの運転手から何から、とにかくアメリカ人と朝から晩まで4年間生活したわけです。

それでだいぶ英語が戻ってきました。戻ってきたのですが、その当時も、またいまになっても感ずることは、teen-agersとしてアメリカに育ったのならば当然のこととして身についていた非常に何でもないことが私にはわかつてないのです。たとえば vocabulary にしても、10歳までの子供は知らないけれども、20のおとなになってからそういうものを習うというほどまれではなく、つまり high school 時代に当然その字に触れて、あるいは聞いたりしているような文字で私知らないやつがある。恥じかいたのは、これはもう5年ほど前の話ですが、“epitome”という単語は私が日本で習った英語にはついに出てこなかったです。文字では知っています。書物を読んだら出ていますから。けれども発音を一べんも聞いたことがなかった。たまたま私が何かの拍子に [épito-um] といったら私の secretary にここで直された。“No, that's [epítəmī:]” それは当然こちらの high school 時代に身についた、聞きなれてしまった発音であったはずなのに、それが抜けている。いまでもまだこういうものがボツリ、ボツリあるところからみて、やはり英語は私にとっては外国語だといえなくもないという感じがします。

それと、酔っぱらったらまず英語の時制や数がくずれてくる。ろれつが回らなくても日本語の文法がおかしくなるなんていうことはまずないのですけれども英語の文法のほうが先にくずれてくることからみても、私の中にある日本語、英語の力というのは、やはり日本語のほうが強いだろうと思います。

話をもとへ戻して、駐留軍による4年間、そしてその駐留軍が引き上げる段階になって私はあまりにもその4年間というのは忙しく疲れました。たとえば県庁の役人と進駐軍の将校との間に立って通訳した場合、その話がうまくいったら、ああ、やっぱりアメリカ人はいいことを言う、こういうことでしょう。ところが話がこじれたり、まずくなったりすると、あんな通訳が悪いと、こうなるわけです。“Non authority and all the responsibility.” ということです。だから通訳という仕事にこりごりして、もういくら給料出されてもするものじゃない。あまりにも疲れたものだから、しばらく、数年樂に暮らそうと思って女学校の英語の先生になろうと思ったので

す。その話もついていたのです。女子の私立高等学校で私の知っている人が経営している学校があって、そこだったら進学率も低いから責任もそうなからうと、のんびり2・3年やって休養しようと思ったら、どっこいそはいかなくて、進駐軍の司令官が出る前に県の教育委員会に話して、「おまえのところ英語の指導主事というものがまだないじゃないか。それは困る。英語の指導主事にいいのがいるからとれ」というわけです。とれといわれたらとらざるを得ないです。そのときの教育長が、あんなやつが来たら困るんだがと思ったに違いないのですけれども、「はいはい」といって私をとったわけです。

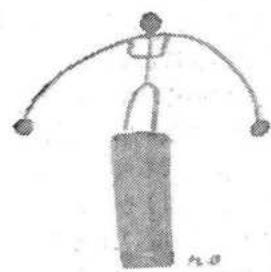
それで県の教育委員会で6年指導主事をやりました。その6年間の間に今までいうフルブライトの制度ができた。最初は GARIOA (Government Account for Relief in Occupied Area) というので出発したのです。これが3年続いて、4年目からフルブライトに切りかえられたのですが、その3回目のテストを受けて通って留学生としてアメリカへ来たのが1951年です。それで University of Michigan へ来たわけです。当時はどこの大学へ行きたいという希望を申し出られなかつたのですけれども、幸いに私が駐留軍で通訳をしていたときに私がついていた陸軍の教育将校のおばちゃんが当時の Institute of International Education のニューヨークの office にいて、日本から来る留学生を方々へ配当する役目をしていたので、どこへ行きたいかと問い合わせが来た。それで Fries のいる Michigan へ行きたいというので配属されました。それで Ann Arbor で2年勉強して帰ってきた。愛媛県教育委員会へ帰って、それから6年ぶりに愛媛大学へ移った。

ひょんなことから、ここ English Department の Chairman が沖縄で琉球大学の顧問団の團長をしているときに、アジア財團から派遣されて琉球大学の英語教育の consultant として2週間ほど行った機会に顔つなぎができた。その後、ここミシガン州立大学に English Language Center をつくるということがきまたときに、おまえも一緒に来てやらないかということで、1961年、11年前にここに呼ばれてきたわけです。

そのときは愛媛大学から海外出張、公用の休職になっていたものですから帰らざるを得なくて、また愛媛大学へ1962年に帰ったのですが、こちらのほうでどうしても帰ってこいというので、また1963年に帰って、それからずっとここにいるわけです。

国籍は生まれたのがアメリカですから二重国籍だったのですが、戦争中日本軍に志願して入ったということで (p. 41 へづづく)

日本人の意識構造と国際環境



武山泰雄 日本経済新聞社主幹
金山宣夫 日本総合研究所国際研究室長

「八絃一宇」と「名誉の孤立」のあいだで

金山 日本人のやり方には、左右の両極に非常に大きく揺れ動く傾向があるように思うのです。1つの極は、いわゆる「八絃一宇」つまり、人間はみんな同じなんだ、世界中誰でも兄弟である、外国人だって結局は人間ではないか。そういう考え方方が一方にはあると思います。

また一方では、いわゆる「名誉の孤立」というものによって表わされる意識構造というものがあるのではないか。

つまり、しょせん外国人はみんな同じだというやり方では通用しないわけでありまして、それが通用しないとなると、急に振子が逆の方に揺れ動いて、尻まくりをするという態度が見受けられるのではないか。

このように「八絃一宇観」と「名誉の孤立観」のあいだを揺れ動いているのが日本であり日本人ではないかという気がするわけですが、いかがですか。

武山 のっけから非常にむずかしい本質的な話をぶつけてられて、うまくお答えできるかどうか……。いま伺って思い出したことが2つあるんです。1つは、もう10数年前、評論家の加藤周一さんがある雑誌にお書きになつたもので、非常に印象深かった記憶がいまもあざやかなんです。加藤周一さんがパリにおられたときに、「戦前に育った日本人がパリに来る、戦後育った人がパリに来る、その行動様式なりものの考え方方が全く逆だ」というのです。戦前の日本人というのは、パリに来てたまたまフランスの女性と親しくなるというような機会があると、自分たちは日本人とフランス人は全然違うのだと思っていたが、付き合ってみれば同じじゃないかという感じを持つ。ところが戦後の教育を受けた人というのは、あなたの表現で言えば、「精神的には八絃一宇、我も人

なり、彼も人なり、世界中みんな人間じゃないか」というような感じを持って来る。

ところがご存じのようにフランス社会あるいは西欧社会というのは、人づき合いはいいかもしないけれども、ある一定の限度以上は絶対いれない。そうすると、世界中みんな同じだと思ってフランスへ来てみたところが、がちっとぶち当たる。そこから先は押せどもつけどもちっとも動かない。日本人と西欧人というのは同じだと思ってたけれども、全く違うんだなということを発見してこっちはまたこっちでがく然とする。

私も海外に4・5年暮してみたり、いろいろ仕事をしてまして加藤さんのご指摘、あるいは金山さんのご指摘が非常によくわかるような気がするのです。

鈴木大拙さんが亡くなられる直前ですが、ずいぶん長い時間お話を伺う機会がございました。ご存じのように鈴木大拙さんといえば禪の大家で、しかも海外に長い間お住まいになられて、英語も非常に練達でいらっしゃる。禪の講義も英語でおやりになるというくらいの方でしたが、その鈴木大拙先生が、「何ば話してみてもやはりわからんのかしら?」と、禪という人間普遍性というものを踏まえて、その上に立って話しても、なお“East is East, West is West.” ということを心の底から嘆息されたというようなことがあったようです。

ものの発想、歴史とか生活とか伝統とか、あるいは地理的なロケーションとか、いろいろな違いがあると思いますけれども、外国語が自由にあやつれないということが原因して、なかなかコミュニケーションがうまくできないということがあります。そういうlanguage gapというか、language barrierというんですか、そういうこともいまおっしゃった両極をゆれ動く一つの原因ではないかと思うのです。



武山泰雄

異質観と一体感

金山 そうですね。それも、振子がゆれ動く背後にあらる1つの要素として指摘すべきことだと思います。

それからもう1つは、日本という国が非常に均質的な國であるということです。裏返していえば、日本以外、すなわち外国ないしは外国人を異質の存在としてとらえることをしないのではないか。「八紘一宇」にしろ「名誉の孤立」にしろ、これは実は同根である。なぜならば、その両方の態度において、異質性ということを前提にしていない。我的原則と彼の原則が違うという原則の問題として考えることをしないように思う。

この原則の問題について、武山さんは次のようにお書きになっている。「原理の上に立つ自己の戦略を持つことなしには、経済“大国”という現実さえ守り切れないきびしい世界、世界的な戦国時代の乱世に突入しつつあるのではないか。経済力を外交の切り札に使い得るような戦略なしには、日本の名誉ある存在さえ保ち得ない時代になりつつあるように想われる。そのような戦略の基礎にある認識を身につけ、世界と日本に関する正しく重要な情報を適切に入手しうるようになるまでに、日本人はもう一度滅びなければダメなのであろうか?」(『袋だたきの日本』)。

これはたいへん基本的な問題提起、あるいは日本人に対する問いかけ、あるいは憂國の情から発するいさめの言葉と受け取ることができるとと思うのですが、これに答えるがためには、いま申しあげたように、異質性というもの、あるいは原則の違いといふものに立って、周囲を見まわしてみる必要があるのではないかと思うのです。

武山 ポイントを指摘されたと思います。私も金山さんと全く同意見です。これは歴史的、社会的によってきたる要因が非常に強くあるわけです。

日本人というのはこの穏和な島国の上に、海によってほかの国からは隔離されているということで、自然との一体感の中に人生の理想を見出していく。ですから身ぐるみ一体になることが日本人にとっては精神的な安定、情緒的な安定ということを得られる最大の原因だったと思います。封建時代の藩主と家臣とか、あるいは今日の労働組合でもやはり会社との忠誠心というようなもので結ばれている。そういうことで、いまご指摘になったように自分と他人との区別というものをあまり意識しないわけです。私はそのことを必ずしも悪いことだとは思わないのです。

金山 それは日本の中だけなら、とてもいいわけですね。「事を荒立てない」から……。

武山 そうそう。ところが違う原理、違う原則の上に立っている国民との付き合いということになるとこれは美德必ずしも美德にあらずということになると思う。

おそらく金山さんは今までいろんなお仕事で外国人とずいぶんお付き合いもあったでしょうし、あるいは日本人と外国人との間に立ってお仕事なさることがあったと思うのですが、その場合にどうなんでしょう。よく日本人の場合は“Yes”, “No”的使い分けができないといわれるけれども、それよりももっと重要なことは、“No”と言わない機会の方が多いんじゃないかな。何か薄笑いしながら、何でも「オーアイエス、オーアイエス」ということになっちゃうということも多いんじゃないかな。

一致の中の対立と対立の中の一致

金山 それはそのとおりだと思います。つまり日本人のやり方というのは、「一致の中の対立」である。一致を前提とした対立である。

ところが欧米人ーあるいは中国人をこれに含めることもできると思いますがーのやり方は、それとまったく逆であって、「対立の中の一致」である。原則というものが対立しておる。対立の中からいかにして一致を求めるか。そこに思考構造の違いがあるように思うのです。

日本人がすぐ“Yes”というのは、「一致の中の対立」なんですね。よく日本人というのは、実は原則において違っている場合でも、安易に彼と我とは原則において一致してゐるんだということにして、そこから出発して、お互いの対立といふものは技術的なものであると考える。だから日本人のやり方は、“Yes, but no.”彼らのは

'No, but yes.' そんなところが違うようにおもいます。

武山 いま言われた一致を前提にしたやり方、この発想方法に立ちますと、要するに consensus をつくるのはとても時間がかかるのです。consensus をつくるまでの process というのは大事なのです。いわゆる「根まわし」というやつでしょうか。意思決定をする process というのはたいへん時間がかかるというのがやはり日本的な一つの特徴かもしれませんね。よくいわれる「稟議方式」とか、あるいは「根まわし」とかあるいは「積み上げ」でやっていくというのは。

しかもこれはきわめて informal なスタイルでやっていく。この一致に至るまでの conflict というのは、特に親しい間柄であればあるほど表に出さないようにして、informal にやっていくというようなことになるんでしょう。これに対して金山さん流にいえば、欧米とか中国というのは対立というものを弁証法的に矛盾と矛盾をつき合はせながら発展していくということになるわけです。

だからこの 2 つを比べてみると、よく周恩来首相などが「歴史の教訓」を大事にしようと言う。それはいろんな conflict があって、conflict をどんどんお互いにぶつけ合いながら compromise に達していく、あるいは一致に達していく。そういう過程ですから、みんなそれは血みどろの過程を経るわけです。ですから「歴史の教訓」という問題の重みが出てくるのでしょうか。けれども、日本人は意思決定のやり方とか、それからいまお話をあったことからいっても、歴史の教訓というのを学ぶことにおいてきわめて不得手じゃないか。

金山 水に流しちゃう。

武山 そうそう。台風一過というやつ。一過性民族といわれているので「歴史の教訓」というものが蓄積されない。行動の中に反映されない。ですから日本の対応のやり方を見てると、同じ間違いを必ず繰り返します。そういう意味で私は、どうして日本人というのはこんなにばかりなのかという感じさえしますね。

一方向性の膨脹主義

金山 同じ間違いを繰り返すんじゃないかなという気は、私も、ものすごくしますね。私は「一方向性の膨脹主義」ということをいうのですが、そんなような習性はずっと変わってないような気がするのです。つまり、戦前は領土的な膨脹主義をたくましくしてきた。領土というのは、こっちが取れば向こうはなくなるというもので



金山宣夫

す。問題は日本が取った場合に、取られた相手側の立場に立った意識がないのではないか。膨張しているときには、膨張というのが常態、あたりまえであるというような意識があるのではないか。

そして、戦後もそれが丸々生きている。経済における「一方向性の膨脹主義」。日本のやり方が、いわゆる「市場拡大中心主義」、あるいは「売上中心主義」ということであるとすれば、外国にそれが持ち出された場合には、「押し出し輸出」「押し込みセール」ということになる。ところが日本人は、そういうことをしておりながら、相手、つまり押し込まれる方、あるいは押し出される方がどうなのかということをあまり意識しないのではないか。私はそれが同じ間違いを繰り返す基本的な意識構造ではないかと思う。

武山 たいへん適切なご指摘です。

金山 例をあげます。「支那事変」で日本が「支那」へ侵略をしているというときに、日本人は中国人をどういうふうにして考えていたかというと、「兄弟のせっかん」。つまり、内輪のことで、別に原則の違う人間がその違いのために争っているわけではないんだ。兄弟がどうもうまくいかんのだけれども、とにかく兄弟のことだから、ちょっと何とかすればすぐよくなるのだ、というようなことでやってたんじゃないかな。

ニクソン・ショックに対する対応というのも、そのとおりである。アメリカと日本との原則の違いというようにはとらえてない。「日本とアメリカは兄弟である」—田中さんははっきりそういう言葉を使っている。その兄弟がたまたまちょっとうまくいってない、そういうとらまえ方をしているのではないか。

先ほど武山さんがいみじくもおしゃられたように、

なるほど *consensus* をつくるのに時間はかかっただろう。ところがいっぺん *consensus* ができると、日本はいわゆるブームになっちゃうんですね。なだれ現象を起す。毛沢東さんが「喧嘩はもうすませましたか」といわれた。ぼくはあのことばは非常に意味深長だと思うのです。あれはやはり「原則の違いというものを、あなた方ははっきりさせましたか」ということだと思う。ところが田中さんは、おそらく相変わらず「兄弟のことだから」みたいなことでやっておる。これはやはり武山さんのおっしゃるように、「間違い」をやりますね。

武山 心配ですね。戦後のことについて、一言だけ補足しますと、確かに戦前の日本が国の安危をかけて国の生存を何とか確保したいと思う時代、西欧の列強世界というものは帝国主義の段階に入ってきた、したがって日本自身の存立を守るためにには当時の中国なり、あるいはその少し前のインドを見ていれば、どうしても富国強兵ということでおずからを守らなければならなかったということは必然的だったと思う。

ただ日露戦争がすんだあと日本は目標がなくなってしまったししなってきたと思うのです。第2次大戦後日本はそういった明治百年の、明治以降の歴史というのは挫折した。私自身個人的に振り返ってみても、おそらく読者の方もそうだと思いますが、われわれの *generation*としてはこのままの日本を次の *generation* に引き継ぐわけには参らない。したがって罪滅ぼしというか、3度のめしを1度にしてでもどうしても再建をしなきゃならないと思った。

しかも軍事的な問題ということについては手痛い教訓をこうむり、中国あるいは近隣諸国、朝鮮半島、あるいは台湾にいろいろめいわくをかけたということになれば、残された手段は経済しかない。われわれは卒直にいいますと無我夢中で働いてきた。

ある日突然気がついてみたら膨大なとてつもない生産力ができ上がっていた。M. I. T. の経済学のポール・サミュエルソン教授の表現を借りれば、日本の経済は「一大モンスター」に成り上がっていた。ところが一所懸命わき目もふらず3度のめしを2度にして働いてきたものだからそういうことを自分で意識しなかった。突然ある日、意識したときには一体どうしていいかわからない。

あるいはまた、ここまで経済が復興し発展していくと、政治的にも経済的にも、労働組合を含めてそれぞれ *interest group* ということができ上がっちゃっている。*interest group* というのは今までのパターンの経済成長の中からお互いに利益を引き出してきたわけです。労働組合しかし、農民団体しかし、芸術家しかし、産業し

かり。こういうことになると、あるものを方向転換するためにはだれかが損をしなければならない。

私は10年くらい前から日本の経済計画をつくるお手伝いをして、特に昭和41年から42年の経済社会発展計画をつくったときには情熱を傾けてつくったんですけども、あれを当時の日本政府なり、日本の産業界なり、日本の労働組合なり、あるいは市民なりが正しく受け取めてくれたならば、私は今日のような状況はおこってないと思うのです。公害にしても、貿易の問題にしてもこんなことになってはいなかつたはずだと確信するわけです。

いまから2、3年前につくった新しい経済社会発展計画のときでもそうです。もうこういう状態を続けていれば2年先には大体どうなるということは、とらわれない目で見ればわかるわけです。ところがそれぞれの自分の *group* の *interest*、自分の会社の *interest* ということで、わかっているけれども方向転換できない。

金山 「わかっちゃいるけどやめられない。」(笑)

武山 というようなことがありますて、そうなると結局 homogeneous の国民であり、なかなか *consensus* ができるまで時間がかかる。しかも戦後日本は民主主義社会ということで *interest group* というものが非常に多くて、そうすると多元的な民主主義社会のもとではそういうことが往々にしておこりがちなのですが、意外にキャンセル・アウトしてしまうのです。そういう多元的停滞ということが生まれるのです。これは pluralistic stagnation というふうにいうといいのですが、そうすると次から次に新しい問題が出てくる。しかし全体としては pluralistic stagnation だったということになると、そこに必ず国民なり何なりにフラストレーションが出てくる。そんな問題もありましてなかなか方向転換ができないということで壁にぶつからないと転換ができないのではないか。

もう一つは金山さんご指摘のように、「名誉ある孤立」というような系譜に属するんだろうと思うのですが、やはり一つのことを追い求めてある目標が設定されると、徹夜しても、オーバーワークしてもとにかくやっちゃう。つまりものを見る目が一つなんです。複眼で見ない。こういうことといま申し上げたようなことが重なると、率直にいって有識者の方が何ぼ事前にこういうことをやれば必ずこうなりますよ、だからいまのうちに早くそういうふうに方向転換しようじゃないか。こういう古くなった制度とか、あるいは既得権なんてのは削ろうじゃないか、ということを言っても、なかなかできない。だから当面の経済問題になってますが、相当手痛い代償を支払わないと日本人はわからないんじゃないかと思う

のです。

外圧による転換

金山 方向の転換ということは、内部的には相当むずかしい。ということはよりもなおさず、日本が変わるために、「外圧」を頼んで変わるということでもあるかと思います。ただ問題はこの外圧の受け取り方なんですが、冒頭に申しあげたような体質がありますから、外圧を受けてどっちへころぶかというころび方によって、ものすごく違うと思うのです。だから外圧を下手に頼むといふのも、果たして思惑どおりいくかなという気もするんです。

武山 私は外圧を頼みにして待っているわけじゃないんですが、何とかしないと……。外圧というのも、もうここ7、8年というのは日本は外国から見た場合には、何とかして、大国にもなったんだからそれらしい責任をとってそれらしいあれをやってくれんかということを最初は懇請しておった、懇願しておった。ところがどうしてもやってくれない。だんだんイライラしてくる。それが外圧の格好になってきた。その段階では、日本というのは外圧を加えれば何とかしてくれると、こういうふうな日本イメージがあった。

ところが最近は違う。外圧を加えなければ絶対変わらない。加えれば絶対変わるというふうに take it for granted されているわけだ、日本が。それがこわい。要するに外圧が加わるということは非常に急激なショック的なことで変わる。そうすると日本国民から見れば外からのショックだから非常に psychological、場合によっては radical に右へ行っちゃうかもしれない、あるいは radical に左へ行っちゃうかもしれない。いずれにしても非常にそれがこわい。国民のフラストレーションというのは非常に大きい。

それから外圧で事がはこぶとなると、事前の対策というものをしないから有効な手が即座に打てない。それから收拾策に時間とコストがものすごくかかるということなんですね。国民の一人一人、無理もないことかもしれませんが、ここまでやっときた。やっとアパートも入れるようになった。郊外に家も買えるようになった。こういったことで、何か先は不安かもしれないけれどもいまのままで変わらないでほしい。「今日は赤ちゃん」という零困気の中で何とかやっていければそれでいいというような一般的な考え方と、その上に既得権という、今までの戦後20数年にわたる成長の過程で既得権というものが労働組合、農民を含めてでき上がった。それは容易

に voluntarily give upしないことでなかなか方向の転換はむずかしい。しかも原則としてそれぞれ相手は違うんだということも、そういうことすら知らないわけだから認識しない。認識してればまだしもいい。そういうことに対する意識もないということは一体どういうことになるんだろうという気はしますね。

金山 それを一面的ではありますが具体的に申しますと、たとえば官僚機構というのがなっとらん、変化に対応するようなものじゃない。特に外務省などというのはその最たるものである。というよりも、むしろ外務省があるから日本の国際関係がうまくいってないようなところがあるという気がするのです。そういうことからいうと、これは三権の次の「第4番目の権力」だといわれるジャーナリズムの雄であられる武山さんなどの役割りということになりますね。

武山 たいへんおだてられたり、叱咤激励されたりされてるんだけれども(笑い)日本の官僚というのは各国の官僚に比べて一人一人とってみてきわめて優秀だと思います。そしてそれぞれみんな愛国者ですよ。ただ一人一人優秀な官僚が一人一人愛国者であり、一所懸命仕事をすればするほど何だかおかしくなるというのは一体どういうことなんだろうか。

金山 「合成の誤謬」というやつ。

武山 これを一体どういうふうに解釈するか、そのへんに問題があるのでないかということを最近つくづく感じます。

金山 実は、先ほどから話が出ておりますように、日本が過去において、外圧でいろいろ変化をしたということはないことはない。たとえば、昔の話で恐縮ですけれども、いわゆる「遼東還付」というものがあった。これはもちろん外圧によって迫られたのですが、そのときに日本の世界座標について考えるべきことがあったと思うのです。ところが、「一方向性の膨張主義」をたくましくしているから、とにかく「やられた、やられた」という悲愴な被害意識しかない。これはもう「臥薪嘗胆」でやらにゃあいかんと依傍地になったと思う。

第2次大戦に至る過程を見てみても、いわゆる「A B C D包囲網」か何かで「やられた、やられた」と。だけど「やられた」といっても、実はやられてるというより、むしろこっちがやってるんですね。そんなことがわかつてないのでないか。

いま問題になっている国際通貨とか貿易の問題についてもまったく同じではないか。つまり日本が輸出をいまのように続けておって、円のレートをそのままにしてお

くということは、これはありえないことなんです。ところが、そこで円の切り上げだ、再切り上げだということになると、日本が「袋だたき」になってやられてる、と、「そうだ、そうだ」といきりたつ。

武山 いや、そんなことはない。日清戦争直後の遼東還付というときにスローガンとして臥薪嘗胆ということがいわれた。私は日露戦争まではやはり日本の存立といふものを冷厳な国際的な現実の中でどう確保するかということに心魂をくだいたと思うのです。それぞれの分野の人が、日露戦争に勝利して日本がだめになった。これは司馬遼太郎さんとも話をしたときにお互いに意気投合した。また現に司馬遼太郎氏の書いている『坂の上の雲』をとっても、あるいは島田謹二さんの『ロシアにおける広瀬武夫』とか『アメリカにおける秋山真之』をお読みになってみればわかると思うのです。おそらく日露戦争までは冷酷な国際社会の中に小国であった日本が独立と安全を保全するというために一人一人が国の現状と将来について考えたわけです。夏目漱石も、正岡子規もそう考えたわけです。外交という問題について真剣に考えた。

ところが第2次大戦がすんでからあとというものは日本には本質的に外交というのはなかったんじゃないかな。もしかしたら吉田茂首相がサンフランシスコ条約で選択をしたということが外交だったかもしれないけれども、そのあとのアメリカとのご存じのとうりの関係が続いたということです。

われわれ一人一人の生活の実感からいってみると、ほんとうに日本は大国になったんだろうかというような疑問は国内においては私はあると思うのです。しかし現に海外にご旅行になって10年前あるいは20年前の日本人が海外旅行で感じたことと、今日たとえば通貨の問題にしても、生活の内容の問題にしても、海外旅行でどんな感じを持たれるか、非常に変わってると思うんです。客観的には、またおそらく主観的にも、あなたの20年前の生活といまの生活とどっちがほんとうにいいのかといったら、だれしも20年前より悪くなっているという人はいないと思う。だからそういう事実の問題としてすでに世界の経済大国になった。

あるいはまた北京会談によって日本は好むと好まざるとにかくわらず世界の政治大国になっちゃったんです。押し上げられちゃったんです。われわれは経済大国になってしまった。政治大国になってしまった。それじゃあそういうリアリティーというものを率直に見ようじゃないか、そしてそれに伴うプラスマイナスということを理的に考えようじゃないか、そして大国として背負わな

ければならないことをやるべきじゃないか、そういうconsensusができるなきゃおかしいと思う。

平和憲法と安全保障条約

金山 そういうことからいうと、いまの輸出の形、あるいは日本経済のあり方というのは、10年前と比べてみれば、その規模においては数倍になっているのに、その意識構造においてはあまり変わってないのではないか。つまり10年前の日本の経済規模のときと、それからいまの日本の経済規模のときの日本人の自分の経済力に対する考え方というのあまり変わってないのではないか。

武山 そこに問題がむしろある。

金山 そうですね。そういうことはほかにもあると思う。経済と並んで非常に重要な問題であるところの平和の問題。日本は「平和国家」である。それをいうときに証しとして持ち出すのは、結局、「われわれは平和憲法を持ってるんだ」。それが説明のすべてになっていると思うのです。

ところが、日本人はそういうふうに言っているけれども、外国人が日本の平和に対する態度、あるいはその軍事力というものをどのように見ているかということについて、あまり感受性が高くはないのではないか。結局、平和憲法は、それさえ掲げておれば、あとは何をやっても、とにかく平和なんだという一種の護符、免罪符として扱われている。そんなことでいいのであろうか。そんなものでは通らないというところを、実は突かれているのではないかと思うのです。

武山 それは言われるなりだね。もう一つの側面は太平洋戦争で決定的な敗北を日本はしておる。その後サンフランシスコ条約を選択することによって、同時に日米安全保障条約を結んだ、ということによって日本人がこの厳しい国際的なリアリティーの中で一国の独立を自分で守るということに対する意識というものはおそらく欠落したと思います。

松本重治さんとも去年の秋にお話しをしたときに松本さんが、「日米安全保障条約というのは日本人の精神的な独立という気概を失わせた」ということを非常に痛歎されましたけれども、その2つの側面をこれから一体政治大国あるいは経済大国としてどういうふうにバランスをもたらせるかということがまさに問題だ。

しかるにどうも一人の国民として見ていると、前の問題に対する意識もexactでない、うしろの問題に対する意識もない。もしそういうことが続けば、海外から見てみた場合に一体日本はどういうことなんだろうか。單

に経済の問題だけでなく政治、安全保障全部を含めて。だから日本人というのは全く unpredictable な人間だ、きのうまで言ってたかと思うと、きょう突発的にさっと方向が変わっちゃう。どういう国民だか全くわからない。いうならば端倪すべからざる国民だ。果たして信頼できるのだろうか。こういう問題が出てくるのではないでしょか。

これはさっきお出しになった原則の問題、原理の問題というものにもどってくるような気がします。ですから私が申し上げたいのは、原理原則の 2600 年間なかったことです。世界最大のオポチュニストな国民である日本人が、いまや原理を持てといってもなかなか持てない。私のせめてもの願いは、せめて国際日本をとりかこんでいる国際政治なり国際経済の冷酷な現実というものについての認識だけははっきりすべきじゃないか。少なくともそれもなかったら話が始まらんだろうということなのです。

金山 日本は今まで非常に高度な経済成長を遂げてきた。それがなぜ成功したかという理由の 1 つは、日本が「経済中心主義」でやれるという国際環境があったと思う。その国際環境とは何ぞやというと、日米安保体制によってアメリカのカサの下に入って、ひたすらに経済だけに邁進するという構造に立っていたのではないか。ところが日本人はそういうことを考えていない。これは一言でいうと、一種の「甘え」ということになると思います。

武山 そういうことですね。いま言われたような現実認識というものが驚くほど少ない。だからそれはやはり「甘え」であり、ある意味でいうと一人よがりになりがちだし、幻想的だということになると思う。幻想と理想とは違う。それから短期と長期は違うと思うのです。もちろんわれわれが世界のいかなる地域においても戦争という状態、あるいは飢餓という状態がなくなるという日が 1 日も早く来ることは理想として期待する。日本としてもそういうことに対して contribute できることはすべきだろう。

しかしそれは理想であり方向なのです。方向と現実、理想と現実との間にはなさなければならないいくつかのたいへんなステップなり努力なりがいるわけです。

アジアの非核武装地帯構想ということがよくいわれるが、「日本は平和国家だ。日中も国交回復した。この次はアジアの非核武装地帯構想だ」という。これは私の観点からいうと「理想」なのです。現実は中ソ問題一つ見ても、あるいは北朝鮮人民民主主義国とソビエトとかあるいは中国との関係、あるいは朝鮮半島の38度線を狭む

北と南の関係、アリリティーというのはかなり厳しい。それをさっさと申し上げた理想にいくためにはいくつかのステップもあればジグザグコースもあるだろう。それからおそらくそういう現実から理想に到達するためにはわれわれがそれこそ金も努力も汗も、場合によって血もいるかもしれないという、それだけの冷静さと厳しさがないとだめじゃないかという気がしてしょうがない。

国体とフジヤマ症

金山 いまおっしゃったように確かに幻想と理想とは違う。それから理想と現実というものがある。あるいは長期・短期もわきまえねばならない。私はもう 1 つこれにつけ加えたいのは、いわゆる戦略と戦術というのと区別がつかないだけじゃなく、逆になっている場合も多々あるのではないかということです。それというのも、しっかりした原則というものがなければ、戦術と戦略の区別がつかないのはあたりまえなのです。

それで思い出されるのが、戦前の「天皇国家」における「国体」ということです。つまり、国体を保持せんがためには、日本全体を焦土としてもいいみたいな考え方であった。国体、国体ということで、日本はずっと日露戦争以来いやらしい時代をすごしてきたと思うのですが、途中でわけがわからなくなったり、「國体明徴」をやってますますわけがわからなくなったりしました。戦争に負けてなお「終戦の詔勅」で天皇は「朕ハ茲ニ國体ヲ護持シ得テ……」というようなことをいっている。負けてなお国体だけはとにかく残ったんだということをいわないといかんというようなところに、先ほどおっしゃったような精神構造が現われているのではないか。

これはつまり、日本は何か神がかりになりやすい、つかれるということじゃないか。何かあらぬものを頭に描いて、そしてそれに思考の価値を与える。私はそれを「フジヤマ症」というんです。つまり、日本人が日本人の特異性みたいなことをいうとき、あるいは外国人に対して自己表現するときに、すぐにフジヤマみたいなものを持ち出す。そのときに、フジヤマというのは日本と等しいという言い方をします。それから、フジヤマというものは「神の山」だという。「そんな説明わからない」といわれると、「標高は何メーターである」という非常に即物的・散文的な次元に降りてくる。それ以外のことによって日本を説明することはなかなかできない。あとはしどろもどろになる。もしくは、悪くするとそういう神がかり的なものを押しつける、強制をするといったような一種の「野蛮主義」みたいなことがあるよう思う。

武山 金山教授の大演説で（笑い）非常にぼくも勉強になりましたけれども、「国体」という問題がこういうお話の中に出てくるということになると大体年なりお里がわかるんで（笑い）おそらくいまのティーンエイジャー、あるいは20代の人は「国体」というと国民体育大会の略だとしかわからないのですよ。喜ぶべきことか悲しむべきことか。

「フジヤマ症」という非常におもしろいお話を伺ったんですが、エルンスト・カッラーが言ってたと思うのですが、やはりシンボルというのはいるんですね、どの国民にも、人間は具体的なものだけでは生きられない。そういう意味で富士山というものを象徴という表現で使ってるんじゃないかと思ったわけです。

金山 ところがそうじゃないんです。シンボルというのはいずこの国、いずこの人間にもあると思う。ところがシンボルと実体と区別がつかない。あるいはそれが逆転するということが実はたいへんな問題というか、日本人の特異性ではないか。というのは、昨年天皇がヨーロッパを旅行された。あのときに明らかになったことは、結局「象徴としての政治」というものと「技術としての政治」というものの違いであったと思う。つまり、あのとき外務省や宮内庁が考えたことは、天皇なる人間がどこかお歩きになれば、それだけでありがたいきわみである。日本ではそのとうりなんです。ところがヨーロッパの皇室においては、国民サービスといったものをやっている。それをマメにやらないと、すぐ問題になる。

日本人というのは天皇さえ持ち出せば、今度アメリカがだめだからヨーロッパへ行こうというときに、一応同じ立憲君主国であるよしみで何とかいくんじゃないかと思う。そういうところがある。これも「甘え」といってしまえば甘えであるけれども、いま申しあげたように象徴と実体の区別がつかないか、あるいは逆転するんじゃないかということなのです。

メダカの群はどこへ行く

武山 非常におもしろいご発言をなさいました。で、さっき、若い人も実はあまり変わってない。深奥の深層心理とか、ぎりぎりの行動様式はあまり変わってないのではないかとおっしゃったけれども、戦前と戦後と、いまもなお変わってないことがあるとすれば、それは1人でいることがこわいということ。つまりメダカのように群れていつも走ってないと何となく安心できない。ということでしょう。

それから、自分と他人との区別ができるといふこと

と、終戦直後のことばでいえば近代的個人主義なり民主主義が確立していないということなのかもしれませんね、案外。

しかしこれは非常に不思議だと思うのです。われわれ戦前の教育を受け戦中の教育を受けてきた者からすれば、戦後民主主義教育をやってきて結局身につかなかつたのか。けっこう奇矯な言辞を弄したり、奇態な風体をしている日本の若い人たちの一人一人の気持ちの中に立ち入ってみると、自分一人でも立つというような近代民主主義の基本的なところというのは定着していないのかしらと。何も赤軍派とか何とか、あれをもって現代の教育の悲劇的な帰結にあげるつもりはないけれども、民主主義教育を受けてきたと思っている若い人たちが、ご指摘になったようなことであるとすると、一体これはどう考えたらいいのか。

金山 それはいわゆる総論と各論が合ってないということだと思う。つまり戦後の民主主義というのは総論で入ってきたんです。

武山 建前と実質。

金山 そういうことです。いわゆる個人主義の厳しさ、個人主義のさびしさ、あるいは個人主義の血なまぐささみたいなものは、各論のレベルで全然経験しとらんのです。そういうことですから、メダカが群れて歩くということになるのは当然なのです。

武山 群れてやってもいいんだけども、そのときに1匹1匹のメダカが、日本が置かれている内外条件に対する厳しいリアルな目を持たないとメダカはとんだところへ行っちゃう。

金山 やはりとんでもないところへ行くんじゃないですか。

英語教師はどうあるべきか

武山 今まで戦後の進歩派の人々の間には、「西欧は進んでいる、あるいは社会主义は進んでいる、日本は遅れている、日本はこれに追いつかなきゃならん」という発想が非常にあった。60年代にアメリカの政策が挫折する、あるいはソビエトの社会主义が、ハンガリー動乱とかチコの動乱を引き起すということになると、文化というのは多様だという発想が出てきますから、どれがいいとかいうことではない。

日本というのはよかれ悪しかれ戦後26年の間経済の回復、復興ということになってきた。その結果これだけのものができ上がった。新しい時代は新しい問題を含んでいく。そして経済的にいえば世界の大國になってしまっ

た。われわれがそうなりたくないと思ってもそういうふうに認められざるを得ない。政治的にもそうだった。そういう時点に立った場合に一体われわれとしてはどういことを選択するのかということが必要だということだけを私は申し上げたわけです。

もしそうであるとするならば、この雑誌の読者である中学校、高等学校で英語を教えておられる先生方、この先生方の対象相手は非常に精神形成期にある重要な時期であるし、しかも英語という意味における国際語をおやりになるという方々ですね。すると、あなたのように英語の練達な方、しかも広い、文化論あるいは歴史論をお持ちの方においては、そういった先生方に率直にどういうことを望まれるんですか。

金山 いや、私は忠告をするような立場の人間ではありませんけれども、先ほどからおっしゃられていることを私なりにことばをかえて申し上げれば、日本と日本人は「追いつき追い越す」のはまことに得意な国民であり、国であると思います。しかしいまやG N P 3位であるということになると、これから問題となるのは「追いつかれ追い越される」ということではないか。いまでは「追いつき追い越せ」で、その1つの局面として「一方向性の膨張主義」でやってきたわけですが、これからは、ほかの国、ほかの国民に追いつかれの場合にはどういうふうにすればいいか。あるいはほかの国民にどういうふうにして追いつき方を教えるのか、あるいは追い越されるようにするのかということが、課題であると思います。

いまでは英語は、「追いつき追い越せ」のいわば手段としてやったんじゃないかな。つまり外国の文献ができるだけ早く読んで、それを日本に紹介するということではなかったかと思う。しかしながら、これからは「追いつかれ追い越される」ための語学教育が必要です。ほかの国、特に日本にくらべれば後進国とみなされている国に、どのように英語を通して経済発展の仕方をわかってもらうか、それをやることだと思います。

たとえば、今まで「日本の経営」にはやもすれば何だかちょっと神がかり的なところがありまして、「日本の経営」というのは特異なんだ、非常に謎めいているんだ、ということで説明が終始してきたように思います。しかしながら、「アメリカ経営」というものが今日あるのは、あれだけの数字を使い、あれだけの言葉数を使って、よきにつけ悪しきにつけ世界に説明してきたことだと思います。これはやはり私のことばでいうと、「追いつかれる」ということに対応したやり方です。

ところが日本の場合には、「追いつき追い越す」のは

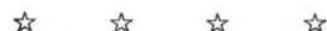
やったけれども、「日本の経営」なるものが非常に効率的であったというのなら、いかにしてそれが効率的であったか、その技法は何であったかかということを、まったくといつていいほど説明していない。したがってこれからの中学校・高校の英語の位置づけ、英語教育の位置づけというものは、外國に知らしめる、外国人と通じ合うためのものでなければならないと思います。

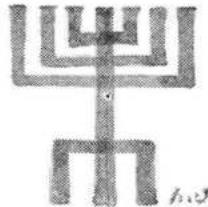
武山 ぼくもほんとうにいまのお話感同です。日本が国としての独立が保てるかどうか、国民一人一人が厳しい国際社会の中にどうやったら生きて、また発展していくか、あるいはよりよい世界がつくれるかということを考えてきた明治の初期に、たとえば岡倉天心とか新渡戸稟造とか内村鑑三とか、あるいは英語の教育学界において世界に冠たるようなすばらしい英語をみずから駆使して、そもそもっとすばらしいことは、そういう手段を駆使して世界に訴える思想と内容を持った人がどうしてあんなに出たのか。

日本に英語教育が始まって100年以上になる。確かにランゲージ・ラボができたり技術的な面においては日進月歩だと思う。いまおっしゃったように日本全体が新しい局面になっているとすれば、また日本が100年間の間にしてきた失敗は失敗の中から教訓が導き出されると思うし、また成功は成功の中から教訓が導き出されると思う。そういうことから私は全国の英語を職業としておられる方々に、かつての岡倉天心、内村鑑三、新渡戸稟造、あるいは駐米大使をやっておられた斎藤博さん、あるいは近く明治時代のそういう教育を受けられて英語教育を50年やられて亡くなられた小林光さんというようなよき先達がおられるわけで、私はまさに金山さんが言わされたように、これから手段を使って世界に訴えていく、あるいは世界に披瀝していく、そこで問題は再び立ちかえって一人一人がどういう問題を持つか、訴えるべき手段は持っているけれども、訴えるべき内容は何なのかということが非常に重要だと思う。

金山 そうですね。その内容なるものがいまのところはG N P 3位であり、あるいは平和憲法というだけのことになっているわけで、それに代わるものを考えなきゃいけないと思いますね。

(速記:林 節子)





コミュニケーション手段としての英語

KUNIHIRO MASAO

國 弘 正 雄

日本をとりまく国際環境

きょう私がお話し申し上げようと思っておりますのは、われわれ日本人の持っている意思疎通ないしはコミュニケーションのパターンがわれわれの外国語——この場合英語ですが——の学習に一体どういうような干渉、interferenceを行なっているか、そしてそれをどのようにして乗りこえていくべきであるか、というような点についてであります。

私どもいろいろな場で、国際会議であるとか、外に出てあちこちで人と会うとか、あるいは日本にやって来た各界各層のいろいろな国の人と話し合いをするとか、そういう対外的な意思疎通ないしは折衝の場においてつくづく感じさせられることの一つは、日本が理解をされている度合いが著しく低いということです。とともにかくにも日本が国民総生産でいうと2,227億ドルと申しますから、アメリカの1兆ドルの約5分の1、さまざまの国内的な弱点をかかえながらも、経済大国になったことは事実であり、それだけに世界政治ないしは世界経済で占める地位も何はともあれ上昇したにもかかわらず、理解されていないということをしみじみと感じさせられることがしばしばあります。現に日本をして、イエロー・ヤンキーであるとか、エコノミック・アニマルであるとか、あるいは原理原則を欠いた単なる大国にしかすぎないとか、いろいろ海の向こうから日を追って批判が増大している。そのことは日本のマスコミもしばしば取り上げていることでもあり、先生方もすでにご承知のとおりであります。

私がきょうお話の冒頭に先生方と一緒に考えてみたいと思いますことの一つは、こういうような状況が一体いかなる理由に基づいているのか、そのような理解の不足の原因が那辺に存するのか、そしてそれを何とか改善していくということと、先生方が日夜ご苦労なさっておられる英語教育との関連が一体あるのかないのかといふような点であります。もちろんこの種の原因の中には

われわれの直接的なコントロールの外にあるような、つまりわれわれがいくら頑張っても、国がその政策を変えなければどうにもしようがないというような問題もあります。

その一つの例であります、1971年の統計を見ますと日本を海外に向かって紹介するために政府が費やしたお金はわずかに年間8億円がありました。この予算の額を他のいわゆる先進国と呼ばれている国との比較してみた場合には、いかにわれわれ日本人がみずからを海外に向かって紹介し、彼らのよりよい理解をはかるという努力において欠けているか、はっきりいたします。たとえば、フランスの場合には600億円をこえるお金をその目的のために使っております。国内の経済問題、あるいはベトナム戦争その他による社会的な荒廃などさまざまな問題を抱え、おそらくは建国200年このかた南北戦争を唯一の例外として、いまだかつて今日のような大きな国歩艱難に直面したことではないであろうと思われるアメリカですら、144億円をこのために使っております。あるいはわれわれ英語を勉強している者にとって非常におなじみの深い英国でさえ日本の約10倍、78億円というお金をその目的のために費やしています。先進国の中では比較的後進国である、開発途上国であると思われているイタリーですらが日本のちょうど5倍、40億円をその目的のために使っている。日本はわずか8億円にしかすぎません。四次防とやらには5兆なにがしという巨費を投じているこの国がです。しかもお金の額だけではありませんで、具体的にそういう作業を行なう人間の数を比べると、日本の場合には外務省にわずかに23名の人があるにすぎない。ところがイギリスの場合には4,079名をそういう目的のために配置している。どうも金額といい人員数といい、われわれのこの分野における努力と、たとえば英國のそれとの間にはあまりにも大きな差があるかのように見えるのであります。

もう一つ具体的な例を申し上げましょう。世界各国で絶えずたくさんの本が出ております。しかもその書物の中には外国語の翻訳もたくさんあります。これはやや古

い、1968年の統計であります。全世界の翻訳された書物の中で、最も多いのがロシア語への翻訳であります。2番目に多いのはドイツ語、3番目に多いのがスペイン語であります。4番目に英語。そして5番目に多いのが日本語であります。ところが一方、日本語から他の外国語に翻訳されたものの数を見てみると、これは全世界の翻訳された作品の数の0.2%にしかすぎない。そしてその順位はというと、ベンガル語から翻訳されたものの数よりも、日本語から翻訳をされたものの数の方が少ない。こういうしさか驚くべき状態が1968年にあった。おそらく71年、72年の今日においても事態はさほど変わっていないであろう、こう想像されるわけであります。

いま申し上げた二つの数字からおそらくお察しいただけるように、どうもわれわれのみずからを海外に向かって紹介をする、みずからを相手に理解してもらうための努力を、個人としてもあるいは集団としても、あるいは物質的にも、非物質的な側面においても行なっていくという姿勢、これにはきわめて弱いものがあったといわざるを得ない。そして一番冒頭に申し上げました、日本がどうも誤解をされておる、誤解とまでいわないにしても日本に対する理解が著しく不十分である。そして日本に対する理解の不十分さが、ひいては日本に対する不信感や警戒心や、あるいは嫉妬というようなさまざま屈した思いを生み、そしてそのことがさらに日本の置かれている国際的な地位を非常に危うげな、つまりは precarious な、ひ弱なものにしている。これは私ども外の仕事をいろいろとやっていて最近とみに痛感させられていることがあります。どうもいろいろな状況を見てみても、日本が置かれるであろう国際的な環境がいまよりも、あるいは今日よりもよりゆるやかな、われわれにとって気らくなものになっていくであろうという微候もしくは可能性は、すこぶる少ないといわざるを得ない。おそらく日本をとりまく国際的な環境はますます厳しさの度を加えるであろうと考えておいて間違いがないと思うのでありますが、そのことと、そしてわれわれの側における、何かわれわれをよりよく外国人に理解をさせようという努力の欠如の間には、直接間接に関連があると私は思うわけであります。しかしながらどうもこういう側面になるとわれわれの手の打てる幅はきわめて限られています。またそういうようなわれわれがみずからを他の人々に対して説明するという努力を怠ってきたということと、そして日本人のいわば社会的な、文化的な性格というものとの間には何らかの関連があるのではないか、こう考えられるのであります。

民族の均質性と多様性

日本が誤解をされている、あるいはどうも警戒されているということは、これはもちろんわれわれ日本人、ないしはお互いのような市井の日本人がもう少し努力をしたからといって、一挙に解決をみるというほどなまやしいものではありません。そのことは私もよく承知しております。にもかかわらず一つだけ最初に申し上げておきたいことは、われわれ日本人ないしは日本というものが、世界的に見た場合にはたいへんに理解をすることがむずかしい、かなりユニークな存在であるという点であります。これを忘れてはいけないと思います。それだけに世界的には例外に属するわれわれの方から、積極的に打って出て、理解を求める、という必要も大きいわけであり、その努力の不足がなげかれるわけでもあります。

どういう点でユニークか、いろんなユニークな点があります。しかし英語教育とか言語教育に関連して一つだけ例をあげるならば、これは何といっても日本が世界に147ほどある国の中で、それこそまれに見るほどの homogeneous な存在であるということであります。単一性といつてもいいかもしれません。あるいは均質性といつてもいいかもしれません。つまり homogeneity、非常に均質な、同質な民族である。これはまず人種的にいってそうです。われわれみんな黄褐色人種、人類学では Mongoloid と申しますが、蒙古人種に属している。もっとも私のように人類学を若干勉強した人間にとりましては、先生方のお顔を拝見しておりますと……まあこれは上を見てむしろ申し上げるべきであって、先生方のお顔を拝見しながらそういうことを申し上げると、あいつはおれのことを南方系だとレッテルを貼りやがったということになりますから要注意であります(笑)、先生方のお顔を拝見してまして、どうもあの方の御祖先は南方系ではあるまいか、あるいはどうもあの方の御祖先はいわゆる北方騎馬民族の出身で、いまの地図で申しますと渤海湾あたりのツングース族か何かが朝鮮半島を伝って日本にやってきた、その末裔であろう、こういうふうに考えられなくもない。(笑) その意味においては日本といえども民族学的に申しますならば、これは明らかに南方系の諸民族と北方系の諸民族との混合であることは間違いない。これは日本のたとえば社会習慣、神話などを見ておりましても南方起源のものと北方起源のものとを明らかにこれを峻別することができる。

一つだけ例を申し上げますと、たとえば天照大神が弟の須佐之男命の横暴にいかりを発して天の岩戸に隠れて

しました。太陽がかけって天下はまっ暗になってしまった。そこで神さまが集まって相談をした。八百万の神というわけですから、800万もあるわけであります。(笑)知恵のある神さまの一人、思金神(タキシキ)という神が、いいことがある。ひとつみんなでワーワー岩戸の外でさわごうじゃないか。そうすれば何事ならんということで天照大神がちょっと顔をのぞかせるかもしれない。そのときに力の強い神さまに頼んで外へ引き出せばよろしい。そこで天鈿女命(アメノヒメ)という女の神さまが踊りを踊る。みんながワイワイさわぐ。何事ならんと天照大神がちょっと顔をのぞかせる。手力男命という力の強い神さまが天の岩戸をぐっと開けて外に出す。太陽がもとどおり戻った。と、こういうモチーフの神話。実は、この種の神話は南方民族にはたくさんあります。たとえば南方中国には苗(ヤオ)族と呼ばれている人がいますが、この人たちの間にも全く同じモチーフの神話がありますし、インドはアッサム地方のナガ族の間にも全く同じモチーフの神話が存在いたします。これをわれわれは日蝕神話ということばでひとまとめに呼んでおりますけれども、これは明らかにわれわれが南方起源のものを多く伝えておることの証左であります。われわれが稲作、rice culture を主たる農業の形態として持ってきたということも日本人の南方起源を証明する一つの有力な手段であります。ところが同じ神話の中にも、天孫降臨などという神話がある。天孫、瓊瓈杵尊(ヤマトタケミカツル)が高天原(タケミカツル)に降りてきたという神話でございます。一体その高天原というのはどこなんだろうということで戦争中、戦前も含めて時の政府の弾圧にもかかわらず、多くの民間の歴史家たとえば白柳秀湖という方だとか、神話学者、人類学者が高天原の所在を確かめようと思って苦労したわけですが、そういう神話がある。ところが、天孫、瓊瓈杵尊が一統を引きつれて高い山の峰の上に降りてきたというと全く同じ建国神話が朝鮮にあります。朝鮮半島に檀君(タヌン)神話というのがありますが、これが全く同じであります。しかも非常に興味深いことは、天孫、瓊瓈杵尊は、高天原のソフルの峰というところに降りるわけであります、檀君神話にみられる朝鮮建国の祖もやはりソフルの峰というところに降りてくる。ソフルというのは古代朝鮮語で都という意味であります、韓国の首府がソウルという名前で呼ばれている、あのソウルと語源が同じである。そこらになりますと北方的な要因が日本人を形づくっている一つの要素であるということがはっきりいたします。

きょうは日本民族の起源についてお話し申し上げるわけではありませんから、話をもとへ戻させていただきま

すと、ともかく南方系、北方系という一つのブレンディング、混合体であることは間違いない。にもかかわらずその混合というのは千六、七百年以上も前におきておりまして、それ以降というものはほとんど目立った血の混合もなしにこの4つの島、アメリカの面積のわずか25分の1、中国の面積のわずか27分の1くらいのこの小さな4つの島の中でヤッサモッサしながら生きてきた。そして多くの場合近親結婚を繰り返して、非常に高度の均質性をもって存在をしてきた。これがわれわれ日本人である。これを人類学の用語で申しますと endogamousつまり族内婚的均質社会ということになります。

ところが、147の世界の国々の中で、こんなに同一民族で、もちろん同一人種で、同一言語で、そして同一の生活感情、生活様式を share、共有してきた民族集団、あるいは国家というものは例外であります。これは先進国であると、いわゆる開発途上国であるとを問いません。開発途上国の場合においてはそういう意味での diversity あるいは heterogeneity、異質性というものが非常に高い。しかし先進国においてもそれは同様に高うございます。たとえば私が近著『国際英語のすすめ』でも書きましたように、インドに参りますと、国勢調査の際に必ず、お前の mother tongue 母語は何かといって書き入れなくてはならない。もちろんインドの場合にはご存じのように非常に文盲率が高く、大体100人のうち字の読み書きができる人は20人くらいしかいない。残りの80人近くはいわゆるあきめくら、文盲であります。したがって非常に問題があるわけですけれども、とにかくお前の母語は何だと書かれる。その母語の数たるや1961年の統計で1652あった。1652もの異なる言語を話す集団がインド人という一応一つの国家のまとまりの中に存在をしておる。公用語が14ある。14といったってたいへんです。ですからインドの国会などに先生方はおいでになるチャンスがあればおわかりになりますように、国会の議事は英語で行なわれているか、さもなくば同時通訳を使って行なわれております。

この種の poly-lingualism のもたらす問題は、個人にとっては非常に大きな心理的な負担であるでしょうし、また政治行政のレベルで考えても大変に厄介な政治問題であるでしょうし、社会学者や人類学者にとっては非常に興味のある行動科学的な問題でありますし、言語を専門にしている人たちにとってはこの poly-lingualism の秘密というのは、ある意味においては言語教育とともにからんでくるおもしろい主題であります。

そういうような問題を抱えている、たとえばインドを比べるとわれわれの社会は何といっても單一性でありま

す。同じ生活の様式、生活の意識を共有している。ことばが違うということは民族が違うということありますし、それはとりも直さずその生活及び意識の両面において大きな相違があるということありますから、ことばが1652もあるということは、1652も違った人間集団が一つの国の中に住んでいるということありますから、それを一つにくくっていく、まとめていくことがどれほど困難な作業であるかは容易に想像ができるわけです。インドだけが例外であるかというとそうではない。おとなりの中国にしてもそうでして、中国というとわれわれ何か漢民族だから成り立っているように思いがちですが、歴史的にたとえば、元朝つまり Yuan dynasty をつくったのは蒙古人で漢民族ではない。あるいは清朝をつくったのは満州族でこれまた漢民族ではない。英語では the Manchu dynasty といいます。とにかく中国には大体50をこえる少数民族があり全体の人口の6%くらいを占めています。6%といつても8億近くの6%ですから実数にすると大へんです。その中には牧畜、放牧を事としている中ソ国境のたとえばウイグル族もおれば、山岳民族が南中国や西南部の山の中には未だに住んでいる。ロロ族とかメオヤ族とかいろいろあります。あるいは馬姓の回教徒もおる、ユダヤ教徒も拝火教徒の名よりもおるというわけで、宗教、民族、言語、ありとあらゆる意味においてきわめて heterogeneous な集団であることは間違いはない。日本なんかと比べますと、もう heterogeneity と homogeneity と、まさに両極であるかのような diversity、多様性を持っているわけです。

そういう多様性を持っているということから彼らは、これは中国人に限りませんけれども、いろいろな状況が出て参ります。homogeneity であるということからまた同時にいろいろな特質が出て参ります。

沈黙の美学

では、われわれ日本人のような homogeneous であるということから一体どういう特長が出てくるかを考えてみると、何しろわれわれ同じような生活の意識と生活の様式——つまり上部構造と下部構造といってもいいと思いますが——を共有しているわけです。向こう三軒両どなりどこへ行ってもとにかく同じことばをしゃべり、同じような生活の様式、価値観さらには歴史体験を持ってきた人間が住んでいるわけです。そうなってくると、プラスの面として考えますと、これは社会的な緊張が少なくてすむ。

しかしながら同時にそれはマイナスの側面にも通じま

す。つまりわれわれ日本人は自分たちとは違った人間集団との間に meaningful な、意味のある人間的な関係を打ちたてていくということにきわめて不慣れであります。そのための技能、技術において乏しいという結果が出て参ります。そして自分たちとは異質な集団、自分たちとは違った集団との間に meaningful な人間関係を打ちたてていくことが即コミュニケーションであり、国際性ということだと思います。ところがいかんせんわれわれ異質なものとの付き合いが日本国内にほとんどない。そういうものが存在をしないということから、自分たちとは違った、毛色の変わった人間集団との間に意味のある人間関係を打ちたてるという面においては経験が乏しい。また非常に不器用であるというようなことが出てくるわけです。ただ単に不器用だというだけならまだいいのですが、もう一つそれに関連して出てくる問題は、われわれ同質の集団の中においては、必ずしも意思疎通は言語を使ってする必要がない。これは家族の間のコミュニケーションを見ているとよくわかります。家族間では一々すべてをああでもないこうでもないと小うるさく説明する必要はない。家族の間ではお互いに知り尽くしているわけですから、「ああ、あれをあれして」と言えば、それでもうあれが、ちゃんとあれされるわけです。その「あれ」が何であるかということを具体的にする必要はない。もっともそういう意味においては非常 specify に inarticulate な、あるいは言語によらない、nonverbal な以心伝心的なコミュニケーションが可能になるのは家族間の関係です。ところが日本の場合は、言ってみれば全体が大きな家族みたいなもので、日本人の間のコミュニケーションは往々にして言語による必要を認めない。そこでわれわれは、たとえば以心伝心というような美学を発達させてしまった。“目は口ほどにものを言う”というコミュニケーションのあり方をわれわれはみごとにづくりあげてしまった。そしてわれわれはそこに美を感じるわけです。

ことあげ（言挙）せずというのがわれわれにとっての美学であった。「ことだま（言霊）のさちわう（幸ふ）」國だというようなことも奈良朝時代にはいっていたのですけれども、平安朝以降になると、ことあげせずということが、ことに男子の場合は美德とされるようになつた。みずからのうちなる思いや、感情、情感をやみくもに表に出すとは、特に男性にとってはうとましいことである。あまりいいことではないという、そういう一種の社会的な規律、訓練というものをわれわれは身につけた。そして沈黙の美学というべきものを発達させたようあります。たとえば禪宗で申します「不立文字」とい

うこと、あの伝統はいってみれば沈黙の美学であり、沈黙と推量の論理学であります。あるいは俳句という、五・七・五の非常に短い詩形の中に天地宇宙を感じさせなければ名句とはいえないという、あの考え方には、まさに点だけぼつぼつと与えて、あとその点を線にし、線を面にしていくのは、読者の仕事である。詩をつくる者の仕事ではないというような点的な表現の好例です。日本画もそうです。そういういわば沈黙の美学、沈黙の論理学、寡黙が美德であるという、そういう伝統の上にわれわれは立っているわけです。したがって具体的なコミュニケーションの手段としても、ことばによるコミュニケーションは、これをできるだけ最小限にするのがいいのだ。つまりコミュニケーション手段としての言語というものに対する信頼感がどうも伝統的にわれわれの中では非常に低い。のみならず、逆にことばによるコミュニケーションにやたらに訴える場合にはいささか問題が出てくるわけです。

たとえば、あいつは口舌の徒だとか、理屈ばかり言うとか、おしゃべりであるとか、「江戸っ子は五月の鯉の呼き流し、口先ばかりで腹わたはなし」などという。私なども生来おしゃべりの傾向にありますから、日本の社会では損をしております。(笑) 大物というのは決して多弁であってはならない。私はいかに大物でないかということを自分でつくづく感じさせられる。(笑) たとえば企業でも、あるいは先生方の場合でもそうだろうと思いますが、大物というのは会議などではほとんど睡っているわけです。会合が終わる3分前くらいになるとやおら目を開けて「もう理屈はええわい。やるのかやらんのか、どっちや」(笑) てなことを言って事がきまっていく。つまり dialectics によって、つまりことばないしは一つの論理と他の論理、一つの立場と他の立場の甲論乙駁の結果によって事がきまっていくという社会ではこの社会はない。したがって根まわしなどということが盛んに問題になったりするわけです。ことばを使うということ、あるいは理屈を言うということが社会的な評価としては低いのです。これは柳田国男さんもやはりそういうことを民俗学の立場から言っておられる。柳田先生によると、話すということ自体、あるいは話すという行為それ自体は日本の文化的な伝統においては、一種の amusement でしかなかった。したがって話をする人間というのは低い社会的な評価をしか受けなかった。具体的な例をあげると、たとえば落語家が「毎度ばかばかしいお話でおそれります」などと言って頭を扇子でたたいて話が始まっている、これは一つの戯画的な例であります。そういうところがある。あるいは戦国時代のたとえばおとぎ

衆などというはなし家、曾呂利新左衛門なんていうのはその一つの例ですけれども、要するにみずからを caricature というかビエロ、英語でいえばクラウンすることによって、わずかにその存在理由を維持し得たという趣きがある。彼らは決して世の中を動かさない。リーダーシップをとる立場にはない。リーダーシップをとる人間というのはすべからく寡黙でなければならない。したがって日本の政治家などを見てもそうです。西欧的な立場からいえば明らかにもっと通用するような、そしてより高い評価を受けるような政治家は日本ではありません高い評価を受けない。実に論旨明解で、論理的で、先見性があって、そして人々との間に議論を戦わして debate を行なって、dialectics を行なって、それによってみんなを引っぱっていこうという類の政治家は残念ながら日本においてはあまり評価されない。どういう人が評価を受けるかというと、起きてるのだから寝てんだかわからないような顔して、イエスなんだか、ノーなんだかわからないようなことをもののみごとにあいまいに表現する術を心得た人間である。あいまいさの美德なのです。そういうようなことがあるわけですから、そこらへんがもう一つ問題となって出てくるわけです。

その点われわれよく誤解をするのです。何かそういうふうに寡黙でいることばかりがりっぱなことであるかのように思いこんでは、ことばによる説明や、論理的な筋みちを立てないで、すぐ肚でいこう、などと胸を叩いたりする人を、東洋的豪傑ということばで呼ぶわけです。中野重治氏に「豪傑」という私の好きな詩がありますが、私はそうは思わない。日本の豪傑です。たとえばホーチミンという人がいた。彼の描いた軌跡なり、彼の一生を見ていて感ずることは、彼は徹底的に民衆の中に入っている、そしてことばを使って理を説いて、理屈を言って、そしてあの北ベトナムの民衆を引きずっていった。そういうタイプのリーダーシップです。毛沢東、周恩来を見てもそうです。あの周恩来の目を見ると、目の光の中に、論敵があればその論敵をあくまで論破しなければやまないといつていへんな情熱を見ます。目の光の中には日本のいわゆる豪傑だとか大物とかとは違う、なにものかを感じざるを得ない。それを東洋的何とかなんて言うのは、これはホーチミンや周恩来に対する冒瀆であり、東洋を僭称するものといえましょう。あえていながらば、きわめて日本に固有なといつてもいいようなリーダーシップのあり方であり、コミュニケーションのパターンです。その点、イザヤ・ベンダソンが例の『日本人とユダヤ人』の中で、「かく申すは理くななり」ということばを引いて、これが日本文化をとく鍵だという意

味のことを述べているのは、大へんな洞察だと思います。理くつはタテマエとして下の者がいえばよいので、リーダーはそんなことにはかかずらわない、ということでしょう。

西洋の論理とものあわれ

もう一つさらに話を進めますと、いま申し上げたような理屈を言って dialectics をどんどんやっていくという、そういう orientation というのは実は欧米の orientation です。西洋の論理というのは元来がギリシャの論理学に始まりますけれども、3つの基本命題があると思うのです。ひとつは、A はイコール B であるという命題、同一の原則です。それから A は B ではないというのが次の命題、否定の原則です。第3の命題は、排中の原則、law of the excluded middle、と英語では申しますが、つまり A でもなければ B でもない、イエスでもなければノーでもないものはあり得ない。イエスかノーかどっちかだ。これが第3の命題。そういう基本的な論理構造の上に成り立ってきた西欧の社会でありますから、発想として出てくるものはきわめて鋭角的な、黒か白かのいざれかを峻別するような類の論理が多い。これは基本的な西洋です。

ところがわれわれ日本人の発想というのは、そういういわば鋭角的な対立をはっきりといって避ける傾向がある。むしろ黒でもない白でもないというような、いわゆる中間色、灰色のゾーンみたいなものを非常に大切にしてきた文化だと思うのです。中国やインドにも実はそういう排中律を認めないという伝統はあるのですけれども、日本の場合には特にそういう中間色を大事にするという伝統が強い。どうも日本人は、超合理性とでもいすべきものに重きをおき、ものごとを区分し、類別化し、対立させることを通じて概念をくみ立てるという作業とはかなり縁遠かったといえそうです。族内婚的な社会の特長なんですね。しかもわれわれの場合には、それが、ある種の美学、aesthetics と結びついている。そういう orientation がわれわれ日本人の場合には非常に強いわけです。黒か白か、異教徒かクリスト教徒かどっちだというような orientation は私はあまり上等な orientation だとは思わない。特に今日のような核戦争の可能性のあるような時代に敵か味方か、神か悪魔か、などというような発想でものに対処しようと思えば、人類には自滅しかないことは余りにもはっきりしている。現に私はアメリカ外交の失敗のひとつは、ダレスの名とともに知られる二律的な、中立を認めない硬直した姿勢、つまりは論

理にあった、信じている一人です。したがって私はそういう鋭角的な対立がいいといっているのではないです。あるいは日本的な orientation、灰色、中間色を大事にしようという伝統的な美意識が劣るとか低いとかしているのでもないのです。私は善悪、あるいは上下優劣を論じているのではない、違うと言っているのです。

ただ問題は、英語あるいは欧米語は、その基本においてきわめて西欧的な dialectic なものをその中に持っている。それを reflect しているのだということだけは申し上げておく必要がある。さらにことばをかえていうならば、そういう dialectics というか polemics をある程度われわれ自身が身につけ、dialectic な発想なり orientation をしないとどうも英語なり欧米語はうまくしゃべりにくい、あるいは上達が期し難いという落しあながあるということを申し上げたい。

そんなことを言ってもまさに「かく申すは理くつにて」で、あまり抽象的でよくわからないとおっしゃるといけませんので一つの例を申し上げます。非常に、具体的な即物的な例です。少し戯劇的にすぎるかも知れませんが、国際キリスト教大学の齊藤美津子博士がアメリカの大学院に留学しておられたときに、大学院の先生が、これは老大家だったらしいのですが、必ず朝学生に会うと “Are you happy?” と聞いたというのです。実はマックス・ラーナーの *America as a Civilization* という本を読むとこの “Are you happy?” というのは少なくとも中西部においては女人に対するあいさつとしては一つの idiom になっている。Cliché になっているそうでありますから、したがってその陳腐化した idiom をとらえて、ああだこうだという理屈を言うことはいささか英語的にいえば make a Federal case out of it という感じにならざるを得ない。しかし “Are you happy?” と問われて日本人は何と答えるでしょうか。それに対して、 “Yes, I am.” というヤニ下がった答えをするほどわれわれは天下泰平というかトッポくはない。そうかといってしかめつらをして “No, I am not.” などと言えば、これまたいかにも非社交的でありますし、いかにも世をすねたという感じを否みがたい。困ってしまうわけです。そうすると「……」口ごもって、もう少しうまいこと言えないだろうかと思って頭の中で英作文したりするからおかしげな英語が出てくるわけです。これは私は比喩的かつある程度までは facetious に申し上げているように先生方お受け取りになるかもしれません “Are you happy?” と言われて、“Yes, I am.” あるいは “No, I am not.” ということが平然と言えるような mentality がないと英語はうまくならないということをあえて申し上げたい

のです。これはわれわれにとっては心理的に大きな抵抗のあることです。つまり yes か no か、黒か白かという, either or な立場から、すなわち論理学でいう dichotomy, 二者択一、二律背反的な立場からものを発想し、ものに対するいと英語がうまくしゃべりにくい、というのはわれわれにとっては少なからず悲しいことです。しかしどうやら英語ないしは欧米語というものにはある程度まで本質的にそういう基本的なギリシャ以来の二者択一的な orientation が根深く、色濃く残っていることは認めざるを得ない。

先生方もご存じのようにアメリカの有名な人類学者にベンジャミン・リー・ウォーフという人がいた。言語に非常に詳しい人でしたが、彼がウォーフの仮説、 hypothesis を立てている。このウォーフの仮説を非常に単純に申し上げますと、われわれをとりまく客観的な世界、あるいは客観的な体験が同一であっても、その体験なり世界をどのようにスライスするか、切るかというその切り方、つまり客観的な体験を一つのバイにたとえるならば、たとえバイは全く同じであっても、そのバイをどう切るかという、切り方を大きく左右するものは言語である。したがって、日本語をしゃべる日本人とアメリカ語をしゃべるアメリカ人との間には、たとえ同一の客観的な世界なり体験なりが与えられたとしても、私は日本語を母国語とし、彼は英語を母国語とするが故に、日本語と英語との間に客観的な世界の切り方が違うのだ。これがウォーフの仮説です。その仮説によるならば、私が日本語をしゃべっているときの私のまわりの客観的な世界の切り方と、英語を一応しゃべっている場合の同じ客観的世界の切り方との間には当然相違が出てこざるを得ない。つまり日本語でいう場合には、原則としてしあわせか不しあわせかという二者択一的な切り方をしないのです。しかしに英語の場合だと「しあわせですか、不しあわせですか」というようなことを朝一番に聞くという、そういう切り方をするわけです。そこに必要なものはある種のギアチェンジです。日本語の場合と英語の場合とバイの切り方をかえなくてはならない。そうしないと英語に習熟できないということを私はあえて申し上げたい。なお、このウォーフの仮説については、クラックホーンの *Mirror for Man* という人類学の入門書に簡にして要を得た記述がございます。幸い外山滋比古先生や光延明洋氏の名訳が出ておりますので、ご興味をもたれる先生がたにはぜひそれにおつきになることをおすすめします。

したがって英語の勉強というのは、LL とか、カセットとか、あるいは英会話中級番組とか、そういう機械的

な作業だけでは絶対にものになるわけではない。機械的な訓練作業、私はもちろん必要だということは百も二百も認めますし、只管朗読とか只管筆写ということを強く主張している位ですが、ただそれだけでは十分ではない。言語というものはそれほど単純なものだと私は思わないのです。その意味でギアチェンジということを一つだけ申し上げたい。パーソナリティー・チェンジといつてもいいかもしれない。

特に日本人の場合、先ほどの話に戻るのですが、われわれ日本人のものの見方というのは dialectic ではない。何か灰色的なものをただそこはかとなく全部すうっと吸収するようなところがある。それは日本人の美意識だと思うのです。私はそれをたいへんに高く評価するわけです。以心伝心だってそうです。腹芸だってそうです。ところがそういう以心伝心、腹芸というのは、共通な生活の様式や体験や意識を持っている同士の間では成立するけれども、異質なものを持っている人間の間では原則としては成立しきれない。佐藤栄作がニクソンと織維交渉をやったときに、「おれはニクソンと長い間の深い仲だから、話し合い3分、腹芸7分でやってくる。」と、こう言ったのです。これはおととしの10月の22日の記者会見の席上でしたが、冗談言っちゃ困るというんです。腹芸などというものが成立するためには意識や生活体験が共有されていなければならぬ。ニクソンと佐藤の間に何がありますか。アメリカ人と日本人の間にそれを腹芸7分でやってくるなどということをぬけぬけと言う無神経さ。これには全くあきれはて、必ずこれは失敗すると思ったんですが、果せるかな失敗した。彼らは言語によるコミュニケーション、verbal なコミュニケーションにもっと多く期待している。多くの信頼をおいでいる。日本の場合そうではない。もっとフワッと全体の何かに静かに収斂させていく。日本人のそういうものの発想なり美意識なりの symbolical の例としてよく出されるのが、もののあわれということです。本居宣長がもののあわれということを言い出したのは、これは漢心(カコイ)という、つまり当時のいわゆる儒教の精神というか、儒教的な発想の一つのアンチテーゼとして彼は大和心ということを出したわけです。ところが漢心のアンチテーゼである大和心なるものが、その中にはテーゼ、アンチテーゼというような、いわゆる dialectics を全然含んでいないのです。これは非常に奇妙なところです。日本的なある種のデフォルメです。漢心がいけない。これにいつまでもとらわれるべきではない。つまり Chinese mind に対するアンチテーゼとして、Japanese mind が強調された。にもかかわらず、その彼の言う、

Japanese mind, 大和心というものの中には何らそういう反対概念の対立による緊張というか、やりとりが含まれていないのです。これはものみごとにおもしろいことです。では一体彼のいう大和心とは何だということになりますが、答えは、もののあわれだということです。彼は日本人の心を探ろうと思えば、このもののあわれということがわからなければわからないというわけです。じゃあ一体、もののあわれとは何であるか、というと、そのあたりから説明が美意識の中に踏晦していくわけです。たとえば桜の花がハラハラと散る。それを見てわれわれはある種の愛惜の思い、哀感を抱く。そこに盛りの終わったものに対する愛惜の念がある。それは人生全体にも通じ、全存在にもあてはまる。日本人だったら感ずることができるでしょう。他方、そこに小さな子どもがいる。無垢な子どもがいる。ウイリアム・ブレークの詩の中に出でてくるような無垢そのものの、innocent そのものの子どもがいる。いとおしいとわれわれは思う。そこにまた同じくある種の愛惜の念を覚える。それが大和心だと、こういうわけです。日本人にはわかるような気がします。pity, compassion, empathy, sympathy, love, affection, all combined というようなものが、mixed together という感じです。日本人には少なくともわかるような気がする。ただこれをたとえれば異人さんに説明しようと思うとたいへんにやっかいです。私も必死になって説明しようとするんだがうまく行かない。彼らみたいに dialectic なものの考え方になれた連中には、もっとはっきりと論理的に定義できるものじゃないとビンとこない。イギリスのW. G. アストンという先生が明治初年に日本にやって参りましたして日本文学を勉強した。1899年に『日本文学史』という書物を書きましたが、外人の手になる日本文学通史としては最古のものです。芝野六助という人の邦訳も出ています。彼は日本文学をいろいろ翻訳いたしましたが、このもののあわれというのをどう英語にしていいかわからない。英語にならないのです。そこで彼は思いあぐねてこう訳した。“Ah-ness”私はこの訳は絶妙な訳だと思うのです。つまり、桜の花が散る「アー」と、こういうわけです。小さな子どもがかわいらしい「アー」と、こういう。そういう quality である。だからもののあわれとは、その“アー”という exclamation というか、interjection に尽くるというのが“Ah-ness”という彼の訳語の意味であります。(笑) 名訳ですね、これは。そして日本の社会というのはいまでも基本的には The land of Ah-ness です。そういうところをひとつわれわれは踏まえておかないといけない。現に宣長自身ももののあわれを「見るもの、聞くもの、

ふるる事に、心の感じて出る、嘆息の声」と定義しています。まさに Ah-ness ですね。

その点欧米は dialectics が伝統としてあった。中国もそうです。ホーチミンや周恩来を東洋的豪傑と呼ぶのはおかしいと申し上げたのですが、それと同じ意味において、たとえば中国文明の伝統の中にはそう何でもかんでももののあわれみたいな一言でさっと片づけ。美意識の世界で処理してしまうということはなかったわけです。たとえば紀元前4世紀の孟子の一節に一般民衆が大切なのか、それとも国家が大切なのか、それとも君主が大切なのか、といって自問自答するところがある。孟子は何といっているかというと、「民を貴しとなす。社稷(社禰)これに次ぎ、君を軽しとなす」と、こういっている。つまり民か国王か国家かという、そういう三者択一的な発想、これは Ah-ness の日本の発想にはなかった。西欧の発想には豊かにあった。中国においてもしかりである。しかも民をもって貴しとする、という結論はすぐれて近代的です。水々しいかぎりです。フランス革命以来の歐米のいわゆる民主主義の思想というか、考え方というのは、そこにまさに尽きているわけです。むかし後藤末雄さんとか、五来欣造という先生方が、フランス革命や啓蒙思想に与えた儒教の影響について本を書かれたことがありましたが、中国の方が古いですから、孟子の結論が現代的なのも当然かも知れませんね。それはとにかく、すぐれて近代的な、現代的な発想を中国人はいまから数千年も前にやっているわけです。しかもそれが dialectic な形をとっている。老子などを見ますと、たとえば物質的な富の増大と人間のしあわせとは一体どっちが大切なんだという議論を徹底的にやっています。あるいは技術と人間のしあわせとはどっちが必要なんだということを盛んに議論しているわけです。そして人間の物質的欲望をやみくもに刺激し増大させることは、人間の破滅に連なるといっている。老子も同じく紀元前4世紀の人ですね。だから欧米人にとって中国人と日本人とどっちがわかりやすいか、理解がしやすいかというと、明らかに中国人です。これは間違いがない。現に日中双方に通じている欧米人で、中国人はよく判るが、日本人はどうもよく判らない、なにか一枚へだたりがあるような気がしてしかたがない、と洩らす人が私の身のまわりにも数人はいます。

中国人とアメリカ人との間には agree to disagree、意見が一致しないという点において意見の一致を見ていたのです。その agree to disagree という意味での agreement があったればこそ、それはもちろんドゴール

(p. 52へつづく)



SILENCE IS NOT ALWAYS GOLDEN

David Hale*

I. Some Preliminary Thoughts.

The word *conversation* has a rather interesting inherent meaning which can help to suggest what it is people are trying to do when they begin one. The Shorter Oxford Dictionary devotes several lines to the various and historical meanings of the word, but the main one is "Interchange of thought and words; familiar discourse or talk," a meaning predominant for the last two and a half centuries, and one which is probably sufficient for us! But I like to think that there is a strong hint of the old Latin word 'converto' in the meaning too. This would then suggest the 'turning around' or 'revolving' of something. That I take to be one of the important elements of conversation—the turning around, or examining from a number of different angles or points of view the subject that is the centre of the conversation. But I will return to this point later.

This is also perhaps not the place for a history of conversational habits, a fascinating subject in its own right, but maybe it is useful to remember that, in 'society' or among the leisured classes, time was available for developing the *art of conversation*. In France perhaps the art reached a peak, with extremely sophisticated exchanges in

language on very subtle levels. In England, and elsewhere too, the habit of careful and highly articulate communication was also finely developed. This may not be what will concern us mostly in these notes, but traditions of behaviour are handed down from such achievements and often dominate, consciously or otherwise, the way we talk to each other in daily life now.

Perhaps the word I might emphasise in this context is 'polite.' The idea of '*polite conversation*' is extremely important, since, obviously, the various speakers are presenting themselves through their words, making an impression of themselves by which they will in many senses be judged. To the native speaker of any language, that language is a vehicle for every range of expression, every shade of feeling. He cannot help it that he reacts instantaneously to his language, he relies on other people's use of it to convey precise or suggestive elements at will.

From this stems one problem for the foreign user of that language. Unless he has become extremely proficient he cannot always know just how he strikes the native speaker; in fact, even when he has lived in the country where that language is daily around him, he may not always be able to feel confident of the shades of meaning in his own or in other people's use of it. This need not be of major importance at least in one sense; few people are ever going to be able to reach highly sophisticated levels in ordinary conversation, and the 'native-speaker' is going to be pleased enough that he does not have to try *his* foreign language to communicate with anyone, so he will be predisposed to thinking well of the brave person who can and does try. The point I am trying to make,

* David Hale is British and is an Honours graduate in English Literature from the University of Exeter. From 1961-1964 he was the Visiting Lecturer in English Literature at the University of Ceylon, and returned to Britain to become a research scholar in the Postgraduate Department of English at the University of Bristol. In 1966 he was awarded the M. Litt. Degree of that University for his Thesis on Henry James, and he was Visiting Lecturer in English Literature at Tohoku University from 1966-1972.

though, is that it is easy to create the wrong impression of oneself when using a foreign language. The Japanese 'student' for example, rarely seems to know the little polite phrases or key-words which make for a smooth flow, and often chooses words of which he neither feels the value nor really understands the meaning. It is also easy to plunge out of the pattern of what most native-speakers unconsciously feel is the rhythm of conversation, or by otherwise not observing the simple unwritten code they can so easily shock and surprise, sometimes, though certainly not always, unfavourably, those listening ears.

It is to suggest some of the lines regarding this 'code' that I am attempting to put together these notes and comments; if I can help conversation to be an easier business, and one in which both sides feel more comfortable, I have done more than I dared hope.

It is fair to point out here, though, that no one can learn to speak a language without considerable effort. I wonder sometimes if people in Japan are not just a shade optimistic when they crowd once a week into the 'conversation class' somehow seeming to expect to become fluent speakers in a matter of a few minutes, or at least after one weekly class for eight or ten weeks!

I'm not a Jonah, I hope, but someone somewhere has to do the work. And that is the student himself. Vocabulary does not grow on trees, and grammar is certainly important. Perhaps the best way to get both is in *daily* dosages of the foreign language through all media available. Japan is lucky in that either on television or FM radio there are practically daily broadcasts in English; in shops, tapes of all kinds are available, and many people own their own tape-recorder. Films are shown everywhere with English soundtracks, though at first the experience may be a disappointing one to the student who expects to understand that swift exchange of colloquial language after only one or two tries. Also, records are available, for purchase or simply for borrowing, and lastly there is an ever increasing galaxy of 'native-speakers' floating around the cities of Japan. Strange as

some may look, they are mostly harmless and quite approachable, provided you really have something to converse about; but more of that anon! Like playing a musical instrument, then, daily practice is necessary, and considerable study. Try playing the guitar once a week and see how far you get! With such a wealth of material available to everyone in Japan, the serious student can make himself really a converser in English if he takes himself in hand and *disciplines* himself in the right way. The business-man who tries only intermittently to attend a class or the scientist who tries to learn two weeks before he goes abroad for a conference, are both their own worst enemies. Very frequent soakings, even if brief ones, are better than long ones at distant intervals!

To return to the opening considerations, we might try to ask what then is a conversation and what does it require?

We can summarize that it is the polite "inter-change of ideas or opinions." In this connection we might stress the *inter*, the *exchange*, as conversation is a thing of give and take. That is, it cannot be a monologue; we might hear, when one speaker is doing too much of the talking, someone whisper: "I wish he didn't monopolise the conversation," an expression of just censure for a piece of impolite behaviour. This means, then, that sharing of the conversational load is very important, both to make sure you do not speak too much, nor too little. Conversation at its simplest is a dialogue, with two people exchanging views and comments, at its most complex it might be a group of people discussing a subject or several subjects in sequence and in some depth, with all the sophistications of cross-and back-reference that might knit up a whole of information and opinion. In either case the idea of exchange is central.

Next we might re-state that the discussion is turning the subject round and looking at it from all angles.

Then we might remember, too, that the sequence of speaking, the way of questioning, the correct use of phrase and so on total a code of speaking-

behaviour which people take for granted. Speed and rhythm count, and conversational obligations are very important.

Finally each speaker needs as adequate a command of language, its syntax and vocabulary as well as its stress and intonation patterns, as he can possibly muster. Something which must be worked for!

II. Implements.

This is a kind of marginal comment, but it is to do with the over-all impression people make when they speak together. The implements of conversation are not only the tongue and voice-box. The whole body is involved in talking! Some nations more than others are good examples of this. The French often use their arms in marvellous gestures which punctuate their words, and vitalise their talk. But extravagant gestures aside, everyone uses expressions of face, movements of hands, stance and position of body to combine with what they are saying. The frigid conversation is one in which only the tongue is used, and when someone is nervous, as only the average Japanese student knows how to be, he is liable to be frigid in the extreme. Relaxation and reliance even on many of his native gestures will serve to make a more congenial mood in which the sometimes delicate plant of talk may flourish.

It might also be useful to mention that most westerners like to be met in the eye when they are talking to someone. Not stared at like the basilisk, but from time to time looked squarely in the face; and at the other extreme, not treated with an excessive shyness which consists mainly in Japan of talking to the left boot or the distant horizon far right. Some characteristic Japanese habits might easily seem odd or even rather ridiculous to the same blunt foreigner, perhaps the most common of them being the giggle half-concealed behind the hand. Perhaps we 'gaijin' are less polite, but bad breath should no longer be too common in the tooth-paste world we live in, so the concealing hand could be conveniently forgotten! Instant reactions on both sides are to blame, but the actual *impression* made is the im-

portant thing.

When a group of people talk they automatically manoeuvre themselves into a position in which everyone can look at everyone else, more or less face to face. A group might assemble in a rough circle, faces all turned to the current speaker, or, sitting round a coffee table, everyone might try to be in the picture, yet not to exclude or screen anyone else. The same student in Japan might be even more conspicuous by trying to shy away into the background, than if he took his place with the best of them!

Of course, everywhere, interrupting the current speaker, or talking someone down are considered bad conversational manners. In Japan, with the shyness, (often not noticeable when the same student is using his own language!) the reverse is also true; the awkward silence when it is clearly the turn of that student to offer some sort of comment is just as bad-mannered.

Other weapons of conversation are of course the handkerchief and the cigarette. The former is not to be used as a persistent place of refuge and I mention the latter only because there is a rather particular custom where smoking is concerned in Japan. Japanese people are very self-contained and if they smoke they carry cigarettes and matches for themselves, quietly taking out and lighting up their own cigarette at need. In the west the custom is to offer one's cigarettes to other people, ladies first, before taking one's own. Sometimes foreigners on visits to Japan are astonished at what to them is the thoughtlessness of the man confidently lighting up his cigarette without first at least offering the packet round. There is in fact no impoliteness, but again a difference of cultural habit; though the wary might take note as it is that impression which counts. The Japanese abroad might do well to imitate his hosts' custom on this and on some other points.

But there is another whole book to be written on customs and manners, and tempting though it is to plunge into them, we had better just stick to the immediate problems of conversation here.

III. Situations.

Conversation takes place whenever two or more people begin to talk with each other.

A simple truth maybe, but a point to remember is that few people sit down with the express purpose of 'having a conversation,' only of exchanging notes. What I am driving at is that the Japanese student who approaches the foreigner in the street and asks "May I have English conversation with you?" is likely to seem a bit odd, unless he has a real subject in mind, and unless he expresses himself a little less strangely.

Perhaps the best thing in such a situation would be to ask "Do you have a few minutes for a chat?" or offer some kind of opening remark such as "Wonderful humidity isn't it?" Do not approach a man who looks as if he is rushing for his train, or who is busily talking to someone else. Wait for the opportunity, and when he looks less preoccupied or is simply meandering along the pavement, then you can make your bid. In most cases he will be pleased to help you use your English, but you should have something lined up in your mind to talk about. On many occasions after the supreme opening gambit my would-be-conversationalist has lapsed into the most impenetrable

silence! Not conversation! You might be intending to ask him his opinion of Japan, and must not be surprised if you get it; some foreigners might tell you how lovely everything is, but others might tell you really what they think. Be prepared for either reaction. Have your own comments ready in case they may be necessary, and stick to the subject as it develops.

In the train or bus you may find yourself next to a 'gaijin,' maybe for the first time. Recovering from your shyness make the most of the occasion, and when he looks as if he won't mind being talked to (not when he is in the middle of an obviously important piece of reading or a deep sleep!) make your first remark, perhaps a comment on the weather, the most common of all opening subjects. (If you are invited to a native-speaker's house, or formally introduced to him somewhere there are clear obligations which suggest conversation is expected of you.) In all cases if you find that he talks too fast, you shouldn't let him speed on, but should simply and politely ask him if he wouldn't mind talking a little more slowly. If you are having a conversation, you might as well understand it! (To be continued)

(Lecturer, Harrow College of Technology & Art)

英語教育関係者必読の書

英語の測定と評価

Testing English as a Second Language

ジョージタウン大学教授

D. P. ハリス著

E L E C 研修部次長

大友 賢二訳注

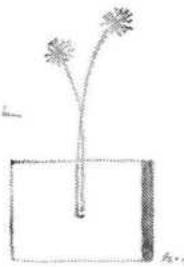
A5判 上製 ¥950

本書は TOEFL の project director の経験を持つ D. P. Harris の *Testing English as a Second Language* を翻訳したもので、Robert Lado, Joh B. Carroll, Alan Davies などのさまざまな言語テスト観を見ごとに総合した、英語教育関係者の必読書であります。

●内容

第1章 言語テストの目的と方法／第2章 すぐれたテストの特性／第3章 文法構造のテスト／第4章 聴取識別理解のテスト／第5章 語いのテスト／第6章 読解のテスト／第7章 書くことのテスト／第8章 口答発表力のテスト／第9章 テストの作成／第10章 テストの実施／第11章 テスト結果の解釈と利用／第12章 基本的テスト統計の算出方法

ELEC 出版部



Mother Goose の世界

—雑感的序説（その11）—

HIRANO KEIICHI

平野敬一

「世に問う」ということ

論文でも著書でもそれを公刊 (publish) するのは、世に「問う」という行為である以上、あるていどの「答え」——つまり反応——があるのは覚悟しなければなるまい。わたくしはことし (1972年) のはじめ、イギリスの伝承童謡について小著を世に「問う」たところ、題材が珍しかったせいか、幸いいくつかの新聞や雑誌の書評にとりあげられた。書評において著者というのは、いわば粗上の魚みたいなものだから、かららずしも楽しいことばかりではない。身にあまる好意的な書評もあったが、とりえ一つもなしとして貶(罵)すだけの酷評もあった。しかし総じて、わたくしは書評によって啓発されることが多く、いやな思いをするよりありがたいと思うことのほうがはるかに多かった。はなはだ不完全な形ではあったが、とにかくいちおう形をつけて世に問うたため、わたくしはマザー・グースの世界について多くのことを新たに知りえたし、思いがけないような照明もずいぶん与えられた。勉強し学んだ結果を文章にする。つまり「学んでから書く」というのがふつうの順序であろうが、ある段階で文章にして発表し、それをきっかけとしていろいろのことを教えてもらう、という場合も案外多いのではないかと思う。つまり「書くことによって学ぶ」ということになるのかもしれない。わたくしの今度の小著の場合、特にその感が深かった。わたくしは、いろいろの方から数々の意見や疑問や示唆を受けたが、それらすべてに即刻対応というわけにいかず、未解決の宿題をたくさんかかえこんだままになっている。快刀亂麻を断つ怪力がこちらにあれば、ことはかんたんにすむのかもしれないが、非力なわたくしは、ただぼんやりと問題をあたためているにすぎない。しかし、これはけっして憂鬱な状態ではない。未解決の問題をかかえて思案に暮れるというのも、楽しくないことはないのである——とくに解決を急がせる外的要因が存在しないばあいには。

本稿では、そういう未解決の、それでいてなんとなく

気がかりな問題を、一つ二つ紹介して、今後の考察のいとぐちにしてみたい。

再び “Over the hills” をめぐって

たとえばこういう問題がある。この春、飯沢匡と筒井康隆両氏の「対談書評」¹⁾においてわたくしの『マザー・グースの唄』がとりあげられた。これは、もっとも早い時期に出た拙著にたいする反応のひとつで、はなはだ示唆に富む好意的な対談であり、著者としては、たいへんありがたいものだった。その中で飯沢氏は “over the hills and far away”²⁾ という表現に言及し、日本のかつての流行歌「丘を越えて行こよ」がそれとつながりをもっていることを指摘してくださった。このあたりの飯沢氏の発言を引用させてもらうと

「……それから古いところでは『オーバー・ザ・ヒル』というのがあった。これは文部省推せん映画になった。われわれが小学校のときだけど、とうとうはやり歌にまでなった。『丘を越えて行こよ』というの。日本には丘を越えてという想念はないわけですよ。峠を越えてという想念はあるけどね。結局、これは “Over the hills and far away” から来ているわけですよね……」

となる。ここには重大な——というか少なくともわたくしにとってたいへんおもしろい——指摘が二つある。ひとつは＜マザー・グースの唄→アメリカ映画→日本の流行歌＞というルートがあの「丘を越えて行こよ」の歌の背景にあったということ。それともうひとつは、日本人には「峠を越えて」という想念はあっても「丘を越えて」という想念はないという指摘。わたくしは飯沢氏の指摘について文献的に調べるということこそしなかったが、ここ何か月来、折りにふれこの指摘についてあれこれ想いをはせることが多かった。「丘を越えて行こよ」

1) 「毎日新聞」昭和47年2月27日付け。

2) “Tom, he was a piper's son” から。この「雑感」の第9回（本誌 No. 36）でとりあげた。

という流行歌についてだけは少々ものの本にあたってみた。これは代表的ななつメロの一つなので、知らない方はまずないだろうと思うが、参考のため第一節だけをあげてみると

丘を越えて 行こうよ
真澄の空は 朗らかに晴れて 楽しい心
鳴るは胸の血潮よ
讃えよ わが青春(ま)を
いざ行け 遙か希望の
丘を越えて³⁾

となる。作詞は島田芳文、作曲は古賀政男。1931(昭和6)年11月にコロンビア・レコードから出て空前のヒットとなり歌手藤山一郎の名を一躍高からしめたものである。この歌は、まずあの軽快な4分の2拍子のメロディーができる、そのあとでそれに合わせた歌詞ができたといわれる。作詞者の島田芳文を共編者の一人にする研究書によれば

「(古賀は) この明朗軽快なメロディにマッチする歌詞をつけたらきっとヒットするだろと言つて、すでにコソビで「キャンプ小唄」「月の浜辺」でヒットしていた詩人島田芳文に作詞を依頼した。島田は以前に軽井沢浅間高原で書いていた丘の詩を曲に合わせて補作した。当時バラマウント映画『オーバー・ゼ・ヒル』が上映され好評を博していたので、これを直訳して題名を「丘を越えて」とつけて一夜で完成した。曲に合わせたので歌詞の字脚も七五調から全く解放されたものだった……」⁴⁾

とある。いまのところ残念ながらわたくしの調べはこれ以上すますま、文部省推せん映画になったといわれる上掲のバラマウント映画について、つまびらかにしえない。しかし、映画の内容はともかくとして、題名の“Over the Hills”がイギリスの伝承童謡に由来する表現であることを映画製作側が意識していないはずはなかった、とだけはいえそうである。

この歌が空前のヒットになったのは、もちろんメロディのよさに負うところが多かったに違いないが、「丘を越えて」という表現がもつ新鮮さもあずかって力があったはずである。飯沢氏によれば「丘を越えて」というのは從来日本になかった「想念」(イメージとか発想といつてもいい)だったのである。この歌が誕生してわたく

したちの間に定着してからもう40年以上も経っているわけだが、いまでも「丘を越えて」という表現には、なにかじめじめした日本の空気と異質の、いってみればバタくさいところがあるのは否めないようだ。「峠を越えて」とか「山を越えて」にそういう感じがないのに、「丘を越えて」にだけそういうバタくしさがあるのは、どういうわけなのだろう。

この「雑感」において、わたくしは英語のいろいろの表現のもつ喚起性(evocation)を問題にしてきたが、考えてみると、日本語の喚起性の問題も、それに劣らず複雑であり、やっかいである。「丘を越えて」という表現がいささかバタくさいことは、感覚的にわたくしたちにわかる(この点が母国語と外国語の語感の違いであろう)。しかし、なぜそうなるのかと問われても、説明に窮するのである。「おか」ということば自体は、日本語としてけっして新しいものとはいまい。万葉集の巻頭にすでに「このおかに菜摘ます兒」⁵⁾などとあるのだから、「丘」は古くからのことばなのだが、どういうわけか現在では「峠」とか「山」に比べると、喚起する情緒が新しく、いくらか西洋(異国)的であり、ハイカラなのである。一概にいえないだろうが、たとえば「港のみえる丘」とか「緑の丘の赤い尾根」とか「今日も暮れゆく異国の丘」などと流行歌の歌詞に出てくる「丘」を考えてみると、ほとんど例外なくどことなく日本離れした evocations があるように思われる⁶⁾。したがって、日本の「想念」に忠実であろうとすれば、わたくしたちは、たとえば伊那の勘太郎に「丘」を越えさせるわけにはいかないのである。なぜかといわれても説明のしようがないが、「峠」や「山」なら越えてもさしつかえないらしい。「峠を越えて」とか「山を越えて」という表現は、日本の伝統に棹さしているのだが、「丘を越えて」は、どうもそうでないらしい。ちかごろブームになっている種田山頭火の行乞(ぎき)記に『あの山越えて』⁷⁾というのがある。これは編者があとからつけた題名だが、行乞記(昭和5年から6年へかけてのもの)の中に

越えてゆく山また山は冬の山

とか

ほととぎすあすはあの山越えて行かう
という山頭火自身の句がある。この山頭火の「山越え」の句は、「丘を越えて」のもつイメージとまったく異なる。どことなくうらぶれ、日本的で、寂しい。「あの山

5) 万葉の表記は「此岳爾菜採須兒」

6) 同じ「おか」でも「丘」は西洋的で「岡」は日本的だという反論も成り立ちそうである。しかし、ここでは耳にくるひびきに限定して考えてみたい。

7) 大山澄太編、潮文社新書(1969)。

3) 古茂田信男その他共編『日本流行歌史』(社会思想社、1970), p. 263 より。

4) 同上, p. 78.

越えて」という表現は、日本の古くからの民謡（たとえば秩父音頭⁸⁾）やわらべ唄（たとえば「坊やはよい子だ、ねんねしな」）などに瀕出し、日本伝来の想念形成にあずかっているといえるが、「丘を越えて」については、そうとはいえない。ある。

どうも話が主題のマザー・グースから離れて申しわけないが、わたくしは、ただことばの喚起力がもっている微妙さについて考えてみたかったのである。「丘を越えて」と「山を越えて」の違いが、いくぶんなりともわたくしたちにわかるのは、けっして詳細な国語辞典のおかげでもないし、日本のすぐれた文学にわたくしたちが平素親しんでいるからでもない。日常生活や大衆娯楽のもっと低い（？）次元で、この二つの表現にそれぞれ別のしかたで長くつきあってきたからといっていいように思う。いつとはなしにわたくしたちの耳にはいってきた流行歌やなつメロや民謡によってこういう感覚が自然に育ったといってもいい。わたくしたちのことばの感覚を形成するのは、こういう文学以前の生活的なもの——わたくしはこれをくもと歌の世界⁹⁾と呼ぶ——なのである。逆に、わたくしたち（例外はもちろんあるだろう）が、英語が「わかる」という気持に容易になれないのは、こういうことばの感覚を長い年月をかけておのずと育成してくれるはずの生活的なものが欠けているからである。伝承童謡については、今まで多言してきたので、あらためていうまでもないが、たとえばアメリカではやっていたpopular songs、あるいはイギリスのmusic hallsなどで歌われ人口に膾炙していた歌などについて、わたくしたちは（これももちろん例外はあるが）一般におどろくほどなどにも知らないのである。日本のなつメロを知っているほど、自分の専攻している時代の英米のpopular songsを知っている研究者は、きわめてまれなのではなかろうか。したがってある時代の専門家といえども、その時代のことばの辞書的語義を越えた微妙なニュアンス——その喚起性——をほとんど知らないといっても、いいすぎにはならないのではなかろうか。生活レベルにおけるあることばの特有のにおいがわからないのに、高度に洗練された文学作品のことばのニュアンスがわかるというのは、どういう不思議な力によるのか、正直のところ、わたくしにはよく解(?)せないのである。

おおざっぱであるが、日本語の「丘を越えて」と「山を越えて」の微妙な差について、のべてみた。もうひとつ「峠を越えて」についても考えてみたいのだが、いま、わたくしに適例が思いうかばない（「峠を越えてはるばると……」という歌詞が戦後の流行歌のどこかにある）。

8) 「鳥も渡るかあの山越えて」ではじまる。

ったと思うが確かめえない）。しかし「峠を越えて」というのはその陰影一想念一において「丘を越えて」よりは「山を越えて」に近いといつおうはいえそうである。「峠」という字自体が国字（漢字でなく）であるせいか、「峠」にまつわりつくもろもろの想念は、きわめて日本的である。

ここからまた問題がひとつ。こういうことは、よくよく調べて結論が出せるようになってから書けばいいことはわかっているのだが、現在くすぶっている疑問のひとつとして、問題提示のつもりで紹介してみたい。つまり、日本人の旅（少なくとも昔の旅）のイメージに峠、峠道、峠の茶屋、峠越えなどが不可分にまつわりついているように思われる。（ある婦人雑誌の秋の号をみていたら「旅案内・峠路の秋」という特集があった）。ところが、この峠の旅情に対応するものが英語にないのでないかという気がするのである。つまびらかに調べたわけではないが、英語の“pass”とか“mountain pass”には、そういうてんめんたる旅情がないように思われる（この点、間違っておればご教示を乞う）。イギリスでも徒步旅行が珍しくなかった時代があったはずだし、山の多い地形だから、その旅に峠が登場しそうなものだが、どうもわたくしには思いうかばないのである。“pass”というと、わたくしは茶屋よりもhighwaymanを連想したりするのである。とにかく「峠」と“pass”——あるいは峠にまつわる想念のあるなし——を中心にして日本人とイギリス人の旅ゆく心を比べることもできそうである。それもひとつの比較文化論になるのではないか。

こういうことを雑然と書きつらねて、わたくしは、ただ自分の無知を告白しているようなものだが、ことばの味わい——喚起性——を気にすればするほど、わからぬことの多さにあきれる思いをするばかりである。たとえば、わたくしたちは飯沢氏の談話に触発されて“over the hills”と「丘を越えて」とを対置し、「丘を越えて」をさらに「山（あるいは峠）を越えて」と並べてその相違に思いをいたすことはできるし、丘と山と峠とがもつてゐるそれぞれ特有のニュアンスについて、あるていどのことはいえるような気がする。ところが、英語のたとえばhillとmountainとpassの辞書的語義の差異を超えたニュアンス、その喚起するものの差異となると、なんとなく心もとないのである。少なくともわたくしには、そうである。そして外国語に関して、「わかる」という段階に達するのは並みたいていでないとあらためて自分に言い聞かせざるをえなくなるのである。

『朝鮮童謡選』について

英語国の伝承童謡のことをあれこれ調べていると、当然それとの対比で、英語国でない国の伝承童謡が気になってくる。わたくしは、わが国の伝承童謡であるわらべ唄について、いままでも時折り言及してきたが、それはマザー・グースの世界の基本的性格をより明らかにするためだった。日本の近隣国の童謡も示唆に富む点では、わらべ唄に劣らない。なかでも朝鮮の童謡は、性格の鮮明さという点では出色であり、特に注目に値するように思われる。原語を知らないわたくしは、翻訳を通してしか知ることをえないのが残念であるが、さいきん読むことをえた金素雲(きんそくうん)訳編の『朝鮮童謡選』⁹⁾は、ことに感銘深いものだった。北原白秋に師事していたと思われる金氏の日本語訳のこなれた自在さは驚嘆の他ないが、それと同時にこの訳書の土台となった原詩収集の努力にも頭の下がる思いがする。朝鮮における伝承童謡の収集研究の実状を知らないので確かなことはいえないが、金氏の仕事を、イギリスのハリウェルやオーピー夫妻の仕事と並べて考えておかしくないように思われる。すくなくとも収集当時に金氏を取り巻いていた状況は、イギリスの先学たちのそれよりは、はるかにきびしかっただけはいえそうである。

それはともかくとして、本稿で朝鮮の童謡を引き合いに出したのは、この金氏の童謡選にマザー・グースの童謡と関係のありそうなのが1篇あり、それを是非紹介したかったからである。イギリスの伝承童謡の一つに“*There was a crooked man*”という唄があり、すでにこの「雑感」の第8回でアメリカの連載漫画 *Lil' Abner* と関連させて紹介したが、もう一度あげてみよう。

There was a crooked man, and he walked a crooked mile, / He found a crooked sixpence against a crooked stile: / He bought a crooked cat, which caught a crooked mouse, / And they all lived together in a little crooked house.¹⁰⁾

(むかし曲った男があつて、曲った道をやって來た。／曲った垣の通り路で、ひろった、曲った六ペソス。／買った猫めが曲った猫めで、曲ったねずみをつかまえた。／小さな曲ったひとつの家に、それからみんなで住んでいた。——竹友藻風訳)

9) 岩波文庫版、1972年改版。初版は1933年。

10) Opie, *Oxford Dictionary of Nursery Rhymes*, p. 289.

ハリウェルが1842年にはじめて採集したこの唄は、いかにもマザー・グースの世界にふさわしいおもしろさをもっており、典型的にイギリス的なものと思っていたら、意外や朝鮮の童謡に類例があるのである。語句はもちろん違うが、発想はまったく同一といつてもいい。すなわち

曲り唄(げ)さん 曲り杖ついて
曲り山に登り 曲り糞(く)垂(た)れりや
曲り犬奴(けぬ)が 曲り糞なめて
曲り杖に打(た)たれ 曲りキャンキャン¹¹⁾

という次第。原詩の採集地は旧朝鮮の咸鏡南道三水郡、採集者は劉浚根と記録されているが、いつごろのものか、この岩波文庫版では判明しない。マザー・グースの上掲の唄とまったくの偶然により同じ発想になったのか、それともマザー・グースの唄が、なんらかのルート（日本経由？）で朝鮮にはいって土着したのか、そのへんのところは、なんともわからないが、わたくしには驚くべき類似であるように思われる。『朝鮮童謡選』には、ほかにもマザー・グースの感覚と一脈相通じる唄がいくつかある。たとえば

奥の座敷を のぞいたら
仔猫 2匹が 芥を囲み
縁の下を のぞいたら
木屐(きつ) 2足に 髪(かみ)が生(は)え
かまどの中を のぞいたら
ちんころ 2匹が 茄(たば)吸い
米櫃(よひ)の下 のぞいたら
鼠公(ねぎ) 2匹で 舞をまう¹²⁾.

これはマザー・グースのたとえ Mother Hubbard の唄なのでたらめさ (nonsense) とどことなく通じる（内容はまるで違うが）。また、かつてこの「雑感」で解説を試みた “Ladybird, ladybird, / Your house is on fire” の唄にきわめて近いものに次の唄がある。

でんでん虫 でんでん虫
お前のうちが 燃ける
ソシラング持つて 出て来い¹³⁾

11) 『朝鮮童謡選』, p. 118.

12) 同上, p. 121.

13) 同上, p. 69.

(注. ソシラング=さすまた. 蝸牛の角がさすまたに似ているところから.) 日本のわらべ唄にもたとえば

鳥(おと) かねもん 勘三郎
わアれが 家(いえ)ア 皆焼けた
早う往(い)んで 水かけろ¹⁴⁾

というのである. こうして並べてみると, 生きもの(英國, てんとう虫; 朝鮮, かたつむり; 日本, からす)に對して「お前の家が火事だ」といっておどかし, 次の動作へかりたてるのは, イギリスの伝承の世界を越えた, おおげさにいえば人類普遍の発想のひとつであるということがわかる. このようにいままでいかにも「マザー・グース的」だと思いこんでいたような発想が, 朝鮮に限らずよその国の伝承童謡によって別の照明をあたえられたりすることもあるのである.

民族性と伝承童謡

アングロ・サクソンの感覺, 気質, ものの考え方, 嗜好などを知るにはマザー・グースの唄にまさるものはないわたくしはかねがね思ってきた. 朝鮮の伝承童謡も, その点, 朝鮮民族の嗜好をかなり忠実に反映しているように思われる. 尾籠な話ではなはだ恐縮なのだが, たとえば『朝鮮童謡選』には, おならの唄がやたらと出てくる. これはマザー・グースの世界に皆無の題材である. 日本の民話にもおならが瀕出するところをみると, これは東洋人と西洋人の感覺の相違によるのかもしれない. とにかく紳士の国イギリスでは, おならはめったにユーモアの対象にもなりえないのである. わたくしには, その理由がよく説明できない.

尾籠な話はさておき, 『朝鮮童謡選』で目立つ特色の一つは, 亡母追慕の唄が驚くほど多いということである. 「坊や泣くなや泣いたとて/死んだ母さん乳は出ぬ……」(同書 p. 237) という子守唄, あるいは「母さん母さんいるとは/あの山越えた北亡阴山(ほくぼんざん)」(注. 北亡阴山は墓地のある山) (p. 102) とか「母さん母さんいつかえる/死んだ母さんいつかえる」(p. 97) といった亡母追慕の唄はここに引用しきれないほど多い. あるいは訳編者の好みが若干出ているのかもしれないが, わたくしはイギリスの伝承童謡にこの種のものがまったくないことに新たに思いをいたした. なるほど生母に死に別れ, 繙母にいじめられる話は, イギリスの民話(たとえば

“The Rose Tree”) にないわけではないがそういう場合でも, 亡母追慕の念が非常に強いとはいえないようである. 死者をいつまでも悼み, 切々と追慕するというのはどうもイギリス人(あるいは西洋人)の性分に合わないのでないかという気がわたくしにはする. 日本人の感覺は, おそらくイギリス人よりは朝鮮の童謡の感覺にずっと近いであろう. たとえば新聞の「歌壇」という欄などをみると, (特にお盆の前後などに) 亡き人への思いを切々と詠んでいる歌が多いことか. しかも, の一首をとってみても, たとえば西洋の epitaph のようなおざなりの心のこもっていないものと異なるように思われる. どうも話が横へそれで恐縮だが, さきごろわたくしは必要あって外国の知人に日本の新聞の歌壇や俳壇の盛況とそこにあらわれる市井の(つまりプロでない)日本人の詩心の説明を試みてみた. そして例としてわたくしはある投稿入選歌を訳してみようと思った. いま手もとにその歌がひかえてあるのであげてみる.

杉谷峠越えつつわらびを摘みたりき

母います頃のわが行商に¹⁵⁾

といでのである. ところが, わたくしは結局この歌の英訳をあきらめざるをえなかった. なぜか、「峠を越える」というのは前述したようにいかにも日本の感覺, 「わらびを摘む」というのもしかり. それぞれ訳出上の難物だが, じつは, わたくしを絶望させたのは一見かんたんな「母います頃」という表現だった. 直訳すれば “when Mother was alive” とでもなるのだろうが, 「母います頃」には亡母追慕の無限の想いがこもっているのに, どうしても英語ではその想いが出てこないのである. 選者(宮修二)のこの投稿歌に対する評は——亡母の好んだ「わらび」だったろう——とたいへん短いあっさりしたものだったが, それで充分わたくしたちには通じるのである. 亡母へ寄せる作者の想いがわかるのである. ところが英語でそれを表現するのはほとんど不可能に近い. 日本語の陰影がわたくしたちにわかりいいので, よけいそう思うのかもしれないが, 根本的には, やはり亡き母を想うという心とその表現とが英語では稀薄なのではないかと思う. ついでにいえば日本の新聞の投稿歌には亡くなったわが子に寄せる母の想いの切々として胸をうつものが少なくない. たとえばこの夏ごろの投稿歌に

貫ひ出しに行きて濡れたる雨の日や

征きし子待ちて 生きむと思ひき¹⁶⁾

15) 「朝日新聞」昭和47年6月25日付け. 金津敏夫氏(島根)投稿.

16) 「朝日新聞」昭和47年7月23日付け. 小山ひとみ氏(尼崎)投稿.

14) 町田・浅野共編『わらべうた』(岩波文庫, 1962), p. 175
より. 広島地方のわらべ唄.

というのがあった。戦死というあらわ(explicit)な表現はどこにもないが、わが子がついに還らなかつた悲しみが読者の胸をうつ。おそらくその子が亡くなつてから30年近くは経つているのだろうが、死者へ寄せる想いはすこしも減じていないかのごとくである。わたくしたちは——少なくともわたくしは——こういう歌に心打たれるが、どうやらこれは西洋の感覚ではなさそうだという気もする。西洋では(というとおおげさになるが、ことはアングロ・サクソンに限らない)、死者へのかかる思慕はむしろ執心、執着と受けとられ、死者への強い執着は狂へ転じる一步手前と解されることが多いのではないかと思う。(cf. 「エミリーへの薔薇」)。箴言を多く残したイギリスの説教者 Thomas Fuller (1608—61) に “To weep excessively for the dead is to affront the living” (死者を過度に悼むは生者への侮辱) ということばがあるが、死者を過度に悼まないことが、生者への礼儀なのかもしれない。形式的に悼むのはいい。しかし何十年も

切々と死者に想いを寄せるというのは、西洋人には無気味にさえうつるのでなかろうか。

イギリスの伝承童謡には、朝鮮の童謡にみられるような切々たる亡母追慕の唄はない。亡児追慕の唄もない。あるいは、なにかの偶然でそうなったのにすぎず、人の心は古今東西そう違うはずはないという反論がなされるかもしれない。しかし長年にわたって伝承され愛好されてきた童謡の性格が、その民族の mentality のすくなくとも一つの指標になるということは、どうも否めないようだ。マザー・グースの唄を伝承してきた人たちの「ドライ」な感覚と亡母追慕の「ウェット」な心情とのあいだには、やはりにか越え難い差異がありそうである。あくまで現世(生ける者)本位の非感傷的な生活感覚がマザー・グースの世界の底にあるように思われる。たくましいが、ときとしては冷酷(特に死者に対して)にもなりうる、したたかな野ぶとい生活態度なのである。

(東京大学教授)

(p. 14よりつづき)

アメリカ国籍を失ったわけです。いまここにいるについて、来たときには交換教授ビザで来たものですから、3年たつたら帰らなければならない。大学としては帰ってもらっちゃ困るというのでいろいろな手続をしたのですが、そのときに私がもしアメリカ国籍に切りかえたいと思ったのであれば、そのときに裁判をすれば、たやすくアメリカ国籍が復活できたわけです。

ところがそれをやると日本国籍を放棄しなければいけない、この段階になって日本国籍を放棄するということは何かセンチメンタルな抵抗を感じたので、非常にまわりくどい手続をとってアメリカの永住権だけとったわけです。ですから国籍はやはり日本人で、日本のパスポートを持っております。

そのようなことで、どうやらアメリカと日本との生活が約半分半分になってきた今日、振り返ってみると、少なくとも英語を身につけるということについては、これは特殊な例で、アメリカという国に生まれて育つたのだから英語が身についたのは当然であり、またあのままずっと日本へ帰らないでアメリカにいたら私の日本語はこちらの二世日本語になつただろうけれども、それもまた日本という国で very impressive years を過ごして日本語も身についた。非常に自分は語学の修得という点については幸せだったと思っております。

(ミシガン州立大学英語研修所長)

(p. 46よりつづき)

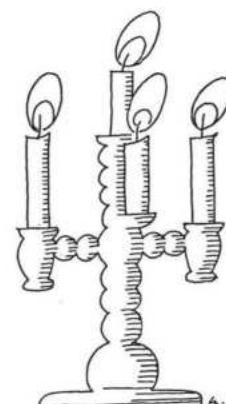
者(gymnasieingenjör)の資格をとるためにには4年となる。大学へ進学する者は3年修了でよい。高校3年間に学習する、毎週の時間数の合計を他教科と比べると、語学に費やされる時間は、全体の3分の1を占める。

人文コースの場合——国語10；社会10.5；歴史8；一般理科7；数学5；宗教2；哲学2；体育8；近代外國語30；その他(総計95時間)。

○ラテン語は必修からはずされ、自由選択に。(Gk. も同じ)

○近代語は3か国語が必修である。(主に英・仏・独語)

(東洋女子短期大学教授)



世界における外国語教育(3)

—特にスカンジナビア諸国について—



HOSHIYAMA SABURO

星山三郎

I. 外人のほっとする国—スカンジナビア諸国

レニングラードを立って、ストックホルムに着いた夜、その日の日誌に私は次のように書いた。

「この国に入ると急に手足が解きほどかれた感じである、I feel *at home* in Sweden.

この国に足を一步踏み入れると、空はどんよりと曇っていても、心は明るくはずんだ。ソ連滞在中は空は、見上げれば額が染まるかと思うほど青かったけれども、絶えずだれかに見張られているようで、心の安まる暇はなかった。風景や風俗をひとつカメラにおさめるにも、いつもあたりに気を配っていた。学校の参観をするにも‘INTOURIST’という「国営外人観光局」を通じて許可を得、いざ参観となると、ガイドがびたりと寄り添っているので、一切の行動、言行が看守されているようで、気が重たかった。モスクワの空港でも、レニングラードの空港でも、税関を出入りするときは、旅客は手荷物の中味を上から下まで、かきまわされるか、皆取り出して調べられて多くの旅客は当惑しきっていた。

それがどうであろう、このスウェーデンに一步足を踏み入れ Arlanda という国際空港に降り立つと、税関はあるにはあるが、調べられている人は一人もない。パスポートの検閲官も、差し出したバスにちょっと手を触れただけで、1秒とかからないうちに O.K. といって返してくれる。そしてゲイトに立っている空港の職員は、早く出て行きなさいとばかりに、にこにこしながら、手先を前後に振っている。

ノルウェーの北海にのぞむ此の国第2の最大都市、ベルゲン (Bergen、人口12万)に着いた時も同じであった。いや、それ以上で、税関では係官が手荷物はもちろん、パスポートを見ようともしない。乗客は飛行機を降りると、どんどん外へ出て行く。私は未知の国に来てあとで「不法入国」に問われては、ことめんどうと思ってパスポート検閲官の窓口を探し、パスポートを差し出すと、彼は“You want a checkstamp as a souvenir?”と笑いながら、ぽんとスタンプを押してくれた。

数日後さらに南へ下って、デンマークのコペンハーゲ

ンの空港に着いた時も同じで、飛行機から降りた乗客は、日本の新幹線で東京駅で降り立った乗客よりも、もっと気軽に、さっさとゲートを通って外へ出て行く。その上街に出て何を尋ねても10人のうち8人は英語で返事してくれる。

道で出会うたちは皆、背丈が高く、色白く、金髪に、碧眼である。こういう人たちを除いては、車窓から見ゆる野も畑も、松の枝ぶり、家々の庭の草花もわが国のそれと実によく似ていて、外国へ来たという感じが少しも起らない。学校の参観にしても、めんどうな手続など一切不要で、訪問希望校の校長さんの O.K. を得ればそれで充分である。“to feel *at home*” というのはこういう時の気持を現するために造られたことばなのではなかろうか。とにかくスカンジナビア3国は、ソ連から入国した者にとっては、まさに別天地である。

II. 国土とことば

スカンジナビア3国の中、その国土の面積についていえば、自然资源の豊かな国スウェーデンは日本より2割方大きく、漁業と牧畜の国ノルウェーは日本より小さく、平野で農業の国デンマークはわが九州よりは少し大きい。しかし人口の密度は薄く、これら3国合わせても東京とその周辺の県を一つか、二つ合わせたくらいしかない。最近(1969)の統計によると次の通りである。

(国名)	(面積)	(人口)	(人口密度 km ² 当り)
スウェーデン	449,750	7,978,000	18
ノルウェー	324,219	3,851,000	12
デンマーク	43,069	4,910,000	114
日本	369,811	102,321,000	277

ことば スカンジナビア諸国のはいしたい何語を話しているのであろう。アンデルセンが童話を書くのに用いたことばはデンマーク語である。スウェーデンではスウェーデン語、ノルウェーではノルウェー語である。しかしこれらのことばは、いわば兄弟語で、3国人同志の間では、高等教育を受けた人なら、それぞれの標準語をゆ

っくり話せば、話がお互いに通じ合うという。そのくらい似ている。ことに土地の人の話では、書きことばはスウェーデンとノルウェーがよく似ており、話すことばは、ノルウェーとデンマークがよく似ているという。ノルウェーでは西暦1380年から、1814年まで、デンマーク語が教会や学校の用語として用いられたというから、今日ノルウェー語といわれているものは、デンマークの方言と言ってよいのかも知れない。“norsk-dansk”（ノルウェー式デンマーク語）という言葉があるのは、それを示しているのであろう。

スウェーデン、ノルウェー、デンマークの都市の街を歩いていると似たような文字の看板が出ており、市街の地図を見ると実にたくさんの似ているストリートの名前に出会う。例えばスウェーデンの kung は、ノルウェーとデンマークでは kong；これは英語の king であるが地図を見ると街の通りの名に Kungsgatan (Sw.), Kong Osgargate (Nor.), Kongensgade (Den.) などがあり、いずれも King's Street の意味である。なおこの各合成語の後の部分 -gatan (Sw.), -gate (Nor.), -gade (Den.) というのはイギリスの Newgate などの -gate と語源が同じらしい。「お風呂」のことを英語では “bath” であるが、ドイツ語では “das Bad” であり、北欧 3 国、いずれの国でも “bad” を用いている。そこで

In Scandinavian countries ‘bad’ is good.

などというダジャレも生まれてくる。

スカンジナビアのことばは、英語とドイツ語の中間（英語—スカンジナビア語—ドイツ語）にあると言われ、英語かドイツ語か、どちらかを知つていれば、街を歩いて看板を見ても、観光案内書を見ても、大体の見当はつく。日本人が、同じ漢字を用いている中国語の看板や広告や新聞の見出しを見て、おおよその見当がつくのと似ている。次にかかけたものは私がこれらの国々の街を歩きながら書き留めておいたもの一部である。

〔略語〕 Sw.=スウェーデン語 Nor.=ノルウェー語

Den.=デンマーク語 E.=英語 G.=ドイツ語

(Svenska)	(Norsk)	(Dansk)	
Sw.	Nor.	Den.	E. or G.
ungelesk	ungelesk	engelsk	English (E.)
läsebok	lesebok	lesebok	Lesebuch (G.)
apotek	apoték	apotek	Apotheke (G.)
bröd	brød	brød	Brot (G.)
kirke (シルケ)	kirke (キルケ)	kirke (キルケ)	Kirche (G.)
mjölk	melk	mjölk	milk (E.)
skola	skole	skole	school (E.)
stationen	stasjon	stationen	station (E.)

universitet univesitete universitet Universität (G.)

その他

○ストックホルムにて、ノーベル賞授賞式典の行なわれる会場の名は Konserthuset (=Concert Hall), Koncert=Concert, hus=house (<OE hūs), -et=語尾定詞（後置定冠詞とも云うべきもの）

○スウェーデンの学校案内に生徒の住所録があり、それには “Namn och adress, Telefon” とある。 (och=and).

○デンマークの有名なアンデルセンの人魚の像は “den lille havfrue” (=the little mermaid)

○ノルウェーの「ハーダンゲルフィオルド」見学バスの出発駅は、Bergen Busstasjon であり、その案内書に “Buss fra Bergen til Norheimsund” と書いてあった。frå=from, til=to と見当がつく。（発音 å[o:]）

○ベルゲンのホテル (HOTELL) のお手洗の戸口で見つけたことば、事務員にその発音を聞いたら、括弧内の音に聞こえた。

HERREN [hé:jən], BAD [ba:d], DAMER [dá:mər]

III. 英語のよく通じる国

今日ではどこの国へ行っても、空港の職員、旅客案内所、ホテルの受付には英語を上手に話す人がいて不便はないが、いざ街の中へ出ると、そうは行かない。ところが北欧では——と言つても私の歩き廻ったのは 3 つほどの大都会とその周辺にすぎないが——道を尋ねると 10 人のうち 8 人はきちんと英語で返事をしてくれた。それも学校で習つたためであろう。標準語ばかりで（方言というものは学ばないので）あるから非常に分りがよい。どこの国でも、広告や案内書には立派なことが書いてあっても、実際にはそうでないものが多いが、スウェーデンの旅行案内所 (The Swedish Tourist Traffic Association) で出しているパンフレットの次の二節だけは額面通り受取って差支えないようである。

Visit Sweden

Visitors from the British Isles and other English-speaking travellers will feel particularly at home in Sweden, for almost every educated adult and all school children above the age of ten either speak English, understand it, or are busy learning it.

来れ、スウェーデンへ

イギリスからのお客さまや、他国から来た方でも英語が話せる人は、スウェーデンにおいてになると、至極アットホームに感じられるでしょう。と言うのは、教育のある大人なら殆どの者が、10 歳以上の小学生なら、だれでも英語を話すか、理解するか、それともまた、精を出して英語を勉強しておりますから。

次の二節はロンドン大学のエドモンド J. キング (Edmund J. King) が “Other Schools and Ours” (1967) の中でデンマークでの経験として述べている一節である。

(デンマークの学校では) 「13歳か14歳の子供の教室にはいると、彼らは不完全ながらも英語で諸君に話しかけるだろう。諸君がドイツ人であれば、おそらくドイツ語でも話しかけるし、またフランス語を上手に使う生徒も何人かはいるだろう。アカデミックな課程の高等学校の最上級では、英語の授業を全部すばらしい英語で行なうばかりか、その討議の質は、アメリカのリベラル・アーツ・カレッジか、イギリスのグラマー・スクールの最上級にも匹敵する。大都市では、旅行者はデンマーク語で話す必要は全くない。」

池田・沖原訳『世界の学校教育』(p. 37) より

他人の意見や觀察はさておき筆者自身の経験を述べる。私はスウェーデンのストックホルムに到着した夜、ただちに、かねて手紙で連絡してあった此の国の高校の校長 Anrup 先生の自宅へ電話をした。すると初対面一いや初対声——の Anrup 先生は、とつとつとしてこう答えてくれた。

“This is Rektor Anrup.—Very welcome.—Come at eight.—Monday morning.—Good night!”

約束通り月曜の朝、郊外のオーケスホーブ (Åkeshov) にある “Nya Elementarskolan; Stockholm” (中・高合わせた学校) に校長室を訪れた。大柄な朴訥な方である。「自分は英語がよくできないから英語の先生を呼びましょう」という。

Anrup 先生：How do you do? You come——from Japan. Very welcome.—I don't speak English well,—so I will ask—an English teacher—to come here.—He will—show you my school.”

たどたどしくも達意の表現である。日本の学校でこれだけ話せる校長先生は幾人あるだろう。

ノルウェーのベルゲンの Danielsens Skole の校長 Danielson 氏は下半身不隨で車椅子に乗って校内を動きまわっておられたが、なかなかの学者であった。歴史が専攻で、英語は聞いてわかるらしいが、自分で私に “Come this way” 以外は話さなかった。私の学校訪問の趣旨を聞くと、秘書に何か二言、三言いうと、その秘書は部屋を出たが、間もなく、英語の先生が隣りの教員室から出て来られた。

この学校の英語の主任の Anny Hauken 先生は上級生に、Oral method で、も一人の老年の女の先生は中学の1年生に、全くの訳読式を思わせる方法で、ノルウェー語で英文法の説明をしていた。

黒板に次のように書きながら説明されていた風景が私の目に焼きついた。

ā bli kalt }
to be called } passive voice

ノルウェーで忘れ難いのはハーダンゲル峡湾 (Hardangerfjord) を見るために幾つか山や湖を越えて Norheimsund という山奥の町を訪れた時のことである。山紫水明の峡谷にダーク・ブルーのフィオルドをはさんで窓際には花を、家屋には薦かずらをからませた清楚な家があちこちに点在し、その影を峡湾に写している。漁村を思わせる町で、フィオルド観光客のメッカの一つである。ベルゲンを朝9時に立って、バスは山間を縫って4時間あまりで到着する。ここはハーダンゲル峡湾でも最も美しいところ。バスがこの村に着くと20名ほどの乗客は皆降ろされた。降ろされるといつの間にか、このひっそりとした町のいづこかへ吸い込まれるように姿をかき消して行った。私一人がバス停 (BUSS STOPP) にとり残された。帰りのバスの出発は3時間半後の午後5時だという。バス停の近くにただ一人わびしく店を守っている、おみやげ物店兼観光案内所へ行き、この土地の地図を求めようとしたが無い。そこで入っ子ひとり通らないフィオルド沿いに、怪獣の牙にえぐり取られたような山肌を見上げながら、山の方へ通ずる一本の道をぶらぶらと歩いた。きれいな空気を吸いながら、2時間ほどして、もとのバス停へ戻って来た。すると小学生らしい女の子が2人、赤ん坊を乳母車に乗せて遊んでいた。声をかけると、そのうちの一一番大きい子が寄って来て、私と並んでベンチに腰をかけた。金髪に青い目が可愛らしかった。私は尋ねた。

[以下 ★=星山, P₁=少女(11歳), P₂=少女(9歳)]

★ : Speak English?

P₁ : Yes, a little.

★ : Do you live here? — Is your home near here?

P₁ : Yes, over there.

★ : I have come from Japan — you know 'Japan' [já:pən] — Japan is my country; it is a long way off from here!

P₁ : Oh, I see.

★ : You are very lovely. How old are you?

P₁ : Eleven.

★ : Then you go to school? I think you have come back from school today.

P₁ : Yes.

★ : What year class are you in?

P₁ : In the fifth year class.

★ : Do you learn English at school?

P₁ : Yes.

★ : How many times a week do you learn English?

P₁ : Four times a week.

こんなおしゃべりをしている間に、そばにいた小さい

方の子も近寄って来て私たちの話に耳を傾けている。私の前に立ったので「年はいくつ」と聞くと9歳だという。その時前に11歳だと言った子は“*This girl came from America.*”と言ったので、私はその9歳の子に向って言った。

★ : Then you speak English well.—Where did you live when you were in America?

P₂ : Los Angeles.

★ : When did you come to Norheimsund?

P₂ : One year and a half ago. “ユライケテア”

★ : “ユライケテア” I beg your pardon—Ah! You say, “You like it here.”—I like it very much. Hardangerfjord is so beautiful.

この辺地でも11歳の子は5年生で英語を2年学んでいてこのくらいに話しがわかる。アメリカから来たという9歳の子に私はさらに尋ねた。

★ Do you know any other language?

むずかしかったのであらう。間をかけられた子が黙っていたら、大きい方の子がその時‘アンドレ・スプロック’(andre spr'k)と云って、少さい子の顔を見た。だから11歳の少女は‘another language’という語の意味を正確に理解したのだ。それと気づくと無邪気な明るい青い目が、一層可愛らしく見えた。乳母車の中のもうひとり、3歳だという子とはもちろん、頭をなでただけで、話はしなかった。

デンマークの北端に近いエルシノア(Elsinore)にあるKronborg城はハムレットのゆかりの地として名高い。コペンハーゲンからここへの観光バスには英・仏両語を話すガイドが付き添ったが、年の頃50歳ぐらい、この国の歴史・地理・福祉行政・教育など各方面にわたり、英・仏両国語を交互に用いての解説は中味も声もよく、一日8時間の旅、乗客を飽かせなかった。私は彼が英語で説明するとき時折メモを取った。Queen's Englishで実によくわかる。

- Copenhagen is originally called KøBENHAVN—“merchants' harbour.”
- Denmark is a small country, but 65 per cent of the land is cultivated.
- Tax is high, but physical, educational and social welfare of the people has been advanced...
- In Denmark, primary and secondary schools, and universities also are free of charge.
- (At Kronborg) Hamlet lived 200 years before this castle was built. (ここで観光客爆笑——なんだ!)
- The King loved 3 W's.—The king loved work, wine and women. (爆笑あり)

とにかく、英・米本国以上に英語がよく通じる国、それはスカンジナビア諸国である、と言ってもまちがいで



英語を話すノルウェーの小学生

はなかろう。

IV. スカンジナビア諸国の外国語教育制度

自然資源が乏しいか、それともその開発の遅れている小国が、大国の間に狭まれて生きて行き、しかも福祉国家として生存を続けて行くためには海外貿易を拡大し、外国から観光客を引き寄せ、技術工芸の開発が何物にもかえ難い。そのためには外国との接触が不可欠であり、means of communicationとしての言語の習得は、国民の生存権にかかわる重要な事柄である。それ故これらの国々では、外国語の学習が、初等教育から高等教育に至るまで、教育課程の中心を占めている。デンマークで、大学への進学を目的としているあるギムナジウムの語学系コースは、毎週の総授業時数中の50パーセントが外国語(主として英・独・仏語)で占めている。

またスカンジナビア諸国では1950年代より教育制度改革の運動が活発に行なわれ始め、1965年頃より義務教育を従来の7年制から9年制に延長の傾向にあり、さらに10年制を採用しようとしているスウェーデンのような国もある。(デンマークの義務教育はまだ7年である)。この点でスカンジナビアの教育制度は6・3制のアメリカ型より、8年、10年制を採用しているソ連型に似て來ている。

そして、小学校の5年生、時には4年生から英語を第1外国語として必修(毎週4時間前後)、上級になるにつれ、ドイツ語、又はフランス語が第2外国語として選択必修に、商業系のコースでは、その上更にスペイン語、ロシア語、又はイタリー語を自由選択科目にしている。

北欧(および、ベルギー、オランダ)では高等教育を受けた人ならば、英・独・仏の3か国語を話すのは普通

である。旅行案内所の係員は6か国語ぐらいは話す。外国語の授業はoral skillの養成を眼にしており、クラス・サイズは15名～20名ていどである。Audio-visual aidsも序々に活用されている。発音はJones式であることは、どこの学校でも例の*English Pronouncing Dictionary*を備えていることでもわかる。

次に北欧3か国の学校における外国語教育の制度を概観すると次のようになる。

A. 教育制度と外国語

スウェーデン

- 基礎学校 (grundskola) 9年制 (7～16歳)
4年生から英語必修 (週4～5時間)
7年生からフランス語又はドイツ語選択 (週4時間)
- 高校 (gymnasium) 3年制 (17～19歳)
英・独・仏語のうち、2か国語必修
その他ロシア語・スペイン語・イタリア語選択 (週4～6時間)

ノルウェー

- 国民学校 (folkeskole) 9年制 (7～16歳) ～移行中
(従来7年制)
5年生 (11歳) 又は4年生から英語必修
8年生 (14歳) からドイツ語必修

- 実科高校 (realskole) (14～16歳)
英語・ドイツ語必修，在学中デンマーク語とスウェーデン語の読本は必読のこと。

- 高校 (大学進学コース) (gymnasium) (16～19歳)
英・独・仏語必修 (週4～6時間)

- 旧制7年生 (7～13歳) 学校の場合
小学校6年生から英語が入る。(週5時間；国語は4時間)
実科高校3年制 (14～16歳) で英語必修 (週4・4・5時間)

- 高校5年制 (gymnasium) (14～19歳)
英・独・仏3か国語必修 (週4・4・5・7・8時間)

デンマーク

- 国民学校 (folkeskole) 義務教育7年制 (7～13歳)
第6年生 (12歳) で第1外国語 (英語又はドイツ語) 必修
第7年生 (13歳) で第2外国語 (ドイツ語・英語又は仏語) 必修

- この国民学校の上に3か年制の任意コース (realafdeling) がある。たいていの生徒が入るので、義務制に近い。このコースの第2学年を経て、進学を希望するものは高校に入ることができる。

○高校 (gymnasium) (17～19歳)

英・独・仏語は必修 (週4～5時間)

商業系の学校ではロシア語、スペイン語、又はイタリア語が選択科目。

この国ではシェイクスピアの作品は必修のこと。
(The only compulsory author is Shakespeare; but it is for the teacher to choose the play. The most popular are *Julius Caesar*, *The Merchant of Venice*, *Hamlet*, and *Macbeth*.)

B. 特にスウェーデンの場合

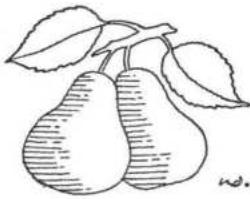
スカンジナビア3国の中最も教育改革に熱心なスウェーデンの新しい学制と外国語教育について、すこし詳しく記してみよう。

〔略字 E=Englisch, G=German, F=French ; アラビア数字は毎週の授業時数をあらわす〕

スウェーデンでは1966年から義務教育が2年延長されて9か年になり、この学校を基礎学校 (grundskola) という。わが日本の小・中を含んだものにあたる。この9か年は同じ一つの学校内で過ごすことになるが、3学年ずつの段階に分けられている。

1. 下級(1～3年) 全科担任する女子教員が受け持つ。
2. 中級(4～6年) 第4学年から英語必修。
3. 上級(7～9年) わが国の中学にあたる。教科教員担任制。
 - (a) 第7学年から選択科目が入る。週35時間のうち、選択教科にあてる時間は
 - (1) G. or F. 5時間
 - (2) G. or F. 3時間+タイプ 2時間
 - (3) 技術科 5時間
 - (b) 第8学年選択教科週7時間、これを次の如く配分する。
 - (1) G. or F. 4+E. 3
 - (2) G. or F. 2+E. 3+タイプ 2
 - (3) 家政又は音楽及び美術 4+E. 3
 - (c) 第9学年—コース分化が導入される。
 - (i) 進学コース→G. or F. 4+E. 3
 - (ii) 人文コース→同上
 - (iii) 社会・経済コース→家庭及び社会知識 4+E. 3
 - (iv) 技術コース→技術のオリエンテーション 4+E. 3
 - (d) 商業コース→商業知識 4+G. or F. 2+E. 3

高校 (gymnasium) (17～19歳) 年限3年、高校卒技術
(p. 41へづく)



日・英慣用表現の比較（3）

—日本文学の英訳作品を資料として—

HASEGAWA KIYOSHI

長谷川潔

I-G 首

『英語表現辞典』（研究社）にも述べられているように、日本語の首ということばには、英語の **head** の意も含まれている。

〔例97〕 It goes on holding your **head** up even when you're asleep.

（君が眠っていても、ちゃんと君の首を支えている。）

『本日休診』井伏鱒二）

〔例98〕 The doctor's **head** shook as he hummed on.

（先生は首を振りながら口の中で語って行った。 *Ibid.*）

〔例99〕 She shook her **head**.

（彼女は首を振った。『千羽鶴』川端康成）

〔例100〕 Her **head** sank to her breast.

（くっと首を落した。 *Ibid.*）

以上の例はいずれも、日本語の首が、頭部と頸（のく）部の両方を指しているのに対して、英語では頭部を **head** 頸部を **neck** と区別して使っているのである。われわれ日本人は、首の上に頭がついているのだから、もとになっている首を動かせば、当然頭も振られていると考えるのだが、英語を使う人々は、頭が振られている方を重視するのである。

また、日本では女性の首筋から肩にかけての部分にセクス・アピールがあるとされていて、日本の文学作品には首筋の美しさを描写しているものが多い。

〔例101〕 She arched her long **throat**.

（長めの首をのばした。 *Ibid.*）

〔例102〕showing the full curve of her long white **throat**.

（色白の長めの首をのばして…… *Ibid.*）

さらに井上靖の『獵銃』には、男性の襟（えり）あしの魅力についてものべられている。

〔例103〕 Very few men satisfy even my two basic requirements; a well-groomed **neck**, as fresh as a section of lemon, and a curve of the loin clean and

strong as an antelope.

（襟足の手入れが行き届いてレモンの切口のようにすかあつとして居り、腰の線が羚羊（れいぎやう）のように清潔でしかも逞しい、このたった二つの条件すら満足に見えた男性はそぞらに転ってはおりません。『獵銃』井上靖）

日本文学では美しい女性の描写として「白く長い首筋」がしばしばとりあげられているのに対して、英米文学の作品に首筋の描写が出てくるのはきわめてまれである。〔例101〕〔例102〕にも示されているように、首を **throat** と訳して首筋と喉（のど）もととを区別している。首に関連した習用句では、「ほれこんでむちゅうになる」ことを日本語では「首ったけ」というが、イギリス映画の『あいびき』（*Brief Encounter*）の中に次のような表現がでてきた。

〔例104〕 I'm nuts about you.

（君に首ったけだ）

アメリカ人ならばさしづめ “I'm crazy about you.” と言うだろう。

I-H 肩

肩に関する慣用表現は、日本語にも英語にもかなり多い。日本語でよく使われる肩身が広い（せまい）は、肩とからだの幅の広い（せまい）ことから、proud of～；ashamed of ～の意味で使われる。

〔例105〕 I shall feel quite **ashamed** if I can't say anything about you.

（時に返事が出来ない様じゃ、おれも肩身が狭いから。『こころ』夏目漱石）

英語の be broad-shouldered, have broad shoulders は、日本語の「肩身が広い」と一致する表現であるが、意味の上では違っている。日本語の「肩身が広い」は、「世間に対して面目がたつ」、「体面が保たれる」の意味であるが、英語では肉体的に肩巾が広く男性的な身体を指している。また比喩的には「重荷に耐えられる」の意味で使われる。

〔例106〕 Fortunately he is in a good position and

has broad shoulders.

(幸い彼はいい地位にあるから重荷に耐えられる。

『新クラウン英語熟語辞典』)

肩を使った日本語の慣用表現で「責任を果たす」の意味があるのは「肩の荷をおろす」であろう。

〔例107〕 And with it, he also realized for the first time that he had a sense of relief too, as though some burden of which till then he had been quite unaware had lifted from his shoulder.

(そして、それと同時にまた一方では、今まで思ってもみなかった何か肩の荷が降りたような吻(?)とした思いのあるのを覚えた。『洪水』井上靖)

肩身がせまいので小さくなっていることを日本語では「肩をすぼめる」といい、ふつう shrug one's shoulders と記されているが、しぐさや意味の上で日英語のあいだに「ずれ」があるように思える。英語の shrug one's shoulders は「とんでもない」「いやだ」「しかたがない」など無関心、嫌悪、冷笑のしぐさであって、両手のひらを上にむけて肩をすぼめるしぐさがある。したがって、日本人が「面目ない」の意を表わすために肩をすぼめるのとは違っているのではなかろうか。

「肩をすぼめる」の反対が「肩を怒らす」で威勢を示すしぐさである。

〔例108〕 As she bent toward it, the heavy-boned shoulders fell back.

(手について首を下げると、骨太の両肩が怒って毒を吐くような形になった。『千羽鶴』川端康成)

〔例109〕 She threw her shoulders back.

(怒り肩になった。Ibid.)

同等同位を示す表現に「肩を並べる」または「比肩し得る」という表現がある。

〔例110〕 There are more famous spots for viewing Lake Biwa than you can count on your fingers, the owner of this inn used to say, "but there is no place all up and down the lake shore that is better than Katada for viewing Mt. Hira." In particular, he liked to boast that no view of Hira could compare with the one from the northeast room of the Reihokan Inn itself.

(この主人が琵琶湖を賞するには、三井寺、栗津、石山、その他にも名だたる琵琶湖望見の地は十指に余る。併しこと比良を望むにおいては、湖畔広しといえども、堅田に勝る地はなく、特にここ靈峰館の北東の座敷に比肩し得るところはあるまいと自慢し、……『比良のシャクナゲ』井上靖)

その他、肩に関する表現では、「肩で風を切る」swagger about、「肩で息をする」breath hard などがある。「肩で息をする」にちかい表現として次の例が『新平家物語』の中にあった。

〔例111〕 Kiyomori stood with his shoulder heaving.

(清盛は肩で波を打ちながら立っていた。(『新平家物語』吉川英治)

I-I 手 (腕・肘・爪を含む)

全体的にみて、日本語の方が人体を表わす語彙(い)が大まかに用いられていることは、すでに述べたが、英語の hand は日本語の手と同じように「筆跡」を意味することがある。「字がお上手ですね」をそのまま訳して“You write very well.”と言えば、「文章がうまい」ことになり，“You write good letters.”と言えば「手紙を上手に書く」ことになってしまう。「字がお上手」は You write a good hand. となる。

また、「～から手をひく」はふつう wash one's hands of ～があるけれど、夏目漱石の『こころ』の英訳には、wash のかわりに日本語を直訳した withdraw を用いたものがあった。

〔例112〕 So I let him do what he liked, and withdrew my hands from this problem.

(それで彼の思ふ通にさせて、私は手を引きました。(『こころ』夏目漱石)

英語の wash one's hands of ～はポンテス・ピラト(Pontius Pilate)が、イエスの裁判に關係せぬと言つて手を洗った故事 (....., he took water, and washed his hands before the multitude, saying, I am innocent of the blood of this just person. Matt. 27. 24) からきたものであるが、日本語の「足を洗う」と異なり、「悪事からぬける」という含みをもたない。したがって、和英辞書に「足を洗う」を wash one's hand of ～としてあるのは誤解を招くおそれがある。

〔例113〕 An arrangement that leaves nothing to be desired.

(実に痒(?)いところに手がとどく便利なものが、日本もやがてそうなるのだ。『帰郷』大仏次郎)

この表現は『大和英』にも記載されているが、同じ日本語の表現を訳した次の例は見当らなかった。

〔例114〕 To become blind in middle age must have been difficult enough, and yet he was touchingly solicitous in caring for Shunkin—anticipating her wishes and sparing her every possible inconvenience.

(佐助は眼をついた時が四十一才、初老に及んでの失

明はどんなにか不自由だったであろうが、それでいながら痺い處へ手が届くように春琴を勞わり少しでも不便な思いをさせまいと勤める様は端の見る目もいじらしかった。『春琴抄』谷崎潤一郎)

この **solicitous** は **anxious** の意味で、訳全体でよく原文の意味をとらえていると思う。

「～に近い」の意味の「手が届く」は、『大和英』によれば、**be close (=hard) upon** であるが、次のような訳し方もある。

〔例115〕 This man, a student called Okada, was a year behind me, so he **wasn't too far from** graduating.

(此男は岡田と云ふ学生で、僕より一学年若いのだから、兎に角もう卒業に手が届いていた。『鶴』森鶴外)

「なにもしらないで傍観する」ことを「手を拱(ふく)っている」と言うが、これを逆の立場から英訳したのが次の例である。

〔例116〕 I felt my responsibility.

(手を拱いている訳には行きません。『こころ』夏目漱石)

以上、二つの例は、日本語と英語で、肯定文、否定文の使い方が一致していないが、いずれも原文の意味をよく伝えている。参考までに、「手をこまねいている」は、look on with folded arms; remain an idle (=impassive) spectatorなどの訳が『大和英』に記載されている。

和英辞書のこの訳に近いのが次の例である。

〔例117〕 When a Kan officer came through the gate at the head of seven hundred men, there was nothing for the people within to do but watch **with folded arms**.

(漢の武将王恢が手勢 700 を率いて、城門をあけて侵入して来るのを、城内の者は手を拱いて見ているよりほか術がなかった。『樓蘭』井上靖)

〔例118〕 By the time this letter reaches you,.....(この手紙があなたの手に落ちる頃には..... Ibid.)

これも意味をくんで英訳されていてわかりやすい。「～に手を焼く」もよく使われる慣用句だが、前後の文脈にしたがって、次のようにいろいろと訳されている。

〔例119〕 I **had** more **trouble** later when Sadamitsu turned radical, but that incident at least had its redeeming features.

(それから数年後に定光の左傾問題で、大分手を焼いたが、この方にはまだ救われるものがあった。『比良のシャクナゲ』井上靖)

〔例120〕 No doubt the servants, who **had suffered**

bitterly from Shunkin's waywardness, wanted to lighten their own duties by having Sasuke spend more time with her.

(大方こいさんの我が儘に手を焼いていた奥の奉公人たちは、佐助にお相手役をなすり付けて少しでも自分たちの荷を軽くしようとした。『春琴抄』谷崎潤一郎)

〔例121〕 Police have been at **their wit's end** in clamping down on the speedsters.

(スピード違反の運転者たちの取締りに手を焼いていた。『天声人語』朝日新聞)

以上三つとも『大和英』には記載されていない。〔例121〕の **at one's wit's end** は「途方にくれて」の意味で、聖書の詩篇 107, 27 (Psalms) They reel to and fro, and stagger like a drunken man, and are **at their wit's end**. (こなたかなたにかたぶきえひたる者のごとくよろばいてなすところを知らず。)からきている表現。

『天声人語』にはこのほかにも手をふくむ次のような慣用表現が目についた。

〔例123〕 He reads these magazines to learn about the **strategies** of the other sex.

(敵方の手のうちを知っておくためである。Ibid.)

日本文と英文を比較してみると、英文の方が前後の脈絡をふまえて訳してるのでその部分だけ読んでもわかりやすい。

〔123〕 But the government office in charge makes an "oversight" and vicious people take advantage of this "oversight".

(役所は手ぬかりをするし、悪質な連中はそれにつけこむ。Ibid.)

この **oversight** という訳は、an omission; a slip; an errorなどとともに『大和英』にも記載されている。

〔例124〕 It's my money. I won't have them **laying their hands on** a single yen of it.

(あれはわしの金じゃ、一銭も手につけ貰っては困ると、わしは言った。『比良のシャクナゲ』井上靖)

これは **touch** とおきかえることもできるだろう。

〔例125〕 Even if he had begun with a casual attempt to **seduce** her, the fact that he had not only **been snubbed by her** but slashed across his manly brow might well have made him seek a really vicious revenge.

(最初一時の物好きで手を出したとしても肘鉄砲を食わされた上に男の眉間迄割られれば随分性悪な意趣晴らしをしないものでもない。『春琴抄』谷崎潤一郎)

「手を出す」という婉曲な言い方が、英語では *seduce* という具体的な表現で訳されている。

〔例126〕 If you want to see a blue sky, there seems to be nothing to do but to go up a high mountain or to find yourself in the country where very few people live.

(青い空を見ようと思えば、高い山に登るか、あるいは、ほとんど人の住んでいないような田舎へ出かけるかするほかに手はなさそうである。『天声人語』朝日新聞)

〔例127〕 But impossible as it was to bring the mice under control, it was still more impossible to let them go on unmolested.

(しかし、いくら手のつけようがないと云っても、そのまま打遣って置くわけには猶(猶)行かない。『鼠(ねずみ)』芥川龍之介)

この訳なども前後の文脈からでてきたものであって、和英辞書をいくら引いても出てこない。

〔例128〕 He would take advantage of the confusion to capture the city that had been the home of his distant ancestors, a city that by rights belonged to Charkhlik, and a city in which there would be troops of the ruined Fu Chien.

(遠い祖先の城邑の地であり、当然鄭善國の領土であり、現在國破れた前秦の部将が屯ろしているに違いない樓蘭を、この混乱期に乗じて手中に収めようと思ったのである。)

〔例129〕 With the British gone, the Chinese had all the goods and all the wealth of the South in their hands.

(富も物質も英國人が立去った後は華僑が一手に収めてゐるからだ。『帰郷』)

〔例文129〕のこの表現は、日本語と英語とがほぼ一致している数少ない例の一つである。

〔例130〕 He was not much of a drinker: lately he had become accustomed to having a little *sake* at supper with Shunkin, but he was forbidden to touch a drop of it elsewhere without her express permission.

(近頃師匠の晩酌の相手をして少しばかり手が上ったけれども余り行ける口でなかつたし、他處へ行つては師匠の許可がない限り一滴と雖も飲むことを禁ぜられていた。『春琴抄』谷崎潤一郎)

日本語の「手が上がる」には improve in one's skill, acquire skill in の意味と「酒量が上がる」の意味と二つがある。『大和英』には become a regular drinker

の訳が記載されているが、この訳を上にあてはめて become a regular drinker of *sake* at supper with Shunkin としても、何となくぎこちない訳になってしまふ。

〔例131〕 When we consider how many people had reasons for hating Shunkin, we can see that sooner or later someone was sure to injure her.

(斯く色々と疑い得らるる原因を数えて来れば、早晚春琴に必らず誰かが手を下さなければ済まない状態にあったことを察すべく……*Ibid.*)

これも、この後で忍びこんできた賊に鉄びんをなげつけられて、春琴が火傷をおう話が続くので「手を下す」を injure と訳したのであろう。このように慣用表現は前後の文脈にしたがって自由に訳されることが多く、和英辞典の訳をそのままもってきててもあてはまらないことが多い。

〔例132〕 If she were to fall into the hands of someone like you, she might not go crazy after all.

(あんたみたいな人の手にかかるたら、あの子は気がいいにならずにすむかもしれないわ。『雪国』川端康成)

「人の手にかかる」とよく似ているが意味が違うのが「ひとの手に乗る」であろう。『こころ』の中に次のような例文があった。

〔例133〕 Before K came, my resolution not to fall into a trap oppressed me.

(Kの来ないいうちは、他(の)手に乗るのが厭だといふ我慢が私を抑えつけた。『こころ』夏目漱石)

日本語の慣用表現が、訳文から全く省略されてしまう場合もある。

〔例134〕 They haven't found the bodies yet. All sorts of people have been helping, and you ought to show your face.

(兄さんたちの死体は、まだ発見できないんです。随分多くの人が手を藉(よ)しててくれています。その人たちの手前もあります。ホテルの方にお父さんも顔を出して下さい。『比良のシャクナゲ』井上靖)

英訳文の方では「その人たちの手前もあります」が完全に省略されてしまっている。この「手前」を次の例文では in front of ～と訳している。

〔例135〕 In front of my father who was dying, I had to worry myself about the thing that I did not at all care about.

(私は死に瀕している父の手前、私のちっとも頓着していない事に、神経を悩まさなければならなかつた。)

『こころ』夏目漱石)

〔例136〕 She told me politely that the sensei was accustomed to **visit** a certain grave in Zoshigaya on that day every month.

(先生は例月その日になると雑司ヶ谷の墓地にある仏へ花を手向けに行く習慣なのだそうである。 *Ibid.*)

「花を手向ける」が単なる visit だけでは充分でないような気がする。次の例は、英語の訳が、日本語の原文とほとんど完全に一致していると言えるだろう。

〔例137〕 Mr. Kennedy cannot accomplish anything alone. Soviet Premier Khrushchev, who bears much of the responsibility for the peace of the world, should voluntarily **extend a warm hand** in the quest for peace.

(が、それは「一人芝居」ではできぬことで、世界平和に大きな責任のあるフルシチョフ首相らも「平和の探求」に進んで暖かい手をさしのべてもらいたいものだ。

『天声人語』朝日新聞)

〔例138〕 It appears that this man you told me was dead has returned unannounced to Japan. Or rather, now that he need fear no punishment for the vile crime he committed, he has been able to come back **like a gentleman**, I suppose.

(お前が、もう死んだやうに云っていた男が……何のこともなく帰って来たものと見える。いや昔犯した破廉恥な罪も、今日となっては咎められる心配もなく、大手を振って帰れたというのだろう。『帰郷』大仏次郎)

「大手を振って」は和英辞書には triumphantly ; in triumph ; with impunityなどの訳語が記載されている。ここでは、前に vile crime he committed という表現があるので、 criminal としてではなく gentleman のように帰ってきたという意味であろう。

〔例139〕 Sometimes he could not be satisfied with only changing the position of his face, so first **resting his head in his hands**, then putting his finger to the tip of his chin he would peer persistently into the glass.

(どうかすると顔の位置を換えるだけではがまんできなくなつて、頬杖をついたり頤の先へ指をあてがったりして根気よく鏡を覗いてみる事もあった。『鼻』芥川龍之介)

頬杖をつく様子が具体的に描写されていてわかりやすい英訳だが、この英訳によつても日本人が顔と頭を区別して使っているのに、英米人は首から上全体を頭として考えていることがよくわかる。

以上、手に関する慣用表現をいろいろあげてみたが、次に腕、指、爪などに関する表現の訳例をみるとしよう。

〔例140〕 She **pulled up her sleeve**. Two fine letters, "M. S." had been tattooed in red.

(女は二の腕をまくって見せた。花文字でM Sとイニシャルを刺青してあった。『本日休診』井伏鱒二)

「そでをまくって腕を見せる」のだから、英語の方が日本語より論理的である。腕に関連して、「腕比べ」は和英辞書では a trial of ability としてあるが、永井荷風の同名の小説は **Geisha in Rivalry** と本の内容を示す英訳になっている。「腕を磨く」もよく使われる慣用句だが、これは『大和英』にある improve one's skill in ~でよいだろう。

〔例141〕 When the doctor came back into the waiting room with the receipt, Officer Matsuki was asleep at the table, **his head on his arm**.

(受取証を持って控室に行くと、松木ボリスが今度はテーブルに肘枕をして居眠りをしていた。 *Ibid.*)

肘を elbow と訳さずに arm としたのは頭を、どこがささえているのか、という考え方の違いであろう。

〔例142〕 My world completely changed **in the twinkling of an eye**.

(私の世界は掌を翻すように変りました。『こころ』夏目漱石)

この in the twinkling of an eye は、「またたく間に」、「たちまち」の意味で、これも聖書コリント前書(1 Cor. 15 : 52)から来た表現である。In a moment, in the twinkling of an eye, at the last trump: for the trumpet shall sound, and the dead shall be raised incorruptible, and we shall be changed.

(終のラッパの鳴らん時みな忽ち瞬間(まばたき)に化せん。ラッパ鳴りて死人は朽ちぬ者に甦へり、我らは化するなり。)

〔例143〕 There are **more** famous spots for viewing Lake Biwa than you can count on your fingers.

(この主人が琵琶湖を賞するには、三井寺、栗津、石山、そのほかにも名だたる琵琶湖望見の地は十指に余る。『比良のシャクナゲ』井上靖)

この訳例も、日本語と英語の発想がほとんど一致しているものと考えてよかろう。

次に「爪に火をともす」という表現を三つの違った訳し方で処理しているのをみてみよう。

〔例144〕 We often hear that misers will even skin flints, but men who make large fortunes by thrift

are no uniform in their behavior

(一口に爪に火をともすなどとは言うが、金を溜める人にはいろいろある。『鷺』森鷗外)

ここに使われている skin a flint は火打石の皮をはぐほどけちをするの意味で日本語の「つめにでも火をともす」にぴったりとあてはまる。

[例145] Some of the most covetous are thrifty in every aspect of living, yet a few give themselves a breath of fresh air by leaving a loophole in their tight moneybags.

(それを絶望的に自己の生活の全範囲に及ぼして、真に爪に火をともす人と、どこかに一つ穴を開けて、息を抜くようにしている人がある。Ibid.)

ここは同じ表現が続いているので、訳者が訳語をかえて同じ意味をあらわすようにしたのであろう。次に、『春琴抄』の中からひろった例文を見てみよう。

[例146] In Shunkin's household, she alone lived

royally; Sasuke and the others had to live like mice in order to cut expenses.

(彼女の家庭では彼女一人が大名のような生活をし佐助以下の召使は極度の節約を強いられるため爪に火をともすようにして暮らした。『春琴抄』谷崎潤一郎)

この live like mice は as poor as a church mouse のように、熟語として辞書には記載されていないようだが、意味はよく伝えていると思う。特に、「飯の減り方まで多いの少ないの」という表現がこのすぐあとでてくるので、この英訳が生きているのではなかろうか。

一般的に言って手に関する慣用表現は日本語・英語のあいだに発想上の大きなくいちがいはないようと思える。目とか髪の場合、日本人と英米人との間に肉体的な違いがあるために発想上のちがいが目立つが、手の場合にはその機能とか肉体上の違いがほとんどないためにくいちがいが少ないのであろう。

(お茶の水女子大学助教授)

(p. 31 よりつづき)

も側面から援助しました。ルーマニアのチャウシェスタ議長も側面から援助をした、いろいろなことがあったけれども、キッシンジャーの訪中やニクソンの訪中が可能であった、といえると思います。つまり agree to disagree というのもひとつの立派なコミュニケーションであり、意志疎通なのです。

ところが日本の場合、もののあわれみたいなことで何か知らないけれどもやたらにお互い寄りそって、言うことも言わない、議論はしない、dialectics は一切展開しない、きらわれるといやだ。七分は腹芸でやりましょう。てなことを言っているわけです。もちろんそこには相手の意のあるところを忖度するという日本人一流のやさしさのようなものがあることも事実です。日本人ていうのはいいなあ、としみじみ思われる面です。しかしそこに欧米的なコミュニケーションが生ずるわけがない。もたれ合いということとコミュニケーションということは違います。

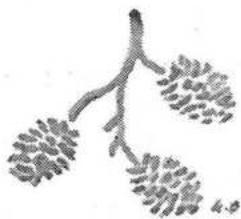
しかしながら dialectic であるということは、日本の社会においてはやはりいろいろな摩擦とか抵抗を生ずるのは火を見るより明らかであるとすれば、ある意味におけるギアチェンジ、ある意味における二重人格、ある意味におけるパーソナリティの変身というようなものを英語の場合と日本語の場合に分けてする必要があるのでなかろうか。それにわれわれにとって英語を操る面白さというのは、しゃせんは仮面をつける面白さなんです

ね。そこに仮面と素顔との間のたゆたいがある。それが認識されないといけない。その意味においては英語の学習ということも、ただ単に技術的な側面だけで満足させられることではないのではなかろうか。そしてもしそういう意味での努力が払われ、われわれ自身の心の動きなり日本の心を英語という、かなり目の荒いことばではあるけれども、を使って不十分なりとはいえこれを伝達すべく個人としても努力していくことなしには、冒頭に申し上げたような日本が外において理解されないという状況は今後とも続くと見なくてはならない。日本の置かれている国際的な環境はますます今後厳しさを加えるであろうから、と、以上大体こういうようなことをきょうは申し上げたつもりであります。たいへんにあちこちに話がとびましてお聞き苦しかったり、ご理解のいきにくい面もあったかと思いますが、先生方のご精進を願っておひらきにさせていただきます。(1972年8月18日E L E C 夏期研修会における講演の速記)

(国際商科大学教授)



LET'S TEACH CROSSWORD PUZZLES



One interesting way teachers can inject a bit of fun into the study of English and, at the same time, help their students improve and strengthen their vocabularies is to use crossword puzzles as a teaching medium. The mental activity involved in solving these brain-teasers can form a challenge which will make language learning more enjoyable and more beneficial.

Crossword puzzles are valuable for many reasons. In addition to reviewing the word classes (nouns, verbs, etc.), they can help students become more familiar with synonyms, antonyms, homonyms, affixes, possessives, plurals, abbreviations, tenses, numbers, spelling and pronunciation. This is only a partial list, but it will serve to show the variety of areas in which crossword puzzles can be of worth.

Crossword puzzles for students of English are available from several sources. This bulletin and the English Teaching Forum offer them frequently, and both English Language Services and Penguin Books publish booklets of puzzles.* A resourceful teacher may also borrow puzzles from children's books and magazines published in English speaking countries and adapt them for use by his students.

The method the teacher employs in dealing with a puzzle is especially important. He may simply hand it to his students and allow them to solve it by themselves at home, or he may develop a procedure for using it in the classroom. The former may be called the "solving in silence" method, because it fails to provide either opportunity or incentive for oral English practice. We prefer the latter approach, because we can get

Clifford V. Harrington

our students to use their voices and we can link the solution to what they have been taught in previous lessons.

In our method the students all work together, because they must focus their attention on the same problem at the same time. Thus, even the slowest student has an opportunity to participate in the activity and to contribute to the solution. By referring to the accompanying puzzle, we can show in some detail how this method works. (You should solve the puzzle, before reading further.)

Before the teacher can start a crossword puzzle lesson, he will have to explain some of the terminology involved. In our puzzle, for example, *prefix*, *suffix*, and *abbreviation* might need explanation.

For *prefix*, the teacher might say, "A prefix is a letter or a group of letters that can be added to the beginning of a word to make a new word. In the word *unclear*, *un* is the prefix. We can add *un* to the word *afraid* and make *unafraid*."

The teacher might explain *suffix* this way, "A suffix is a letter or a group of letters that can be added to the end of a word to make a new word. In the word *truthful*, *ful* is the suffix. We can add *ful* to the word *help* and make *helpful*."

In explaining *abbreviation*, the teacher might say, "*Abbreviation* means the shortening of one or more words. The word *company* can be shortened to *co.*; the words *United Nations* can be shortened to *UN*; and the words *very important person* can be shortened to *VIP*."

As we have shown, the teacher should try to explain the technical terms in English and use examples to help the students understand.

After any necessary explanations have been

* See the list at the end of this article.

made, we can go on to the solving of the puzzle. First we remind the students that they must wait until we indicate that they can proceed. Then we hand out the puzzles. Our initial direction might be, "Down (pause) number three." By using the word *down*, we call the students' attention to the correct column of definitions and clues. Our pause gives them the opportunity to select the correct column, so that they can begin together when we tell them the number we wish them to attempt.

After a moment, we call upon a particular student to give his answer. We feel it is better to select students individually than to allow them to answer indiscriminately. Otherwise, a few quick students would tend to dominate the class.

Whether the first student's answer is correct or incorrect, we might ask him to spell it. (With abbreviations and affixes spelling is often necessary.) This offers good practice and sometimes indicates an incorrect answer.

If the student offers the correct answer and it is a word (in this case *honey*), we may provide a sentence with the word in context, using a structure which the students have studied. As an alternative, we might request the student to construct a sentence of his own. In either event, we would ask the whole class to repeat the sentence and, perhaps, suggest others. Examples could be, "That honey is very sweet," and "Is that honey very sweet?"

We base this procedure on two assumptions, 1) words used in context are more valuable than words alone, and 2) students should be able to use the words they discover.

If an answer is an affix, we might have the student combine it with a word to form an appropriate new word and then use the new word in a sentence. Even abbreviations are sometimes pronounceable and useable in sentences. *UN* and *VIP*, mentioned previously, are examples.

If the student we have selected gives an incorrect answer, we may offer him a second chance or call upon another student. If this fails, we might ask for a volunteer.

We might now move to number seven across

and say, "Across (pause) number seven." If the student we have called upon gives the correct answer, *tongue*, we would follow the same procedure listed above.

If no one is able to give the correct answer, we might have the students attack the problem from a different angle. For example, we might have them try numbers two and four down. This maneuver would give them several letters to work with in the solution of number seven across. As a last resort, we might give the answer ourselves and treat it as a new item for the students to learn.

After we have exploited one area for a while, we usually move to another. For example, we might instruct the students to try number twenty down and then number twenty-nine across. In turn, we would go on to other areas of the puzzle. Thus, if our time were limited, each student would have correct answers in several parts of the puzzle to help him complete the solution on his own.

To provide more competition, we sometimes divide the class into teams and keep score of the number of correct answers for each team. In addition, we sometimes alter the rules so that the student who gives a correct answer is allowed to select both the next number and the person to provide the answer.

Of course, there are other ways to exploit crossword puzzles. For example, if we select number nineteen across, *end*, we might wish to have the students try to use the word both as a verb and as a noun. Sentences might be, "The movie will end at five o'clock," and "Did you see the end of the movie?"

One of our cardinal rules is that we never attempt to do too much supplementary work with any given puzzle. Not only might the students' interest flag, but very little of the puzzle would be completed. We try to treat puzzles as a form of entertainment that will sharpen the students' ability in English.

Crossword puzzles are, perhaps, best suited to groups of adults and senior high school students, but they might also be offered to junior high

school students if they are simple enough or some rewriting of definitions is done.

Before we finish we would like to review the categories which we mentioned at the beginning of this article and call attention to some examples in the accompanying puzzle.

1. Word classes—specifically number twenty down, but incidentally most of the other items.
2. Synonyms—numbers one, twelve and fourteen across.
3. Antonyms—numbers nine and ten across.
4. Homonyms—numbers twenty-three down (sew-so-sow) and twelve across (need-knead-kneed).
5. Affixes—numbers eighteen and twenty-two across.
6. Possessives—number seventeen across.
7. Plurals—number two down.
8. Abbreviations—number twenty-seven across.
9. Tenses—numbers one and twenty-seven down.
10. Numbers—although there are no numbers



ACROSS

1. Hurry
5. Preposition used with No. 9 Across
7. You use this to pronounce the *th* sound.
9. Opposite of *midnight*
10. Not false
12. Require
14. Monkey
15. You need one to open a lock.
16. Too
17. Possessive form of *he*
18. Prefix meaning *two*
19. Finish

listed as words in the solution to this puzzle, numbers are an integral part of any crossword puzzle.

11. Spelling—the correct spelling of words is an integral part of the solution to this or any crossword puzzle.
12. Pronunciation—pronunciation practice is offered each time the student gives an answer. Also, as we have suggested, sentences can be constructed for practice.

As our title suggests, let's teach crossword puzzles. But let's use them as creatively as we can to make our lessons more interesting and useful to our students. (Instructor, ELEC Institute)

Allen, W. P. *Easy Crossword Puzzles*, Washington, D.C.: English Language Services, 1956
More Easy Crossword Puzzles, Rockville, Maryland: English Language Services, 1970
Broughton, G. *Crossword Book*, Harmondsworth, Middlesex, England: Penguin Books, 1969
English Teaching Forum, Washington, D.C.: United States Information Agency (Available through ELEC in Japan.)

22. Suffix used to form adverb
23. Very thin
26. You might ride this to school.
27. Abbreviation for *Dutch*
28. Used to make flour
29. No more than; without others

DOWN

1. Past tense of *run*
2. Rocks
3. Bees make this.
4. Conjunction
6. You get wood from this.
8. To clean marks from a blackboard
11. Preposition
13. Every day
15. You might do this to a soccer ball.
20. Adjective form of *dust*
21. My birthday is — July 10th.
23. You can do this with a needle and thread.
24. Frozen water
25. Negative
26. A kind of sweet roll
27. Present tense of *did*

The solution to this puzzle may be found on page 60.

比較文学への招待

—福田陸太郎著『西洋の影の中で』によせて—

ELEC 選書, 222pp.

ELEC 出版部, ¥580

SUZUKI YUKIO

鈴木幸夫

フランスのソルボンヌ大学で比較文学を専攻した著者が、ここ数年にわたって書きためられた9編の論考を整理編集したもの。比較文学の成立、理論、方法を概説した原論的なものから、日本文学と外国文学との交流影響の関係を、著者の経験を織りこんで、事実を実証的にたどった各論的なもの、さらに巧みな座談でも聞いているような興味ある講演に至るまで、非常にヴァラエティに富んだ内容をふくんでいる。近代日本の学問・藝術に投影している「西洋の影」を探究することによって、それが日本文化を進展させた足跡の様相を啓示するとともに、日本の伝統的な姿をも再認させる意図をもふくんでいる。著者のあとがきにあるように、「本書は、そういう西洋の影の中に生まれた文学的現象を、言わば比較文学の視点からのぞいたいくつかの論考」から成っている。

はじめの「フランスの比較文学」と「一つの比較文学的方法」では、とくに著者が専攻したフランス派の理論を中心に、比較文学とはどういう学問であるかを、平易に明快に紹介している。比較文学とは「国際間の文学的関係の歴史」を調べる「若くて美しい學問」という定義から出発して、国際間の文学史、つまり国と国との間の文学関係を、実証的に事実に即して調べる学問・研究の成長を期待している。国際間の文学の影響を実証的に研究するというフランス派の基本的な立場に立ちながら、最近の潮流であるアメリカ派の一般文学、あるいは世界文学、つまり広義の対比研究の方法にも関心を持ち、日本における比較文学を推進させるための研究法を示唆するところがある。「日本の特殊事情にかんがみ、独自の方法論が確立されることが望ましい」としている。

「いくつかの文学にわたって共通の事実」を調べる一般文学と、「人が共通に好む作品群」という世界文学的見地に立つ研究へ拡大したアメリカ的潮流に対して、フランスの比較文学は主力を影響関係の実証にそいできた。テクストに始まってバルダンスペルジェとカレに基づづけられた比較文学は、のち外国のイメージ研究と

か、ジャンルの文学的比較とか、主題の共通の問題とかに新しい展開を見せるようになる。影響の研究、文学的旅行・解釈の歴史から、文学者をめぐる神話的影像の研究へと、比較文学の分野は拡大するが、著者は同時に文学的本質から離れることを警戒して、あくまでカレ教授の着実な実証的方法に将来の発展を予見する。

比較文学的方法として、その理論にポール・ヴァン・チーゲムの『比較文学』を抄訳、なおこの理論を解説した上で、「源泉」研究の応用例に島田謙二の「日本近代文学におけるヨーロッパ的材源」を紹介している。外国文学からの借用の度合いに、実証的な追跡の必要を力説して、ここでも著者の比較文学的研究の態度をうかがわせる。

「吹米における谷崎文学の評価」には、外国文学の鑑賞受容にかならず避けられないミラージュ（誤解）の、興味あるいくつかの例が見られる。たとえば谷崎はアメリカの読者には東洋のロレンスである。『春琴抄』の訳者ハワード・ヒベットは「彼女（春琴）の小鳥に対する愛情は、献身的に彼女に仕えて長い間の苦しみに堪えた佐助に対しての愛情にさえまさっていた」という。しかし本当は小鳥と佐助への愛情の度合いの問題ではなく、春琴の佐助への嗜虐が実は熱愛の裏返しであり、佐助の盲従はそれが佐助の歓喜であるはずで、決して耐えがたい残酷などというものではない。「かれら（荷風、潤一郎）のエロティックな小説の中には言葉の遊びがあったが、しかし、精神も理想もなかった」というログノーワの叙述はあくまでソビエト的観点である。われわれの外国文学鑑賞にも、かならずわれわれの心情を中心とするそうしたミラージュは当然あるのであって、対象を完全な傑作とする批評基準にも、美的条件がかならずしも共通ではない。そこが文学の面白いところで、一流の作品といわれる外国作品がかならずしもそうした印象を与えず、二流三流ときげすまれている作品にかえって感動する場合もありうる。日本文学と外国文学との対比において、同時性と共通性を持つためにも、比較文学の役割は大きい

といわねばならない。

著者の労作になる仏訳『天の夕顔』をめぐって、その刊行事情やフランスにおける反響を、直接見聞した経験談には、同じようなフランス的受容の姿勢が見られる。

「英米文学作品の邦訳の歩み」は著者個人の経験を織りませ、昭和年代の翻訳状況をいくつかのトピックスに集中して具体的である。昭和初年の、いわゆる円本流行の機運に乘じた新潮社の「世界文学全集」、第一書房の「近代劇全集」、岩波文庫の創刊のこと、春山行夫編集になる季刊誌『詩と詩論』、『文学』の役割は、伊藤整編集の『新文学研究』とともに、英米モダニズム文学の紹介にあづかって大きな刺激を与えたこと、シェイクスピアの翻訳、ジョイスの移植の展望、さらに戦後の問題、たとえばチャタレイ事件、『老人と海』をめぐる誤訳と拙訳の翻訳論議など、いわば近代翻訳史的一面を伝えて、ジャーナリズムの打算主義を批判しながら、今後の翻訳の意欲的な企画を求めている。

曲り道はさきにアメリカ文学の翻訳にもあったので、昭和初年の日本文壇では新興藝術派とプロレタリア文学派との同居対立があり、アメリカ文学の翻訳はそのいずれかに色分けされた。左翼的であるか、エロ・グロ・ナシセソスであるかという、時の宣伝に誤解されたことがある。たとえばフロイド・デル『世間知らず』、マイケル・ゴールド『金のない猶太人』、シンクレア・ルイス『本町通り』、ドス・パシス『北緯四二度』、カルヴァートン『不思議な恋人』、ハーゲスハイマー『夜会服』、『アメリカ尖端短篇集・黒人文学集』が同じ双書で出ており、ゴールド、アンダスン、フィッジェラルド、ベン・ヘクト、ドライサー、ヘミングウェイの短篇が尖端という概念で扱われていた。昭和5年に出た「世界大都会尖端ジャズ文学」という15冊の企画を見ると、これは『モダン・TOKYO 円舞曲』(新興藝術派作家14人)、ベン・ヘクト『1001夜・シカゴ狂現曲』、ダニングとアボット『JAZZ・プロートウエー』、スープウとミオナルド『モン・パリ変奏曲・カジノ』の4冊が出ただけで中絶したが、続刊予定書目を見ても、当時の「尖端」という意味がよくわかる。

「比較文学から見た詩」では、厳密な意味での比較文学方法によって、実際に存在したと思われる文学関係を証明する実例である。ボードレールとボー、藤村とシェリー、泣董とプラウニング、パウンドと東洋、エリオットとフランス詩、西脇順三郎とキーツ、カーカップと日本といった項目で、影響の諸形態を探り、すぐれた訳詩が昭和詩人に影響した意味にも触れ、「アメリカ現代詩と日本」では、逆に日本の文学伝統がアメリカ現代詩

に如何に投影し影響を与えているかの、一つの見取り図が与えられる。エズラ・パウンドやエミイ・ロウエルといったイマジズムの詩人たちをはじめ、十数名におよぶアメリカ現代詩人が、どの点でどのように日本の伝統的な詩・俳句に心をひかれているか、またそれがどのようにそれら詩人の創作詩として再創造されているか、いちいち実例を挙げて、日本詩歌のすぐれた伝統が、広く世界の詩人たちの魂を動かしうる普遍の可能性を予想している。

「西脇順三郎の世界」には、もっとも典型的な東西融合のこの稀有な詩人の、詩的世界の解剖がある。この詩人が十分な西欧的教養の上に、東洋人としての感性を融合させていること、西欧の文学者や芸術家から多大のものを吸収していること、蒼白の世界の現出、曲った風景の知的風刺、土俗的イメージを分析して、西脇詩が「永遠の相」を持っていることを結論する。イメージとイメージとの不思議な衝突、不調和なものが並べられて、そこに思いがけない新しい美を生ませる、この詩人の詩法の秘密に、とくに最近の長編詩に見られる外国文学、わけてもジョイス的方法の影響を見逃していない。

最後の一編「英語教師と英語文化」は抽象的議論を避けて、個人的経験が卒直に語られているのが面白い。英語教師が日本の文化全体の中でどの辺のことをしているのかという反省がこめられて、結論をいえば「英語そのものに専心することはもちろん大事だが、同時に英語文化というものを正しく認識し、それを伝達するためには、ほかの種類の文化と比較する必要があるのではないか、同時に英語教師は外国へ日本のものを紹介するという有意義な仕事ができるのではないか。そしてまた個人的な非常に強烈な影響力をもつかもしれないで、大いに自重しなければいけないということ」になる。その話の道筋に、坪内逍遙の「比照文学」講義筆記の発見調査をめぐって、比較文学という実証的学問をするための、目や手を使って目立たない努力をする学者の苦心、英語を通じて英語文化を知ることのほかに、ほかの国の文化と比べてイギリス文化をはっきり知りることの、比較的重要性、英語かぶれの愚かしさ、個人教師の影響力といった話が、具体的に平易に述べられていて、著者とお茶をのみながら座談を聞いているような楽しさがある。

比較文学という学問がいろいろ偏見や誤解にゆがめられていた時代は去ったが、この若い美しい学問の理論・方法・意義・価値、あるいはその楽しさを、この本は初学にもよく分かるように説明してくれる親切さがある。

(早稲田大学教授)

『英語冠詞活用辞典』

金口儀明著 大修館書店刊
xxiv + 343頁, ¥1,000

HARAGUCHI SHOSUKE

原 口 庄 輔

本書は、著者が長年かけて完成させた活用辞典で、文字通り労作と言ってよい。本書の特徴・長所等については、すでに、関根(1971)および斎藤(1971)で充分に紹介されていると思われる。そこで、本稿では無用の重複をさける意味で、本書の問題点、欠点とも言うべき側面に焦点を絞り論じたいと思う。本書の問題点は、大きく分けて二つあると思う。その一つは、博物学的手法による研究の限界とも言うべきものであり、もう一つは、誤訳・悪訳に関するものである。以下、この順に取りあげてゆくことにしたい。

博物学的手法と言うのは、たとえば、貝の標本を作るために子供が手当たり次第、目に付いた貝を集め、それを巻貝、二枚貝というように分類し、そこから、多少の一般的特徴を帰納するという方法である。したがって、得られるデータには偶然が大きく影響する。興味ある用例が見つかる場合もあり、決して見つからないような例もでてくるのである。また、この手法を用いたのでは、たまたま拾い落としたのか、絶対にあり得ないのか、ということもはっきりしないことが多い。

たとえば、audience(聴衆)の項を見ると、例示してあるのは不定冠詞の場合だけである。これでは、定冠詞はとるのかとらないのか、無冠詞の場合があるのかないのか、冠詞をとるときと、とらないときとの違いはどうなるのか、というようなことは、すでにわかっている人にしか、わからないことになるであろう。Audience(聴衆)という名詞は普通名詞であり、可算名詞であるから、

- (1) an audience
- the audience
- audiences
- the audiences
- *audience

のようなパラダイムとなる。すなわち、冠詞は、定冠詞・不定冠詞のいずれもとりうる。また、複数形にすれば、無冠詞の場合が可であり、定冠詞も可である。しかし、単数形で無冠詞の場合はありえない。ただし、be

recieved in audience(拝謁を許される)というような場合は無冠詞であるが、これは意味が違い、当然別のパラダイムに属することになる。この種の情報は、いちいち、各項目につけるとわざらわしいので、一般的記述として、普通名詞で可算名詞は、かくかくしかじかの性質を持つということを記述しておき、audienceは、その記述通りであることを示す工夫をしておけばよいであろう。

Audienceにおけるギャップは、定冠詞については、偶然拾い残したものである。また複数無冠詞の例も偶然拾い残したものである。これに対し、単数無冠詞は、この名詞の性質上あり得ないものである。このような情報が得られないのは、辞典としては、欠けるところがあると言わざるを得ないであろう。このような不備は、博物学的、あるいは、収集家のデータ処理方法を一貫して守りぬくことから、必然的に生ずるものである。

たとえば、所有を表わす表現として、

- (2) a. a book/dream/doll of John's
- b. that book/dream/doll of John's
- c. this book/dream/doll of John's
- d. some book/dream/doll of John's
- e. *the book/dream/doll of John's
- f. John's book/dream/doll

について考えてみよう。Book, dream, dollはいずれも普通可算名詞であるが、「the + 名詞 + of + 名詞's」とすることはできない。必ず(f)のようにしなければならない。ただし、a book of John'sのようなものが、二度めにでるとthe book of John's that you just mentionedというように言いうことはある。が、これは関係詞が後続しており、(2e)とは違うのである。収集家の態度を押し進めたのでは(2e)のような例は決して見つけることはできないであろう。

同様に、関係詞節を從える場合にも、原田(1971)で指摘されているように、関係詞節内の動詞等により、冠詞をとるか否か等に影響が生ずることがある。たとえば、

- (3) a. The amateurs beat the pros with * ϕ /**a/the*
regularity that was expected.
b. The amateurs beat the pros with * $\phi/a/*the$
regularity that was surprising.

では、いずれも「冠詞+名詞+制限的関係詞節」であるが、(a)のように、関係詞節の中が expect (およびそれと類似の動詞) の場合には the となり、関係詞節の中が、surprising (およびそれと類似の形容詞) の場合には a をとらなければならない。この種の情報は常に得にくいものの一つであるが、英語を書く際には大切な情報である。とすれば博物学的方法だけで得られないものについては、言語学的データ処理方式を導入するばかりでなく、言語学によって得られた知見を取り入れる必要がある、ということになろう。一つの方式に固執せず、色々な方式を利用し記述をより充実させることが望まれる。

次に誤訳・悪訳、あるいは対象としている事柄の性質に配慮に欠けるような訳について見てゆこう。厳密に数えたわけではないが、誤訳・悪訳とおぼしきものは、平均すると、約1ないし2ページについて1個位の割合で存在するという印象がある。もちろん、to err is human であり、人間である以上、ある程度の誤りはやむを得ないのであるが、それでも、少し多過ぎるように思われる。公刊されたものであり、しかも、辞典である以上、不適切・不正確な訳は極力なくするのが望ましい。紙面の関係もあり、気がついたものをすべて指摘することは不可能であるが、比較的重要と思われるものについて前半100頁についてのみ指摘しておきたい。共有の財産としての本辞典を、立派にし、より利用価値を高めるために、少なくとも、訳語の徹底的再検討をされんことを望みたい。(できることなら、言語学的知見をも大幅に取り入れ、全面的な改訂をほどこしていただけなら、本書の価値はさらに大きなものになるであろう。)

pp. 9~10. The chances are that he was apprenticed to some local *trade*. (多分彼はある地方の商売の徒弟になっていた) 「商売」ではなく、おそらく「同業者、酒屋など」のうちのいずれかであろう。～になっていた→～になっていたことであろう。/p. 10. The nights were certainly a strange experience. (夜はたしかに不思議な経験であった) 夜は→その夜は、とすべきであろう。/p. 17. I venture to say that the power to take licking is better worth having than the power to administer one. (負ける力はやっつける力よりも持ちがいがあると私はあえて言う) 負ける力→負けておく能力。やっつける力→人を支配する能力。/p. 17. The temptation to see Mildred was irresistible. (ミルドレッドを見よ

うとする気持はたえがたかった) →ミルドレッドに会いたいという気持は打ち克ちがたかった／をおさえることができなかった。/p. 21. The knowledge that this is so can be prevented from obtruding on consciousness only by some form of lunacy. (これがそうであるということを知っていれば、ある種の狂気によってのみ意識に無理じいをすることからのがれられる) これは、やや直訳的に言うと「氣でも違っている場合にのみ、これがそうであるという認識が、意識のぼっこくるのをさまたげることができる。」となるが、「氣が狂ってでもいい限り、これがそうであるという認識が、意識のぼっこくるのをさまたげることは、どうしたってできない。」とする方がこなれており、わかりよいであろう。上記の2例はひどい誤訳である。/p. 25. He was king—king over all creeping, crawling, flying things of Jude Miller's *place*, human included. (彼は王であった—人間を含めて、ジュード・ミラーのいるところの、あらゆる爬虫類や鳥類の王であった) place はこの場合「屋敷、邸宅」ではないであろうか。Creeping and crawling things とうのは、「地をはいっているもの」という位のところであり、したがって all creeping, crawling, flying things は「地をはい、空を飛ぶあらゆる生物」ということであろう。おそらくこの表現の背後にはバイブルの表現があるものと思われる。

p. 37. That's the trouble with my *line*. (そこが私の専門で問題なのである) *Couples* という題名の作品からの例であることから、line はおそらく、「血筋・家系」とすべきであろう。しかし、「私の商売で困るのはその点だ。」となる可能性も大きい。/p. 37. I hope he isn't any the worse for that dreadful house at Porthminster. (彼がポーツミンスターのあの恐ろしい家のために少しも悪くなっていないことを望んでいます) 下線部は「～にちっともへこたれない：～にまいってしまってはいけない」とすべきである。/p. 42. To me in my innocence the *popularity* of the university boat race seemed to be evidence of an ineradicable veneration on the part of the English people for their oldest seats of learning. (無能のあまり私にとっては、大学のボート・レースの人口は...) 下線部はそれぞれ「無邪気にも私は」「人気」とすべきである。/p. 42. The wish is father to the thought. (願っていると本当に思えてくる) これは、PODによれば we readily credit what we wish true とあるから、ほぼ正確に近いが、「そうあれかしと願う心は、やがて、そうであると思うようになる」とする方がよいであろう。/p. 44.

The Terror was simply martial law in action—a method of enforcing the military defence of the country. (革命恐怖時代は発令中の戒厳令にほかならなかつた—國の武力による防衛を実施する（一つの）方法であった)は、「恐怖政治とは、戒厳令を実施するということにほかならなかつた。(すなわち、それは)國を軍隊の力で守ろうとする(外敵ではなく国内向け)ことを強行するということである。」ということである。/p. 45. Society is the name for such hollow gentlemen and ladies. (社会というものがそういううつろな紳士や淑女の名称である) → 社交界といふのは、そのような内容のない紳士や淑女(の集まり)に対してつけられた名称である。/p. 46. Enter now upon the Middle Way, which is the path to Freedom. (今中間的な道につきなさい。それが自由への道であるから) 下線部は「今は中道をとりなさい」位にする。/p. 47. His plans for the defence of England and for the attack on Napoleon are a proof of the value at which he was estimated. (イギリスの防御とナポレオン攻撃の彼の計画は彼が評価された価値の証拠である) → イギリスの防衛とナポレオンを攻撃することに関する彼の計画は、一般に認められていたとおりの価値を示すものである。/p. 47. "Arago, after whom has been named a neighbouring boulevard, declared that doubt was a proof of modesty. (アラゴは、隣りの広い並木街路にちなんで名づけられたのであるが...) 下線部は「近くにある広い並木道は、彼の名にちなんでつけられたのであるが」となる。ひどい誤

訳である。

以上、比較的重要と思われるもののみについて、問題の例文(不要な部分は適当に省略して)を示し、訳語と評者の試訳を加えてきた。しかし、この方法を続けると、膨大な長さになってしまうので、以下は、再考を要すると思われる部分の所在のみ指摘しておきたい。p. 50. attempt の第2例。p. 52. の (14). p. 52. の alert の例。p. 53. の danger の例。p. 55. の making の例。p. 60. の mood の例と time の例。p. 62. の air の例。p. 68. の chance の第3例。同じく第5例。p. 69. の courage の第3例。pp. 69—70にかけての curiosity の例。p. 71. の effort の第3・第4例。p. 74. の ground の例。p. 75. の impulse の第1例。p. 82 の respect の例。同じく right の第1・第3例。p. 88. の suspicion の第1例。p. 92. の [Infinitiv] の2つの例。同じく indicate の第2例。p. 98. の temptation の例。

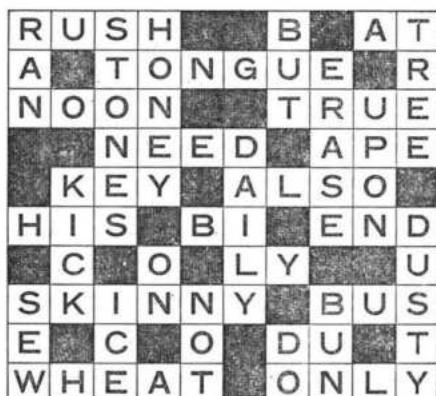
100頁以後も同様な誤訳・悪訳が見られ、手許でしるしがつけたものだけで約90数個はある。一般的傾向としては、少し長めの例文に誤訳が多いように思われる。

(大阪市立大学講師)

REFERENCES

- 斎藤次郎(1971)「新刊書架『英語冠詞活用辞典』金口儀明著」『英語青年』Vol. 117, No. 1, p. 36.
 関根応之(1971)「Book Review『英語冠詞活用辞典』金口儀明著」『英語教育』Vol. 19, No. 11, pp. 93—94.
 原田かづ子(1971)「冠詞と関係詞の相互関係」『英語学』第6号, pp. 86—101.

Solution to the CROSSWORD PUZZLE on Page 55.



PREPOSITIONS

A teacher emphasized his warning by repetition. "Never end a sentence with a preposition," he explained. "This is a rule most writers are guided by. It is one of the principles in grammar that we can't get along without. And it is a practice that all students should stick to."

Ridiculing this kind of unnecessary advice, Winston Churchill once made a note which read: This is the type of pedantic syntax up with which I will not put.

—ELEC; *Introducing Controlled Conversation*

Jiro Taniguchi,

*A Grammatical Analysis
of Artistic Representation of Irish English*

Daniel J. Allman

It is regrettable that Professor Taniguchi, whose industry is to be commended, did not produce a more scholarly and accurate work on Irish English. Such a work is sorely needed, particularly in Japan where students who acquire an interest in Anglo-Irish literature usually through reading Yeats, are often prevented from studying other Irish authors because of the peculiarities of Anglo-Irish.

Professor Taniguchi has entitled his work *A Grammatical Analysis of Artistic Representation of Irish English*. However, he does not confine himself to a study of the artistic representation of Irish English but rather, throughout most of the book writes of Irish English as it is spoken in Ireland. Some of the statements he makes concerning the latter (e.g., "The form /av/ is found all over Ireland, . . . in place of the weak form of 'of' /-əv/ which the Irish cannot pronounce properly." 72.7, p. 245) make one feel that his first-hand knowledge of Irish English is totally inadequate.

A most objectionable part of the book is the introductory section entitled "What is Irish English?" which gives the impression that Irish society, far from being the vast middle-class which it is, is instead a rigidly classed society. Professor Taniguchi's statement ". . . as regards less privileged classes, the higher their social positions the more nearly they approach the standard language.", p. i, reveals his lack of knowledge of Irish society. The university educated in Ireland commonly use such forms as "'You' Placed in Imperative Sentences", 42.1-C, p. 65, and "'that . . . that'", 56. 1-A, p. 123, and perhaps to a lesser extent "'amn't

I'", 48.3, p. 111, although Professor Taniguchi asserts that "What is meant by the appellation of Irish English in this book is the regional form of English heard among the unmistakably rustic or proletarian speakers, of Irish extraction, . . .", pp. i-ii. Miss Bernadette Devlin, university graduate and Westminster M.P. to cite but one example, uses expressions and words found commonly in the north of Ireland and often far removed from the standard language. Taking all of this into account, Professor Taniguchi's constant use of such epithets as "untutored", "uncultured" and "rustic" when writing of Irish English-speakers is, to say the least, unfortunate.

If Professor Taniguchi could only realise that speakers of standard English do not necessarily despise non-standard forms and may indeed on occasion use such forms, then his attitude towards English would be more realistic.

It is to be hoped that Professor Taniguchi will thoroughly revise his work and choose to write either of Irish English as it is found in Anglo-Irish literature or as it is spoken in Ireland. However, if the latter project is undertaken, a long study tour in Ireland is essential. (*Shinozaki-shorin*, 452 pp., ¥3,800)

(Instructor, ELEC Institute)



新刊紹介



■エレック選書

『現代英語60講』

村田 聖明著

読み始めると最後まで巻をおくあわざという種類の本はそうザラにあるものではない。よっぽど面白いスリラーか、すばらしい文学作品なら別だが、ふつうの書物で、途中でやめられないというのは余程のことである。この書物はそういった、極めて珍らしい部類の本である。

著者の長年にわたる「生きた英語」にかかわり合ってきた豊富な経験の中から、折りにふれて気のついしたことや信念となったことなどを書き記してあるのだが、その一つ一つが実に面白く、興味深いものだから、つい読まされてしまうのである。

書かれている内容について、全部が全部賛成とはいからぬにしても、我が意を得たりと思うことの方が多く、また今まで気がつかなかったことを指摘されて眼を開かれる思いをする方が多かった。例えば第1章の「汚い英語」こそ本当に「生きた英語」と信じている人間の多いことを指摘された点などは、そういう実例を知っているだけになおさら共鳴するところが多かった。俗語や卑語ができるだけ多く使って品のない英語を書く連中が、われこそは英文の達人なりと自認しているのは、見ていて片腹痛いものである。通訳の難しさを扱った数章もおもしろかった。

通訳の誤りが実際に人命を奪ったり、一生直らぬ怪我をさせたり、実際ひとごとではない。日本でトップを行く同時通訳で筆者の尊敬あたわざる人物でも、ある時全然逆の意味に通訳する誤りを犯すのを見たことがある。

ペタぼめでも八百長と思われるところから、1, 2の疑問の点をあげておく。第15章で、日本語と英語では共通の母音も子音もないと断定されたのは何故か。第60章で、英語より日本語の方が冗長だとしたこと、第52章で感情や気分を複数のものと受けとめる日本語の例として、「ゾクゾク」「ワクワク」などの副詞をあげられたのはいかがなものか。発音にもやかましいはずの著者が「グラハム・グリーン」と書かれたのはなぜか、などである。

(ELEC 出版部 B6判 194頁 ￥580)
(毎日新聞編集委員・英文毎日社説担当 横川信義)

■エレック選書

『生命の色』

高橋 源次著

E L E C 選書の高橋源次博士著『生命の色』を読んだ。文芸、自然、英國人、文化、人生、教育、宗教の7章に分けて、67篇の短い隨筆が集めてある。古いものが1936(昭11)年、新しいのは1972(昭47)年である。たいてい雑誌新聞に寄稿されたものだが、読んだ記憶のあるものは殆どなく、中には服飾雑誌への寄稿

もある。

まず、その平明直載な文体に心を惹かれる。わたしは50年近い交際だが、こんなに文章がうまいとは知らなかつた。第2に感心したのは、実によく読み、よく覚えていることである。学生の頃から1時間に英文で10ページ読むといつてはいたが、ギリシア・ラテンの哲人から、世阿弥や道元に至るまで、博く深く読んでいる。第3に、これが最も優れた点だが、彼の思想が実に稳健で円満であることである。これは自然と文化、科学と文学、個人と社会、部分と全体といった対立を、常に広い立場から総合的に眺め、調和ある全体として捕えようと努力している結果で、必ずしも常識的ではなく、実に核心を適確に見抜いている。わたしの知る限り、クリスチャンは偏狭だが、彼にはそんな点は微塵もない。まったく見あげたものである。第4に彼の深い教養はイギリス人から大きな影響を受けている。彼のロンドン留学やゴルズワージ研究の結果だろう。英國の郵便の信頼性、ティータイム、センス・オヴ・ユーマを語るのを読むと、いかに彼がイギリス紳士であるかがよくわかる。彼の思想の円満さもそこに根ざしているようである。最後に、彼の言葉や考えの背骨となっているのは、彼の母校同志社と、彼が半世を捧げた明治学院の「精神」であることが、しみじみと感じられた。まったく楽しい得たい本である。一読をおすすめしたい。

(ELEC 出版部 B6判 230頁 ￥580)
(関西外国語大学教授 楠垣 実)

■エレック選書

『文学と語学との間』

齋藤 勇著

最近にいたるまで、折ふし新聞・

雑誌類に著者が寄せられた多数の稿（講演も含める）の中から、長短まじえて49篇を選んだ【隨想・論文集で、内容は次の5つに区分してまとめられている：I. 英語学習および英語教育（7篇）II. 特種な単語（10篇）〔翻訳に関するもの、特殊な複合詞などを含む〕III. 英文学、その関係の辞書など（10篇）IV. キリスト教書（5篇）〔*New English Bible*, 讀美歌等〕V. 断想（17篇）〔「年頭の読書」「少さな親切」「干し柿」「秋のうた」大学セミナー・ハウス標語解説等〕。英語教育に携わる人々、および外国文学として英文学を学ぶ人々に対して、聖書、讀美歌等を通じてのキリスト教の理解をはじめ、広い教養・視野の必要、とくに古典の教育的価値を説くと同時に、バランスのとれた英語学（philology）の位置づけ（pp. 10, 127 etc.）などが、この選集の重点のように感ぜられる。

著者の専攻分野は、英文学を主とした文学であるが、文学鑑賞の前提として、言葉の釈義に対する著者の厳正な姿勢が注意をひく。多角的分析、多くの実例を参照して妥当な解釈に達しようとする態度は、実証的語学者の態度でもある（'Natural Magic', 'Genial Spirit', etc.: pp. 72—93, etc. ただワーズワースの「虹」の結びにある natural (piety) は、「自然に対する」と解するのも理由があるように思われる）。これは市河三喜博士・田中秀央博士等の恩師ジョン・ロレンス博士（同先生の思い出も楽しく読まれる—pp. 115, 150—159）の薰陶によるものと察せられるが、著者が「訓詁の学」を重要視される（p. 244）所以も、この態度と通ずるものがあろう。従って諸篇の内容は、語学者にも文学者にも興味をひくものが多く、本書の題名の意味とも係わりがあるように思われる。

'Bailey's Dictionary' (pp. 133—136) をはじめ、辞書に関連して「Fowler 兄弟」(pp. 160—166) も興味深い一篇である。

著者はかつて良い意味での「象牙の塔」(pp. 100—103 参照) を砦として学究の庭を逍遙されたといえようが、目まぐるしく移り変わる世相に目を蔽うことなく、絶えず新しい動向、新しい必要を察知しておられる。新制大学において、卒業論文を全学生には課さないという提案 (p. 131) はその一例であるが、英語教育についていえば、その効果がいっそうあがるように、著者はこの十数年間、oral approach の普及に貢献した ELEC のためにも、少なからぬ時間と労力を割いて来られた。「英語について理科の学生に」(pp. 26—29) 及び「日本における西洋文学の撰取」のむすび (p. 124) などには英語の運用力を養うことの必要が強調されている。ただし語学学習のために人間が machine にならぬよう、教材の選び方もつねに人間形成 (p. 37) を念頭におくよう注意されている。この意味で W. Mavor の *English Spelling Book* (のちに Kate Greenaway が美しい挿絵を描いた) の解説は心温まる一文である (pp. 48—49)。

これらの諸篇の中には「研究の脚注として書き残しておいたものもあります」と「はしがき」に断わっているが、著者は博覧強記、これからも折にふれ、また求めに応じて泉の如く話題が湧き、健筆を振るわれることであろう。陸軍大臣ホールディンに触れる一篇の中に名が見える外務大臣 Edward Grey (p. 169) についても、また 'Genial Spirits', 'tower of ivory' などの追加項目として 'music of the spheres' (かねて筆者が 'magic' を感じている句) などを中心としても、もしお願いすれば楽しいお話を伺えるのではなか

ろうか。

なお「はしがき」によれば、著者は本書の題を「粒粒皆辛苦」にしようと考へられたが、その含意を憚って現在のように（好題である）されたという事である。著者の人柄がしのばれるが、思い出すことがある。1956年9月、ELEC が英米から学者を招いて英語教育関係の専門家会議を開いた時、開会当日、日本側から著者が代表の一人として誠意あふれる挨拶を述べられた。この時、賓客フリーズ博士は、その英語の立派なことに感銘し、直ちに端然、脱帽して「オーラル・アプローチは、こういう英語のためのアプローチです」と心からの賛辞でこれに答えられた。この時の肅然とした場面は、筆者の記憶に鮮やかに残っている。'good old days' から 'Sturm und Drang' (pp. 94 ff.) を経て 'good new age' へと、著者は後進の幸を願っておられる。

(ELEC 出版部 B6 判 248頁 ¥580)
(国際基督教大学教授 清水 譲)

■エレック選書

『文学のこころ』

高橋 源次著

「文学」と学の字がついているからには、科学の一つと考えられているのだろうが、いったい文学は科学なんだろうか、というのがわたしの長年の疑問であった。高橋博士は本書でそれに答えていて、「人間と人間心理の観察と追求が文学である。その文学の目的に向って文学者は精魂を傾ける。心情を吐露する。その精魂と心情の中にとらわれ、溶け込み渾然一体となること——それが文学を味わうことである。」分析と総合という科学的方法で客観的に観察するという科学的処理では解明できな

いものがある。「直感と情緒とは主観的なものであり、文学はその直感と情緒のリアルなものだからである。」また文学の講義なども、「自分の受けた白熱した感動を学生の胸に送る。それには作品そのものの味読から来る靈感的な以心伝心の方法以外はないのである。」たしかにこのエッセイ集は、文学の「こころ」をわれらに示してくれる。心から納得させられる。

わたしの第2の疑問は、われら外国人である日本人にとって、英文学の研究といえども、要するに英語学ではないか。だから文学を研究するのだからといって、文法を無視・軽視するのは、とんでもない誤りではないかという点であった。これにも著者は答えている。「外国文学をやるものには言葉そのものの障壁がある。これを征服していかなくてはならぬ。そのためには道教の勤行に類するほどの忍苦が必要である。」「これにはやはり精神的ばかりでなしに肉体的ながんばりを要するのである。それこそ作品に四つに取組むのである。」と述べてある。まったくその通りだ。収めるところ、文学論11篇、作品作家論19篇、各篇それぞれ核心に触れていて説得的であり、文章も実に立派である。ほんとにいい本だ。

(ELEC 出版部 B5判 180頁 ¥580)
(関西外国语大学教授 楠垣 実)

■『英語の おもしろい慣用表現』

阿部 宏著

英語の慣用表現を丹念に集め、それと日本語の表現とを囁き合わせた労作である。例としてあげた英文はいずれも現代作家の作品の中からとってきたもので、ほとんどにいちい

ち作家の名があげてある。例えば「紙一重」(It = the laughter = had a strangeness that was only a shade removed from hysteria, and only a little farther from insanity.—H. E. Bates), 「酒が頭にくる」(The whiskey must have gone to her head.—I. Murdoch), 「犬猿の仲」(She and her sister led a cat and dog life together.—C. Brontë), 「散履のごとく捨てる」(He cast her off like an old shoe.—Best Short Plays) といった具合である。

著者はさらに似たような表現をとりまとめて論じている。「寝ても覚めても」(walking or sleeping) の項では、それに関連して fair or foul, serious or not, believe it or not などにも言及する。

一方、例えば There's a good boy. という表現を日本語に直す際に、状況によって、いつも同じ表現では通せないことを、いくつかの例文によって示す。

全篇16章から成っているが、これは和文英訳と英文和訳との、双方の立場をふんまえて書かれたものといってよからう。読みものとして読んでもおもしろいが、やはり言葉を日本語から英語へ、英語から日本語へといい換える際に思い出して参考に使える書という印象が強い。その丹念な蒐集ぶりに感服し、なおこの種の労作を続けられてわれわれのために資するものを発表されることを期待する。

(篠崎書林 新書版 182頁 ¥320)
(毎日新聞編集委員・英文毎日社説担当 横川 信義)

■English Conversation Through Pictures

E L E C 著

本書は書名の示すごとく「絵で英

会話を学ぶ」ものである。普通の会話書では英文の手引きとして日本文がのせてあるところを本書では絵をのせてある。一課ごとに6コマの絵があって、絵を追ってゆくと英文を見ないでも対照のページの英語ができるようになっている。

英語を話す基礎はなんといってもできるだけ多くの表現を自分のものにすることである。そしてそれらを実際の場面で使ってみることである。このどちらがかけても上達しない、ところがまず表現を覚えるということがなかなかの努力を要するのである。日本文を見て英文を言ってみるのもよいが、もっとよいのはその場面を構成する絵を見て英文を言ってみることである。その方がはるかに興味もある。本書ではその絵が従来の絵のように静的なものから抜け出て動きを伝えてくれるものであるということである。それに絵からテキストにある会話以上のこととも読みとれるということである。それがやがては自由会話へと導いてくれるのである。

つぎに心理的にいっても記憶は個別々の互に関連のない表現よりも互に関連のある、できればまとまつた一場面をつくった dialogue の方がはるかに憶え易いのである。本書では各課の第一部(A)で学習した一連の表現を第二部(B)では個別にとり出して文型練習をするのではなく一連の dialogue のもつ story をこわすことなく6通りに応用練習するようになっている。したがって学習者は生き生きとした場面にみずからとけこんで楽しく会話を練習することができる。さらに第三部では短い物語があり今まで習った表現を総合的に練習することができるようになっている。

英文には簡潔で要を得た強勢記号()がつけてあるので学習者はイン

トネーションなどを適確にとらえることができる。

絵で場面を設定し、英会話と組みあわせて楽しく学べるようにしてある点では画期的な英会話のテキストといえるであろう。第二、第三巻がつづいて出版されることを期待するものである。

(ELEC 出版部 B5 判 162 頁 ¥600)
(都立鷺宮高等学校教諭

井田 米造)

■ Speak and Study

石川 達朗 編
中島 文雄監修

本書は最近の教育工学の成果を教材編集に生かし、実際に教室において使用し、学習者の反応をチェックし改善するという地味な積重ねの上に完成されたものである。次に本書を通読して、特色と思われるものを、重要なものから列挙してみよう。(1) 対話文の量が適切であり、crisp な表現をとり上げているので、3 時間の授業で、one lesson を、まとめの段階まで無理なく指導できる。(2) 対話文に関係のあるドリルが段階的に組み込まれているために、会話の不得意な教師でも、テープを併用することによって、生徒を常に、busy and active な状態におくことができよう。

ドリルの種類も、substitution, addition, response, conversion, transformation 等を巧みに組み合わせ、単なるメカニカルゲームに終わらないように意を用いている。これは著者の長年にわたる LL 指導の経験が生かされているものと思われる。(3)本文の four line dialog に対応して左ページに、発話の流れに沿って 4 つの pictures が提示されている。これは、situations の明確化

に役立つ他、OHP 等の機器を利用した種々の活用法が考えられるだろう。(4)このテキスト付属のテープについて一言述べると、テープの質もよく、録音もすぐれている。(5) 各ドリルの指示は、すべてチャイムを用いている。巻末の注は、英々辞典に学習者を慣れさせるための一助として、英語で解説してあるのも有難い。本書は、その「はしがき」において述べているように、production を主目的に編集したものであるが、variety をもたせるいみで、各レッスン毎に 50 語～100 語位の、内容理解に関する教材も入れてほしかった。しかしこれは、担当教師の多少の創意工夫にゆだねらるべき item であるかもしれない。要するに、テープレコーダー 1 台の aid があれば、変化にとみながらも、統一あるドリルによって、生徒の参加性を高めつつ指導できる教本の一つであるといえよう。

(ELEC 出版部 A5 判 126 頁 ¥500)
(県立所沢商業高等学校教諭

飯嶋 信夫)

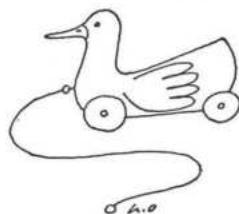
■『外国語教育の指導技術』

F. L. ピローズ著
納谷 友一 訳注

この本は、著者自身の豊富な指導実践と授業観察の経験に基づいて、外国語教育の指導技術を懇切に解説したものである。理論的であるよりはむしろ実際的である。Language Teaching の立場よりは Language Learning の立場により多くの考慮がはらわれている。言語学や心理学上のいかなる理論も、教室における実際の学習場面によって支配されるものであるが、その意味において、いつも成功を約束してくれる万能の公式を求めて所詮はむりであると

している。教授を成功させるためには学習者の心理的・社会的状況を考慮するとともに、言語の中に自身を埋没させて学習させるのでなければならない。教師は自身のクラスにおいても、他の教師のクラスにおいても学習の成功を観察し、その成功の原因を究めることによって自身の指導技術の向上に役立てなければならないと説いている。言語の学習において著者は situation を重視している。言語活動の展開の指導実例も豊富に上げられている。読者は、これら豊富な実例の中から直接役立つものを数多く汲み取ることができよう。ただ著者の体験した教授場面がわが国におけるものでないので、異なっているから却って参考になるということもある反面、わが国の実状にそのままあてはまらないものがあることはやむを得ない。そういった場合には、訳者の親切な解説がついていて読者の疑念を晴らすのに役立っている。とにかく豊富な実例と懇切な解説とで実際に役立つ有益な書であることには間違いない。忠実な訳文であるが、忠実さが却って、翻訳書に慣れない読者には、やや読みづらさを感じさせるかも知れない。

(大修館書店 A5 判 260 頁 ¥1,300)
(ELEC 教務部長 松下幸夫)



ELEC 海外英語研修

(報告)

ELEC とミシガン州立大学の共催、東京都中学校英語教育研究会と日本交通公社の後援で行なわれた「ELEC 海外英語研修」は、次の通り実施され成功裡に終了した。

1. 期間 7月31日(月)～8月29日(火)

2. 研修所 ミシガン州立大学英語研修所

3. 研修内容

(1) Orientation	2 時間
(2) Americana	12 "
(3) Written English	12 "
(4) Linguistics	12 "
(5) Spoken English	12 "
(6) Evening Talks	3 回
(7) Film Shows	3 "
(8) Tests	2 "
(9) Home Visit	1 "
(10) Homestay	2 泊 3 日
(11) Detroit Trip	1 回
(12) Picnic	1 "

4. 講師

Prof. Shigeo Imamura

Dr. James Ney

Dr. Paul Munsell

Dr. Russell Horton

Mr. John Carlisle

Mr. John Schroeder

Miss Sharon Spencer

Miss Kathy Kaigler

Mrs. Nancy Svoboda

5. 旅行

Chicago	1 泊
Niagara Falls	1 "
New York	2 "
Los Angeles	2 "
Honolulu	1 "

7. 参加者による評価

	Excellent	Good	Fair	Poor
Americana	22.7%	63.6%	13.6%	0%
Written English	18.2	63.6	18.2	0
Linguistics	13.6	72.7	13.6	0
Spoken English	27.3	27.3	36.4	9.1
Home Visit	54.5	45.5	0	0
Homestay	81.8	13.6	4.5	0
Picnic	25.0	56.3	18.8	0
Tour in General	31.8	54.5	13.6	0

ELEC 海外研修所感

都立上野高校教諭
柵木常治

全員が合同で受講する午前1時間目の John Schroefer 先生の "Americana" は文学を主とするアメリカ文化概論であったが、帰国後の読書の方針をきめる上に大きな援助となった。同じく全員受講の、午後の1時間目の授業は、James W. Ney 先生による英語教授法概論・英文法概論と、Paul Munsell 先生による視聴覚教材による英語運用能力の練習と、今村茂男先生による英語学習および英語教育に関する概論の3部から成っていた。ほかの2時間（午前・午後の2時間目）は平均8名の構成によるクラス（A～D）別の講読・作文と発音の授業であった。特記すべきことは、Reading の授業において、毎日自由英作文の宿題が課せられたことである。最初のうちは日本から持参したトピックを書いてしのいだが、だんだん書くことがなくなり、なんとかトピックを捏造して書かなければならなくなり、苦しかった。話題がなくなったときに苦心して話題を造り出すことが会話のコツで、この自由英作文が会話の能力をのばしてくれるのだということをつくづく知らされた。

全般的にみて、文型練習の重要さは否定しないが、それのみに終わらず、自己のレベルに合った教材の多読や、徹底的に書きまくる練習を加えていた点が今回のセミナーの特徴だったと思う。また午後の1時間目に行なわれた視聴覚教材による授業（shopping の dialogue をスライドとテープで視聴させてからプリントを与えて解説するものと、スライドで絵だけを見せて各自の想像力にまかせて story を作って言わせるものと、教育映画を見せてからその内容について質問するもの）は4回くらいあったと思うが、shopping とかぎらぎらいろいろな日常会話の dialogue をふやして、これを3週間通したらもっとよかったですのではないかと思う。この授業は苦しかったが、Homestay のときにも役に立った。前述した自由英作文に加えて、夕方のテレビニュースを視聴することも必須の課題とされ、これらの合間に洗たくや買い物、娯楽をするのがうまい人が多かった。街に出てビールを飲む際にも英会話の演習が待っていた。

大学寮での3週間の生活は、外国での生活であるために、短期間であったにもかかわらず人間関係を深めてくれて、有意義だった。友達をさそってボーリングや、卓球や、アイス・スケート、水泳などをやったり、野生のリスが出没するキャンパスを散歩したりした思い出は枚

挙にいとまがない。

講習が終っての1週間の旅行も楽しかった。アメリカ航空の機内で美人のスチュアデスになんとか質問をつけて話しかけてほかの者をうらやましがらせた人もいた。ニュー・ヨーク市に着いたときには、各自が自主性を確立しており、他人にひきつれられてぞろぞろ歩くことをきらうところまで進歩していたように思う。羽田空港で雑貨にもまれて、全員がそろって別れの挨拶ができなかつたことが少しばかり心残りであった。

ミシガンの夏

仙台市立上杉中学校教諭
高橋昌平

緑なすキャンバス、芝生と大木と建物との巧みな調和と対称。木洩れ陽の点綴する草むらに「りす」の時おり遊びに来る広い中庭を囲んで、赤練瓦づくりの校舎が泰然と居並ぶ。それらの間をぬって、東から西へとつなぐいくつかの静かな川の流れ。水とりの羽ばたき、餌づけする子ども……。川べりの丘に、陽を避けた樹かげに、ねそべって互いに語らい合う、男や女たちの安らぎに満ちた姿……。いくどか映画の中でみた「アメリカの大学」のひとつの典型がそこにあったと思う。

手入れのいきとどいた花壇には、サルビアの花が真赤に咲き乱れ、あるいは群れ、あるいは離れて佇むながら、陽光を鮮烈なまでに反射する。あたかもミシガンの短い夏を惜しむかのように、かれらはせいいっぽいにその美しさを競いあつた。図書館、博物館、競技場、ドーミトリのそこかしこには、まさに見るも鮮やかな緑との対比がてん錦として続く。

さんざめく若者たちの声、女学生たちの、華やぐ甘い呼び交し、犬をつれた銀髪の紳士。カールした髪・みごとに着こなした衣服に、悠然とキャンバスの逍遙に時をうつす上品な老婦人たち。そしてなにに急ぐのであろうか、金髪を風になびかせて、音もなく過ぎていくドライバーの、「森の妖精」さながらの風貌……、赤いくちびる、嫣然たる微笑。

朝夕には、たゆたうようなチャペルの鐘の音に、充足と奇妙な焦立ちに、われもなくふととまどいながら、終日はただ夢幻のうちに過ぎていったような気がする。ふりかえってみれば、私にとってミシガンでの研修は、生涯にはまたとないであろう安息と、忘れかけていた青春への回帰を、大学の学生寮に再現する、限りない旅のロマンでさえもあった。

展望通信

◆ ELEC 月例研究会

ELEC 会館を会場としてつぎの通り月例研究会が開催される。入場無料。

第60回 1月27日(土) 2:30~4:30

講演「現代英語の諸相」

ジャパンタイムズ編集局長 村田聖明氏

第61回 2月24日(土) 2:30~4:30

講演「国際感覚と英語教育」(予定)

アメリカ大使館顧問 西山 千氏

第62回 3月31日(土) 2:30~4:30

講演 "Linguistics and English Language Teaching"

ELEC 英語研修所講師 Mr. Richard Moores

◆ 第8回 ELEC 英語教育研究大会

11月4日(土) ELEC 会館において、約200名の参加があり、第8回 ELEC 英語教育研究大会が行なわれた。高橋源次博士の講演「英語教育の指導理念」、Dr. James Stewart の講演 "Asia and the English Language" が午前の部で、午後は和田尚氏(川口市立西中学校)の実演授業と「変形文法と英語教育」という課題で研究討議が行なわれた。なお、Mr. Wilbur Isaacs の英語の歌の独唱がありプログラムに新鮮味をそえた。また、今年度の ELEC 賞は該当者がなく来年度にもち越された。

◆ ELEC 夏期研修会

ELEC 英語研修所を会場として、前期(中学校教員対象、7月31日—8月12日)と後期(高等学校教員対象、8月14日—8月26日)の2回文部省後援のもとに実施し、280名の教員に対し英語口頭訓練と言語教育に関する講義と実習を行なった。

◆ ELEC 夏期講習会

一般成人を対象とする夏期講習会は、前期(7月31日—8月11日)と後期(8月14日—8月25日)の2回にわたり、273名に対して英語口頭訓練を実施した。

◆ ELEC 海外英語研修

ELEC とミシガン州立大学の共催、東京都中学校英語研究会と日本交通公社の後援で行なわれた海外研修は、期間1か月(7月31日—8月29日)、参加者35名、ミシガン州立大学の English Language Center で、所長今村茂男教授ほか8名の米国人教授、講師の指導のもとに、周到に用意されたプログラムにより20日間の英語研修に従事し、その間デトロイトの野球見物、ピクニック

ク、2泊3日の米国人家庭訪問など多彩な経験をしたち、Chicago, Niagara Falls, New York, Los Angeles, Honolulu に1泊ないし2泊して1週間を米国各地の見学に費やし、参加者一同にとりきわめて有益な海外研修が実施された。

なお、1973年のELEC 海外英語研修は、つぎの通り実施の計画で準備を進めているが、詳細については「ELEC 海外研修係」宛に問い合わせされたい。

1. 期間 前期(7月9日(月)—8月7日(火))

学生・成人対象

後期(7月30日(月)—8月28日(火))

教員対象

2. 研修所 ミシガン州立大学

3. 費用 約45万円

◆ ELEC 海外留学試験

海外留学希望者、TOEFL 受験者、海外出張者等を対象とする英語能力検定・診断・指導のための試験が2月16日(金)に ELEC 会館で実施される。受験希望者は ELEC 宛に願書を請求されたい。

◆ ELEC 新刊図書

〔ELEC 選書〕(各冊 ¥580)

『現代英語60講』

村田 聖明著

『生命の色』

高橋 源次著

『文学と語学との間』

斎藤 勇著

『西洋の影の中で』

福田陸太郎著

『文学のこころ』

高橋 源次著

『外国語を考える』

外山滋比古著

〔ELEC 英語講座〕

English Conversation Through Pictures 1 ¥600

同上教師用書

¥800

同上録音テープ(オープン、カセット)全7巻

¥10,500

Speak and Study 1

¥500

同上録音テープ(オープン、カセット)全8巻

¥10,400

英語展望(ELEC Bulletin)

第40号

定価300円(送料85円)

昭和48年1月1日発行

©編集人 中島文雄

発行人 竹内俊一

印刷所 大日本印刷株式会社

東京都新宿区市谷加賀町1の22

電話 (269) 1111 (大代表)

発行所 エレック (財団法人英語教育協議会)

東京都千代田区神田神保町3の8

電話 (265) 8911~8916

振替・東京 11798

ELEC

THE ENGLISH LANGUAGE EDUCATION COUNCIL, INC